

私はソーマのパート
ナー

サンリアフレ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

好奇心本意で荒れていたソーマに絡んだオリ主の話。

- ・原作の時間軸より3年前からスタートしますのでご注意下さい。
- ・じやつかん日常的な描写になります。
- ・原作の設定との食い違いなど不自然な点がありましたらご指摘して下さい。
- ・文字数は6000字以内に抑えるよう頑張ります。

ORIGIN

第1話 セナ S.i.d.e

私のパートナー、ソーマ・シックザールは15歳で体の半分がアラガミだ。

見た目は健康的な褐色な肌に綺麗な光沢を放つ白髪と普通の人そのものでも、彼の体にはアラガミの偏食因子が組み込まれているからだ。

私たちゴッドイーターにも腕輪を介して偏食因子を注入されているが、私たちの持つ偏食因子とソーマの持つ偏食因子は種類が違う。

私たちはゴッドイーターの誕生を成功させた、謂わば主流のもの。

ソーマは理論上人に投与可能と謳っているものの投与実験では全て失敗している危険なもの。

そんな危険な偏食因子を、ソーマは胎児の状態で埋め込まれた。

彼は見事偏食因子に打ち勝ち適合することができ、他のゴッドイーターと一線を画する身体能力や五感を獲得し、さらに腕輪が無くとも自ら偏食因子を生成できる身体になつた。

素晴らしい成果だがその反面、他の誰よりも最もアラガミに近い身体ということであ

り、その異質さ故に周囲から距離を置かれていた。私が知り合った時には”死神”と陰口を叩かれていたほどである。

ただ、私こと邦枝くにえだセナから見たソーマは周りが思っているより悪い人じやない。

特殊な出で立ちゆえに性格は荒く、目には他人を突き放すような剣呑な光が宿つてゐるけれど、ただ人付き合いが苦手で不器用なだけなのだ。

普段は斜に構えた態度でも、任務中に不測の事態に見舞われた時は真っ先に同行者の安否を確認したり、無事に乗り切ったときは心底安堵した表情を見せたりと根は優しい。

それでいて女性ボーカルの歌が好きで、背が小さいことを誤魔化すためにフードを被つたりする。

これはみんなには秘密だよ。

付き合いが長くなればなるほど彼の魅力が解る。

それに、私の振る話に口数こそ少ないもののきちんと応えてくれるし、少しからかってやればすぐに年相応のあどけなさを見せてくれて普段とのギャップも楽しめる。

可愛くて和む存在だ。

「ここに冷やしカレードリンクと初恋ジュースがあります」

「……いつものくだらないじやれ合いか？」

「いやいや、今日は真剣な話だよ。アナグラの職員の間で話題になつててね？　この二

つの商品の売れ行きが芳しくないんだって」

「当たり前だ。誰がそんなゲテモノ買うかよ」

「まあ否定はしないよ。でも、だからこそ惹かれるものがあると思わない？」

「……率直に言え」

「二人で品評会しよう」

「一人でやつてろ」

「ふーん？　もしかしてソーマ君、怖いんだあ？」

「……何？」

私とソーマの間に緊張が走る。

こんなブレッシャーなんてオウガテイルと睨めっこしてるより軽いもんよ。

持ち前の視線の鋭さはいつも増して研ぎ澄まされており、眉間に皺が刻まれる。

こんなチープな煽りでも彼は幼さゆえにキレちゃうようだ。

私が見ればちつちつ弟がムキになつてるようしか見えない。

ただ、常人より遥かに強化されたゴッドイーターたる私の身体と言えど、ソーマの
グーパンは冗談抜きで痛い。

手が出るギリギリを見極めて仕掛ける。

「ふふ、いいよ無理しなくて。誰にでも怖いものはあるものね……。あのソーマ君にも怖いものはあるものね……」

「誰も怖いなんて言つてないだろ」

「そう？ じゃあ品評会しましょ」

「いいだらう」

いつもやつてることだけど、この子素直すぎじゃない？

しかも挑発に乗せられてることに気づいてないご様子。

これでからかい終わつた後にようやくからかわれていたことに気づいてポカーンとするんだから楽しいことこの上ない。

両手に持つた二つのカンをニヤニヤ顔と共にソーマの眼前にぐつと押し出して言つてやる。

「好きな方を選んでいいよ」

「フン」

私の手から冷やしカレードリンクを奪うように取つた。

もし飲むなら私もそちらを選ぶ。

ただソーマの場合、思春期真っ最中の彼には“恋”という単語に抵抗感を覚えるものなのだろう。

ピンクのラッピングが輪に掛けた結果だ。

当然読み通り。

ソーマ検定一級を持つてゐる私に掛かればお茶の子さいさいだ。

「じゃあせーので飲もうか」

プルタブを空けるとぶしゅつと炭酸の抜ける音が鳴る。

そしてソーマのカンからも鳴り、それに違和感を感じた彼が眉を顰めたが、下手に気取られる前に音頭を取る。

「はい！ セーの」

私が呷る素振りを見せてるとソーマも慌てて口を付ける。

私は飲んだフリをしたけど彼は馬鹿正直に飲んだらしい。

液体が舌に乗った瞬間、ソーマは予想外の味に仏頂面から一変させて、驚きと顰蹙をブレンドさせた表情をした。

「ウツ、ツえつ、テメ、これ何だ!?」

「ぶつ、あつはははは！ ほんと可愛いなあ、それ初恋ジユースだよ」

「はあ!? でもラッピングは……」

「そんなの元のやつ外して冷やしカレードリンクのラッピング付ければいいだけじやん

「……あ」

私の期待通りソーマは間抜けな声と共に幼さ満点の呆け顔を晒してくれた。

ここまで予想通りにリアクションされるとさらに嗜虐心が燃られるけど、からかい過ぎると手加減抜きの腹パンが飛んでくるのでフード越しに頭を撫でるだけで我慢する。ソーマはようやく声を掛けられた時から遊ばれていたのだと気づいて顔を真っ赤に染めてカンを紙屑のように握りつぶした。

中身の液体が勢いよく飛び出しだが私はその前に離れていたから問題ない。

もちろんソーマの握る手はベトベトだけど。

「で、どうだつた？ 初恋の味は」

「……ツ、最低の味だつたよクソツ」

ギリギリと歯軋りをしてペちゃんこになつた鉄くずを私に投げつけ、出撃ゲートに足音高く向かつていつてしまつた。

その小さな後ろ姿もおかしくてひとしきり笑い、波が落ち着いたころで自分の初恋ジユースに一口。

「初恋つてこんな味なのかなあ……」

案外イケる味で飲みきつたあとカウンターへ向かう。

「セナさん、あまりソーマさんをからかわない方が……」

「ちゃんとほどほどにしてるよ。それで今日のミッショントリニティは？」
「そ、ですか……。今日のミッショントリニティはソーマさんと二人で『コンゴウ二体の討伐』ですね」

ほんの少し苦笑いしながら応えてくれるのはヒバリちゃん。

最近入ったばかりの私より年下のオペレーターさんで、隣に指導官のツバキさんに付いてもらひながら研修している。
けれどその若さに見合わずしっかりとおり、現時点でもかなり優秀なオペレーターとしてアナグラを支えている。

その愛らしい容姿と相まって男性ゴッドイーターたちの視線の的である。

それはそれで問題ありそうだから私心配。

年の近い女性が少ないとあってヒバリちゃんと友達としての付き合いもあり、度々休憩を共にする仲だ。

「おっかけ。それなら二時間くらいで帰れそうかなー。そうだ、ヒバリちゃん今日暇? リツカと一緒にご飯食べない?」

「すみません、今日は指導の予定が入つてまして……」
ヒバリが窺うように視線を向ける先は鬼教官と名高いツバキ。
当の彼女は無言で私に目線を突き刺してきた。

この顔は『後輩を困らせるなバカ者』と言つてゐるな。

「そつか、それならまた今度だね。いつてきまーす」

「神機の手配は済ませてありますので準備ができ次第出撃してください。いつてらつしやいです」

可愛い後輩に見送られながら私は出撃ゲートをくぐる。

ちなみに移動中どころかミッショントリニティの中もソーマは口を利いてくれなかつたり、想定外のヴァジユラ乱入に遭つたりと散々な目にあつた。

丁度《獣神大牙》が欲しかつたところだから顔面をピンポイントに殴り続けてたらソーマとヒバリさんにドン引きされた。

解せぬ。

しかも出なかつたし。

第2話 ソーマ Side

俺の暫定パートナー、邦枝セナは変なヤツだ。

暇さえあれば手の込んだ悪戯を仕掛けてくるし、頭が空っぽなんじやないかと疑うほど能天気だ。

少し隙を見せれば、からかってバカ笑いしやがるから、絶対俺のことを玩具だと思つてやがる。

だが見境無くというわけでもなく、俺がキレるギリギリのラインを弁えた上で仕掛けてくるから多少の遠慮はあるのかも知れない。

いや、単に俺に殴られたくないだけか。

何にせよ、そちらに歩いてる奴らとは言動からして違う。

俺の出生を知つても態度を変えなかつた数少ない一人でもあるからだ。

他の人間たちとは別の生き物だと自覚してから、自分の身に宿る特別な力を嫌悪するようになつた。

アラガミから摘出した偏食因子をそのまま埋め込んだのだから、人の皮を被つたアラガミ同然の状態だ。

俺の不自然さに気付いた奴らが何らかの動機で俺の素性を調べたのだろう、瞬く間に俺の正体はアナグラ中に広まつた。

支部長の息子ということもあり表立つことはなかつたが、俺に対する嫌悪が根付いたのは確かだつた。

半アラガミの化け物と一緒に任務に就く奴らと連携を取れる訳もなく、不慮の事故に対応できず命を落とす奴が出た。

それが憎悪の悪循環の始まりだ。

いつの日からか”死神”と揶揄されるようになつた。

俺も否定する気は無いし同情されたくも無いから泳がせてはいるが、ただ俺が救えなかつた奴らに申し訳なさを覚えるようになつたのはその頃からだつた。

そんな最低の毎日を過ごしていた俺に、不意に声を掛けてきたのがセナだつた。セナは距離の詰め方が上手い。

好き勝手話しているのを無視しその日要請されたミッショングに意識を傾けていたはずが、いつの間にかミッショングに同行することになつておらず、気付けばパートナーのような存在になつていた。

そして俺もセナと一緒にいるときは自分の内側に蟠る苦悩を忘れることが出来ると思い始めていた。
わだかま

ひよつとしたらコイツは俺の出生を知らないからこんな態度で接してきているのか
と思い、巷で流れてる風評を聞かせてやつても、セナは「知つてたけど、それがどう
したの？」と何故そんなことを聞かれたのか解らないといった顔で返された。

何だつていいから早く背中を任せられるくらいには強くなれと笑つてみせたリンド
ウとはまた違ひ、だからかい甲斐のありそうな人だつたからだけど？ と首を傾げた
セナはやはり変人なのだろう。

まとめるに俺と正反対の人、それがセナだ。

他人と深く関われば迷惑を掛けると口数を減らしていくせいか上手く回らなくなつ
ていた口が、セナの時だけは幾らかはマシになつたと思う。

深く被つたフードの奥から正面に腰掛けるセナを盗み見る。

アナグラでは珍しいフェンリル支給の制服を着込み、護送車に揺らされる煉瓦色の髪
を指先に絡ませ、片足を立たせ大きく丸い瞳を遠くの景色に向けている。

引き締まつた右腕に抱える神機はその華奢な身体に見合わないほど大きい。

大体の女性ゴッドイーターは銃身タイプと適合するのだが、セナは数少ない刀身タイ
プと適合している。

加えて通常なら一人一つ適合すれば良い方の神機を、多くの神機と適合性を示す極め
て珍しいゴッドイーターだ。

こういうところからも変人臭が漂つてゐる。

不意に目が合いセナがニコリと微笑んできた。

これは悪戯を思いついた時の顔だ。

さつきは一杯食わされたからな、もう油断せず付き合わないことにした。

フンと鼻を鳴らしフードを被り直すと、残念そうに頬を膨らませ足を組み替えた。

こうやつて明確な拒絶を見せると驚くほど素直に引く。

お陰で余計な気を使う事もなく、ストレスも感じずに済む。こうして訪れる静寂も心地よく感じる。

そう言えばセナと初めて出撃したときもこんな感じだつたなと思い返す。

あの時はフードの中に回復錠を入れられてブチ切れたようだ。

初対面の人に仕掛けてくるのは流石に非常識だと憤慨したのは覚えてる。

そして、「じゃあこれで顔見知りになつたから、次からはオッケーってことだね！」と曲解されたのも。

第一印象最悪だつたはずが今では常に同行しているのだから不思議なものだ。

セナは人付き合いが上手いが、こと戦闘に関しては図抜けている。

正直俺はおろか、極東の大黒柱と呼ばれるリンクドウにすら勝つているように思える。

普段能天気な態度を取つてゐるとは思えないほど戦闘中は冷静且つ大胆なのだ。

かと言つて独走するというわけでもなく、むしろ周りと波長を丁寧に合わせてくる。お陰で俺が”死神”と呼ばれる原因が協調性に欠けることにあると気付けた。もつと早く気付けていれば死なずに済んだ奴もいたと思う。

そう確信するほどセナの戦闘技術は卓越していた。

『作戦エリアに到着しました。速やかに作戦を遂行してください』

小型インカムからヒバリのオペレーションが聞こえたと同時に護送車から飛び出す。セナは俺の一歩手前で『贖罪の街』と呼ばれる廃ビル群を眺めた。

「ソーマ君、ここに来ると初めて一緒にミッショントークのことを思い出さない？」

奇遇なことにセナも過去を追憶していたようだ。

努めて仏頂面のまま目の上にあるセナの顔を見やる。

「お前がうるさかつたのは覚えている」

「もし、ずっとセナって呼んでつて言つてるのに呼んでくれないよねー」

別にそう呼ぶこと自体が嫌なわけではない。

ただ、気安くセナと呼ぶには自分があまりにも汚れているだけだ。

必要以上に親しくならないほうがいい。

俺の内心を知つてか知らずかニカツと笑つて「気が向いたときにでも呼んでよね」と

囁くように言い、先に歩き出してしまった。

その背が尊くて、そして遠くて。

多くの借りを返した、その時に呼んでやる。

小さく決意した俺は戦場に駆け出した。



やはりセナは変人だ。

あの巨大な神機を棒切れのようにブンブン振り回しては、神機との適合率が高くないと発動できない熟練者にのみ許された『チャージクラッシュ』を難なくぶつ放してた。

神機のオラクルを高度に活性化させなくてはならない分、自身のスタミナも大幅に削られるはずなのだが、軽く十回は撃つていたな。

新兵殺しの渾名を持つコンゴウの顔が、泣きそうになるくらい物理的にぐちやぐちやになっていた……。

頭を抱えて怯んでいる最中にも淡々と撃ち込むセナに、どちらが上位者なのかわからなくなつた。

俺が倒し終えた頃には周囲のアラガミは全滅していたし、何をどうしたらそうなる。

マニユアルなぞそつちのけで暴れ回るのはついていくのも大変だからやめてほしい。作戦開始から僅か二分で完遂して、当然のように SSS 評価。

ほぼセナのアシスタンントのおかげだったことが自覚できるのが余計に腹立たしい。

加えて作戦エリア周辺に確認されなかつたヴァージュラが死角から突然襲い掛かつて、見向きもせずに避けてみせ、そこからは不意打ちの仕返しと言わんばかりに顔面を執拗に斬り続け、ヴァージュラが倒れる頃には見るも無残な顔が仕上がつていた。

アラガミの顔に怨みでもあんのか。

一小隊で討伐に臨むのが通常のヴァージュラを片手間に始末する様子に、無線越しのヒバリすらも啞然となり無言になつていた。

決意して早々にこの有様では俺も何も言えなくなり、セナが何か話しかけてきても上の空になつてしまつた。

やはりコイツは変人だと再確認した瞬間だつた。

第3話 リンドウ s.i.d.e

奴さん——邦枝セナは変わった奴だ。

奇抜な格好をしている奴とか、遙かに年下の女子に言い寄る奴とか、入隊して早々上官に向かつて平気で報酬の釣り上げを要求する奴とか。

挙げたらキリがないほどアナグラに変人はいるが、セナはその中でも異彩を放つている。

まずゴッドイーターとしての奴さんは、一言で言うなら超人だ。

一般に、神機は二ヶ月から三ヶ月ほど体に馴染ませる必要がある。

いくら偏食因子が人体と神機の仲介を果たしてくれるとはいえ、人体からすると急に未知の細胞が自身に侵入してくると感じるわけで、人体の神機に対する拒絶反応を示す期間があるからだ。

その期間中いくら神機を握ろうとうんともすんとも反応しない。

だがセナは腕輪を着けたその日から神機を操ることが出来た。

前代未聞の早さだ。

最も神機と親和性が高いと思われていたソーマでさえ一週間掛かつたのに、セナはそ

の頃には高難易度のミッションをこなしていた。

それも複数の神機を用いて、だ。

そして、セナは全ミッションで同行者の生存率100%を叩き出している。

それも入隊して今日に至る三年間ずつと。

新兵は少なくとも一年以内には同行者を死なせる。

ゴツドイーターは民間人からフェンリルに抜擢された奴がほとんどだ。

突然武器を渡され世界を絶望に陥れた異形の化け物に立ち向かえと言われて、冷静でいられる奴なんざいるはずがない。

特に極東は世界の最前線と言われるほどの激戦区。

技術的にも精神的にも未熟な新兵が誰かを守りながら生き抜けるほど、アラガミは優しくない。

かく言う俺も何人か死なせちまつたことがある。

ついこの間は背中を任せられるくらいには強くなれと講釈垂れてたはずが、今では言われる立場になつちまた。

階級的には奴さんの方が下のはずなのに、おじさん参つちやうね。

そんな超人を支部長が逃すはずもなく。

入隊して一年でエイジス計画とやらの促進剤とするべく特務を発注してたぜ。

俺ことリンドウも特務を受けてる身だが、以前とは比べ物にならんくらいハードな毎日を送っている。

お陰でこの前もサクヤに心配かけちまつて泣きべそかかれた。

それでダメ元で直談判しに支部長のとこに行つたら、いつものポーズで出迎えた支部長が疲れた表情で

「セナ君がもつと特務を回してほしいと言つていてね……。丁度私の方からキミに特務の頻度を下げる旨を伝えようと思つていたところだつたよ」

と言われた時は奴さんの頭を本気で疑つたぜ。

そのことを本人に尋ねたら、ケロつと「神機開発のお金が足りないから」と来たもんだ。支部長はきな臭い奴だと思つているが、こればかりは同情する。

そんなハードワーカーなくせに、よくもまあ毎日ニコニコしてられるなあとおじさんは感心させられる。

いつつも一緒にいるソーマですら特務を受けてると氣付かないくらい元気一杯だ。

別に受けなくとも良いミツシヨンも「今日のミツシヨンコンプしないと気が済まないんだよねえ」とか「ああ……素材足りない……」とか言いながら受注してた姿を見てると逆に心配になるんだが、毎度かすり傷一つ負わずに帰つてくるから呆れる。あと何と言つてもその顔の広さだな。

俺もそなうなんだが、特務を任される奴は部隊に所属しない。

基本的に支部長の駒として働くから縛らない方が都合が良いんだろう。
緊急の戦力補給や支援時にはどこかしらの部隊に参加させられるくらいだ。
つまり人脈が薄くなる。

だがどういうことか奴さんはアナグラの職員はともかく、防衛班や偵察班、拳句には
技術開発班とも親しい。

セナの姿を見かけるとき大抵誰かが一緒にいる。

当然のようにサクヤとも仲が良く、最近ではヒバリの娘ちゃんとリツカの四人で食事
したりしているのを見かける。

まあ、すげえ荒れてたソーマすら手懐けたんだから不思議がるものも無駄か。
そのくせ俺のように有名にならずに、誰かに噂されたりもしない。

他にもあるがこれくらいでも十分伝わるだろうから割愛する。

奴さんが変人であると解つてくれればそれでいい。

今日も今日とてソーマを弄り倒したのだろう、仮頂面でゲートから足早に帰還してき
たソーマの姿を見届けて奴さんが帰つてくるのを待つ。

そして目立つ煉瓦色の髪のフエンリル制服を見つけて軽く手を擧げる。

「よお、今日も楽しそうだな」

「そう言うリンドウは手持ち無沙汰そうだねえ」

ソファに腰掛ける俺の隣をチラリと見るセナ。

そこには誰もいないのだが、セナのニヤニヤ顔を見れば何を言いたいのかくらいは解る。

「今日はお前さんとデートしようと思つてな」

するとわざとらしくズザつと後ずさつて自身の身体を抱くようにして叫ぶ。

「この人でなし！ 女^{たら}誑^{ツバキ}し！」

「おいバカやめろ！ ヒバリの嬢ちゃんに変態を見る目を向けられただろうが」

姉^{ツバキ}上は呆れたようにため息をこぼしヒバリの頭をタブレットで叩く。

その様子にセナは満足そうに口端を釣り上げて体勢を戻す。

毎度似たようなからかいをしてくるが、一応俺は歳も階級もお前より上なんだがなあ

……。

ゴッドイーターに歳の差なんざ関係ないとは俺の持論だが、ここまで気兼ねなく接していく後輩はコイツくらいだ。

ソーマはただの反抗期な。

やれやれと大げさに肩を竦めて見せて本題に入る。

「明後日くらいに例の木を見に行かないか？」

「じゃあ今すぐ行こ。そのはソーマとデートの約束があるから」

休憩も仕事のうちだぞと教えたはずなんだが、どうやらこの子の辞書にはそんな単語は載つてなかつたらしい。

まあ、ミツシヨン終わつた直後の癖に疲れた様子が一切見えないから良いか。

「今日はもうソーマとデートしないのか？」

「アプローチミスつちやつて嫌われちやつた。明日になれば機嫌直してくれるだろうし、今日はいいや」

そう言うとさつさと先ほどくぐつたばかりのゲートに戻つていくセナを苦笑いと共に見送りながら立ち上がる。

横目で姉上に窺うと『手配しておいた』と領きが返される。

礼の手刀を切つて俺もセナの後を追つた。



例の木というのは『アラガミだけ食べる木』アラガミのことだ。

たまたま俺が特務中に発見したアラガミで、保護したのが俺で栽培を提案したのがセナだ。

コロニーに収容しきれなかつた人たちを集めた村の防護壁として試験的に栽培している。

サカキ博士に相談したところ数日で栽培方法を確立してもらい餌を開発してくれた。本部にも打診してくれたそうなのだが、生憎はした資金しか貰えなかつたそうなので、俺とセナが立て直して何とかやつてているのが現状だ。

おかげさまで栽培できる量は少ないが、オウガテイルやザイゴートくらいの小型アラガミは食つてくれているから、村人たちの気休め程度にはなつてているだろう。ヴァジユラを始めとした大型アラガミはもちろん、シユウなどの中型アラガミも食えないのが悩みどころだ。

アラガミの進化速度はどんでもない。

一週間前に見に来たときはそこらじゅう苗床だつたはずが、今では大の大人くらいの高さになつてゐる。

どこまでデカくなるか密かに楽しみにしていたりする。

コイツらの幹にアラガミのコアを液状にしたもの注射器で与えてやれば勝手に育つ寸法だ。

い。
「ここまでデカくなるか密かに楽しみにしていたりする。
コイツらの幹にアラガミのコアを液状にしたもの注射器で与えてやれば勝手に育つ寸法だ。

い。
「リンドウ」
「んー」
「リンドウ」

「ここに畑作つてもいいー?」

「おー。……何だつて?」

聞き慣れない単語が飛び出して思わず声のした方に振り向くと、少し離れたところで俺の方を向かずには餌を与え続けるセナの姿があつた。

「畑だよ畑。もしかして知らないの?」

「あー、あれだろ? 土に野菜埋めたら野菜が採れるヤツ」

「そりや埋めて掘つてるだけなんだから採れるよね……。そうじやなくて、種を植えて野菜を育てるの。この木みたいに」

極東が日本国と呼ばれていた時代ではそこらじゅうに畑があり農業が盛んだつたらしいが、今じやそんなものありはしない。

精々アメリカの一部くらいでしか行われてないだろう。

あそこは土地がバカでけえからコロニーを作つても余地があるし、アラガミも極東よりずつと貧弱だから土壤の維持も現実的。

色々と好条件が揃つてからギリギリ農業が出来るつてわけだ。

ターミナルにそんなこと載つてた氣がする。

脱線したがつまり、今の時代に畑なんて単語をキチンと理解してる人間はほんの一握りというわけだ。

そんな旧時代のシステムを持ち出されたら誰でも首を傾げる。

無言で先を促すとセナは腰をポンポンと叩きながら続ける。

「ほら、ここの人たちの食べ物って配給以外にほとんど無いじゃん？だから自給自足できたら良いなーって思つてさ」

「んな簡単に話が進むんなら今頃どこかの誰かが広めてるだろ。それがないってことは無理なんじやないのか」

「出来るつて博士が言つてたんだよ。ただ極東で広まつてないのは、コロニーに土壤を作る余地が無かつたり、アラガミが烟を滅茶苦茶にしちやつたりするからなんだつてさ」

「アメリカの真逆だからなあウチは」

コロニーに畑つつてもせいぜい五十人分の野菜しか作れないだろう。

コロニーに収容している全員分を作れるなら話は違うが、それにはやはりバカでかい土地が必要だ。

そんな土地を用意するくらいならコロニーを拡大して収容人数を増やした方が良いに決まつてる。

が、ここにいる連中は皮肉にもコロニーに入れなかつた奴らだ。

外壁が無い分、土地に困ることはない。

まあ、いざれこの木でこの村を囲むつもりだからコロニーと似た事情になるが……。
「確かにこの村の総勢つて五十人ちよつとでしょ？ それくらいなら畑を作つても生産的
だと思わない？」

「まあ確かにあ。でも畑つてそんな簡単に作れるもんなのか？」

「調べてみたら結構面倒くさいみたい。それに農具とか肥料とか必要だから、それも
持つてこないと」

「……もしかしてお前さん、それ全部自分で用意する気か？」

「する気つていうか、もうしちやつた。博士とリツカちゃんにお金出して頼んだら何と
かしてくれた」

ようやくこちらへ振り向いたセナは舌を覗かせた。

「おいおい、もしかしてこの前聞いた『神機開発』つてのはそれも含まれてたのか……
？」

「大した博愛つぱりだが、肝心なお前自身が潰れたら元も子もないぞ」

『良い奴ほど先に逝く』

ゴッドイーターの間では有名な言葉だ。

良い奴は色んなことに首を突つ込みがちで、そのぶん危険を被る確率も高くなるから
事故死しやすいつてことだ。

アラガミから新人を庇つた奴。

負傷した仲間のために殿を買って出た奴。

居住区に侵入したアラガミの群れの注意を引く間に立候補した奴。本当に優しくて良い奴らだったのに、みんな死んじました。

もつと俺みたいに自分のためだけに生きることは出来んのかね……。

口に出しちゃいないがソーマも少なからず日々のオーバーワークを気にしてゐるようだし。

そういう思いを込めて言うと、セナは困ったように苦笑いして言つた。

「さつき村の子供たちが配給を食べ終わつた後でもお腹が空いたって言つてきたんだ」

そして苦笑いに僅かな陰が射した。長いことセナの笑顔を見てきたが、初めて見た暗さだつた。

「私つてここの人たちと同じ外で生まれて育つたからさ、辛さを知つてるんだ。

真つ本当に生きることなんて出来ない世界で……盗み殺しは常套みたいな空氣でね。

そういうのはあの子たちに知つてほしくないなつて思つただけだよ」

ゴッドイーターになる奴は自分の出自を無闇に明かさない。

一般人から抜擢されたとは言え、慢性的な食料不足に悩まされている世界で育つた奴らばかりだ。

治安の悪いとこから来た奴も少くない。

言い換えれば、それだけ後ろ暗いことをした経験のある奴らなのだ。いつも楽しそうに笑つてるせいで誤解してたが、やっぱりセナもそういう奴らの一人だつたのだろう。

小さいころから重い肉体労働や無茶な窃盗をやつてきたのだろう。
そうでなければそんな涙が出そうな笑顔は出来ないはずだ。

そうでなければ異常なオーバーワークに耐えらる訳がない。

「……わりいこと聞いちまつたな」

「いいよ別に。あ、でもこのことはソーマにだけは絶対内緒だよ？」

あの子優しいから余計な気を遣わせちやうし、と顔を覆つっていた陰を振り払つた。
代わりにいつものニヤニヤ顔を浮かべて言うのだった。

「でも傷ついちやつたなー。女の子の純真な心が傷ついちやつたなー。悲しいなー。思

わずサクヤさんとのお楽しみの内容バラしちゃいそうだなー」

「よし畠耕すの手伝おう。それで手を打とう」

「ふふ、そういう男氣あるところ好きだよ」

脅迫されたんだがな……。

まあ、今のはさつきのやり取りは無かつたことにしたいという思いを伝えるためだつ

たんだろう。

お互の秘密を聞かなかつたことにして、実にイーブンな取引である。
というか何でコイツはそんなこと知ってるんだ。

そうかサクヤを酔わせて聞き出したな……すぐ酔うからなあサクヤは。
しかも酔つてる時の記憶はないという定番のヤツだ。

大方お食事中に酔つたサクヤが惚気話を披露したつてところか。
後でお仕置きが必要だな。

やれやれとため息をついて餌を与えたその時、苗床に叫び声が響いた。
「リンドウさん！ あ、アラガミがっ！ 村を襲つてきましたあ！！」

この村のリーダー的ポジションにいる、勝手に村長と呼んでいる男性が息も絶え絶え
にアラガミがいるであろう方向を指差しながら走りこんできた。

「解つた。種類と数は？」

「ボルグ・カムランが二体とヴァージュラが一体……」

なるほど、大型アラガミが三体同時はちと面倒臭いな。

しかも今この場にいるのは俺とセナの二人だけ。
頭数も足りてねえな。

……と、普通のゴッドイーターなら焦る場面だが、こっちにはセナがいる。

何とかなるだろ。

「リンドウ、ボルグ一体の足止めできる?」

「バカ言え、二体同時にぶつ殺せる」

「じゃあ頼んだよ」

そう言うや否や、いつの間に準備してたのか身の丈ほどある神機を携えてあつという間に行つてしまつた。

反応早すぎだつての、おじさん今から神機取りに行くんだけど。

不安そうにセナの後ろ姿を見送つた村長の肩を叩いてやる。

「心配ねえさ。奴さんならヴアジュラ倒したついでにボルグの一、二体も倒せる」

「そ、そعدだと言いんですけど……」

気遣いだと思つたのかなおも心配そうに表情を曇らせる男。

見た目はただの元気いっぱいの美少女だからなアイツ。

だけど中身は俺より圧倒的に優秀なゴッドイーターなんだぜ。

俺が着く頃には本当に全滅させてそうだ。



案の定、俺が着いた頃にはボルグ・カムランが一体ボロボロの状態で残つていただけであり、参戦しようとしたときには生きてる状態でコアを強引に引き抜いてしまつてい

た。

コイツ、活動停止を確認してからコアを摘出するのが常套つてマニュアル読まなかつたのかな。

相変わらずハチャメチャやつてくれるなと頭を搔いたところで、コアを失い瓦解したボルグの影から一人の少女が現れた。

それから駆け寄ってきたセナに飛びつきわんわん泣き出した。涙と鼻水で制服が汚れるのも気にせず抱きしめて、「もう大丈夫だよー」と何度も囁きながら頭を撫でるセナ。

どうやら殺す暇もなかつたほどの緊急事態だつたらしい。

セナの迅速な処理により死傷者0人。

こりや完全にやらかしたな俺。

そう思つたときにセナが遅刻した俺に可愛らしい笑顔とともに一言。

「畠仕事一ヶ月タダ働きね」

そうしてしばらくして村の近くの荒野を俺たちと村人総出で耕すことになり、なんとか一ヶ月でそそこの畠が出来上がつた。

ふかふかな土の上で子供たちを引き連れて肥料と種を撒くセナの姿は平和そのものだつた。

だが同時にどこか壊れてしまいそうな危うい気配が感じられた。

精神的にも肉体的にもぶつとんでいるセナに限ってそんなことはないだろうとその時は流した。

完璧超人なんて実在しないと知っているのに、俺はそう思い込んでいたのだった。

第4話 ソーマ s i d e

最近セナの付き合いが悪い。

ジユース詐欺をされた三日後辺りからアナグラで姿を見かけなくなり、顔を合わせても「ゴメン！ 番作らないといけないからしばらく一緒に行けない！」と訳の解らない理由ではぐらかさた。

新手のからかいかと一週間ほど放つておいたが一向にやめる気配が無く、セナの姿を見かけたのはそのはぐらかされた一回きりで、ターミナルにメールを送つてみても返信が返つてこないし、一日中出撃ゲートを張り込んで見つけられなかつた。

お陰で久方ぶりに名前も知らない奴らに怖がられながらミッショソを淡々とこなす日々が続いており、いつも騒がしい奴がないせいで俺の周りは静寂に満ちることが多くなつた。

俺はようやくそこで出会う前はこんなにも冷え切つた日々を過ごしていいたのかと気づいた。

—————氣に入らねえ。もともと俺はこういう境遇で育つてきただろうが。どうせ奴も飽きてすぐ顔を見せるようになる。それまでの……

そして、はたと気づく。いつの間に俺はセナが一緒にいる前提で話を進めているのか、と。

「クソッ!!」

脳裏に過ぎつた甘つたれた思考を消し去るために、近くに転がっていた鎧びれた鉄屑を踏み潰す。

それでも心にこびり付いた寂寥感せきりょうかんを何かにぶつけようと辺りを見回すと、遠巻きに怯えた表情で俺を見る男のゴツドイーターがいた。

その男と目が合つたと同時に無線が入る。

『ソーマさん、大丈夫ですか？』

ヒバリの声を聞いて、そう言えば今はミツジョン中だつたなと思い出す。

ここ数日いつもこんな調子だ。全くミツジョンに身が入らない。

ふとした拍子にさつきのようなクソつたれな考えに耽つている。

——ここは戦場だぞ。いつ何が起こるか解らないところで、なんくだらねえことに気が取られてどうする!? 他の奴より強え俺がしつかりしねえとまた”死神”になつちまうだろうが!!

「……ああ、大丈夫だ」

頭をガシガシ搔きながら吐き捨てる。

無線の奥から言葉を返そうか迷う気配がしたが、すぐにヒバリは『武運を祈ります』と事務的に短く締めくくった。

下手な言葉をかけると逆効果になると判断したのだろう。
コイツ、確か俺より年下だつたな。

年下に気を遣われるなんてみつともねえ真似を晒しちまつた。

「悪い」

「……別に」

ミッショソに同行している男に短く詫びると素っ気無く返事をされる。そしてさつさとアラガミ反応のある地点へ走つていく。

それでいい。

俺は半分アラガミの化け物、本来誰かと仲良しこよし出来る身分じゃない。

セナが常人とかけ離れてただけで、人の皮を被つた化け物にはこういうドライな関係がふさわしい。

『ソーマ君がアラガミでも全然怖くないよ。こんなに可愛くて優しいアラガミが世界に溢れてたら良かつたのにねー』

ぽんぽんと頭を撫でてきながらそう言つたアイツが変なだけだ。
受け入れられる方がおかしいだけ。

これまで何度も拒絶されて、確かめたことだろうが……。

胸に込み上げてきた熱を乱暴に吐き捨てたと同時に奥の通路から悲鳴が響き渡った。

「ちつ、また俺は……ツ！」

不注意な自分に悪態をつき地面を思い切り蹴る。

『ソーマさん、N.O. 3が危険です！ 至急応援に――』

「解つてやる！ 責任は取る!!」

怒鳴り返し全力で狭い通路を駆け抜ける。

悲鳴の大きさ的にそう遠くは無いはずだ。

絶対に死なせねえ……！

通路を抜けた先は開けたドーム状の空間になつており、その中央に尻餅をついた男がいた。

そして男の目の前にはコンゴウが雄叫びを上げている。

よく見れば右足が不自然な方向に曲がっている上に奴の神機は遠くに転がされていた。

「クソつたれえ!!」

怒号を張り上げコンゴウの注意を引き付ける。

聴覚が優れているコンゴウはバカ正直に俺に振り向く。

その真っ赤な顔面にダツシユの慣性を乗せた全力の『チャージクラツシユ』を叩き込む。

致命傷を与えた手ごたえが手に伝わり、そのまま地面を割る勢いで振り抜いた。盛大に砂埃と轟音が立ちこむ視界が回復すれば、引きちぎられた傷跡を晒しながら真っ二つに別れ、ひび割れたコアを剥き出しにするコンゴウが映った。

従来の『チャージクラツシユ』は神機のオラクル活性を促すのに集中する必要があるため静止した状態から解き放つのがセオリードガ、オラクルの扱いに慣れてしまえばダツシユ中に溜めてしまうこともできる。

煉瓦色の髪に教えてもらつた。

体からスタミナががつたり抜けたのを実感しながら、地面にめり込んだ神機を放つておいて同行者のそばに寄る。

白い骨が皮膚から飛び出している足を抑えてる男の顔は蒼白だ。

殺される寸前だつたのだ、無理はない。

「じつとしてろ」

自分の生命力を分け与える『リンクエイド』を男に施す。

回復錠でオラクル任せに無理やり回復させると折れた骨が正常な形に戻るか不安が残るが、『リンクエイド』なら自己治癒能力に働きかけるため心配は少ない。

尤も、あくまで緊急救命の技術のためすぐに復帰することは出来ない。更に力の抜けていく実感を覚え、思わず膝を突きそうになるところを男が手を出して止めた。

「……すまねえ」

「俺の不注意だつた。謝るのは俺の方だ」

男の手を払い何とか自力で立ち上がる。

頭がふらつくが、俺の体ならじきに回復する。

それまでどこかに身を潜める必要がある。

そう思った矢先男は、はつと思い出したように血相を変えて叫んだ。

「そうだ、ここにいるのはコンゴウだけじゃねえ!!」

「何つ？」

神機を回収しに向けていた背を振り返らせると、奥から黒煙を噴きながら高速で近づいてくる筒状の白い物体が見えた。

「あの巨体は間違いねえ、クア——!!」

考える前に体が動いていた。力任せに座り込む男の襟首を掴み適当に放り投げた。俺も逃げなくてはと思つた時には視界が真っ白に塗りつぶされた。



目を覚ますと見知らぬ白い天井が見えた。

同時に鈍い頭痛が襲い呻き声を小さく漏らすと、俺の視界に目に涙を溜めたセナの顔が飛び込んできた。

「ソーマ君っ、ソーマ君！　目を覚ましたんだね！？」

「……ああ、ここは……？」

「アナグラの医務室。全身に重症負つて丸々二日寝込んでたんだよ」

右手を見ればギプスで固定されており、体中に包帯が巻かれている。
つまり今の俺はミイラ状態か。

体に意識がいった途端に痛みが発せられ顔を歪ませると、セナは慌ててナースコールを押した。

気づけば左手がセナにしつかり握られていた。

包帯越しに感じる温かさに気を取られていると老人の医者がすつ飛んできてセナを追い出した。

自由になつた左手を意味も無く開閉させてみる。まだ柔らかい感触が残つていた。

「ふむ、もう体を動かせるのか。さすがと言つたところかね」

普通のゴツドーアイーターなら即死だつたはずなんだがなあ、と呟きながら男の老人は白い髭を撫でながら続ける。

「全身重度の火傷および複雑骨折。しかも右腕と左足は開放骨折。加えて複数の内臓破裂。簡単に言えば人肉ミートボール状態で担ぎ込まれたんだが……意識が途切れる前の記憶はあるかね？」

激しい衝撃が全身を叩いたのは覚えているが、それ以降の記憶はぶつかり切りれている。

それよりも『リンクエイド』を施したばかりの男と瀕死の俺だけで、どうやってクアトリガから逃げ切れたかの方が気になった。

老人は丸眼鏡をペンで押し上げながら言う。

「ヒバリさんが要請した援護部隊がギリギリ間に合ったそうだ。キミの同行者はお隣でぐつすり眠ってるよ」

もちろん永眠つて意味じゃないよ？ と笑えない冗談をかます。

隣はシーツで仕切られており姿は見えない。

援護部隊が駆けつけるまで俺を庇いながら戦つたらしく、重傷を負つたらしい。まだ

意識は戻っていないが命に別状は無いそうだ。

……俺はまた”死神”になっちまつたんだな。

シーツに深い皺が走る。

医者は小さくため息を零した後にこう言つた。

「伝言を頼まれて いる。お隣さんからだ」

「……聞かせろ」

『借りは返した』、だそ うだ』

短い言葉に、俺は何も言えなくなつた。

ミツシヨンに出る前は近寄ろうともしなかつた奴が、どうして身を呈してまで化け物の俺を助けたんだ。

奴の怪我の原因は俺の不注意だつたのは明らかだつた。借りなんざ作つてねえ。な
のにどうして……。

意識が戻つたばかりの頭は鉛のように重く鈍かつた。

しばらく俺の反応を窺つた医者は最後にと前置きをし付け加えた

「さつきキミを看病していた子にはちゃんと礼を言つておくようや。キミが寝ている間、ずっとそばにいたからね。面会謝絶だと言つてるのに無視したのはいただけないけどね？」

この調子だと一週間くらい安静にしてれば退院できるから、とだけ言うとそそくさと
違うベッドへ歩いていった。

入れ違いに戻ってきたセナは医者に頭を下げてからベッドに腰掛けた。
目に浮かんでいた涙は消えており、代わりに目尻がわずかに赤くなつていた。

「無事で良かつた……。ほんとに心配したんだからね」
悪い、と一言言えば済む。

なのに、セナの安堵する顔を見ていると無償に腹が立つてくるのは何故だ?
どうして俺はセナが何も解っていないと思っているんだ?

「……つたんだよ」

「え?」

「どこの行つてたつ言つてんだよ!!」

急に怒鳴つた俺にセナは目をまん丸に見開いて呆然とした。

老人の医者も何事かと眉を顰めながら覗いてきた。

病室ということを忘れていたが、それでも俺の口は止まらない。

「急に姿消しやがるから連絡しても出ねえし! エントランスで待つても来ねえし!
ツバキの野郎に聞いても知らねえの一点張りだし! ここ一ヶ月、どれだけ俺が
……ツ、俺が……!」

「ええつと、いつたん落ち着こ? ああ、ほら泣かないで」

「な、泣いてなんかねえよツ!」

解つた解つたと取り出したハンカチで俺の目元を拭う。

医者はやれやれと呟きながら引つ込んだ。

何でこんなに取り乱しているのか自分でも解らない。

重傷を負った後遺症か何かか？

丁重な手つきで拭われるまま、混乱する頭を整理しようとする。

涙が枯れた頃にセナはハンカチを膝に置いて頬を搔きながら言つた。

「ちやんと言つたじやん。畑作りに行くつて」

「はあ！？ それはからかつて言つたことだろ！」

「本当のことなんだつてば！ あんまり大っぴらに言えることじゃないんだけど……」

周りをチラチラと見渡してから、ぐつと耳元に口を近づけて囁いた。

「実は極東支部の管轄外の人たちの世話ををしてたんだよ。一応外の人たちと関わっちゃいけないって本部の決まりがあるから、秘密裏にするしかなくてさ。もしバレたら面倒だからソーマ君には知らせられなかつたの」

「それで俺のメールは無視したつてのか？」

「へ？ メール？」

豆鉄砲を食らつたような顔で間抜けた声を漏らすと、心当たりがあつたのか困り笑いを浮かべながら答えた。

「あー……もしかして私の自室のターミナルに送つたりした？」
「携帯端末にも送つた」

「ゴメン、それは気づけなかつた……。一ヶ月くらい極東支部にいなかつたから」

「なんでも、コロニーの外にある廃れたダムの近くに村を作つたらしく、そこの村に畑を作りにリンドウと共に寝泊りしていたらしい。」

携帯端末は自室に忘れたらしく、取りに帰るか迷つたがゴッドマイターの仕事は有給を取つたから連絡が入ることはないと思いスルーした。

そして一ヶ月近く本当に畑を作つていた。帰ってきた日に俺が拘り込まれ、自室に戻りもせずにずっと看病していたと……。

——つまり、俺の心配はセナの凡ミスと俺の勘違いが重なつたて出来た勘違いだつたと? —

ピキリと表情筋が固まる音が聞こえた。

説明し終わつたセナは気まずそうに後頭部を搔きながら笑つた。

「いやあ、まさかソーマ君がそんなに心配してくれてたなんて知らなかつたよー。もう勝手に離れないって約束するからさ、許して?」

離れない、という言葉を聞いて、複雑に混ざつていた頭の混乱がすんなり収まつた。

単に俺はセナがいなくなつてしまふのが怖かつただけなんだ。あの冷め切つた日々に温かさを齎もたらしてくれたセナを失うのが怖かつただけなんだ。

最初は受け入れられたことに戸惑いを覚えて、次第に今まで知らなかつた温かさに慣

れて、いつしかその温かさが当たり前な物と錯覚していた。

顔を合わせて何気ない話をする、この瞬間が何より大切なものだつた。

それが突然消えるまで気づけなかつた俺バカが、無様にその瞬間を探していただけの話だつたのだ。

取り戻せて安心して涙を流しただけだつた。こんな単純な話に任務中上の空になるくらい悩んでいたのが恥ずかしい。

「許さない」

「ええ……」

今度は見失わないように、その左手をしつかり握つて。

「俺が退院するまで傍にいろ。それで許してやる」

母親譲りの黒い肌で良かつたと心から思つた。

全力で目を逸らしながら出来るだけぶつきら棒に言つた。

パチクリと目を瞬かせた後に、柔らかいパンのようにふにやりと笑つて頷いたのだつた。

第5話 リツカ Side

邦枝セナは奇想天外な人だ。

私こと楠リツカは神機整備班に所属する整備士だ。

ただ、まだ学生の身で正式なクルーではない。

だから主に新人さんの神機の整備や、リストアップされた候補者に適応する神機を探したりするのが役目。

セナと知り合ったのは、私が整備士として初めて神機のメンテナンスを請け負つたときだ。

担当した神機の持ち主こそがセナであり、それが長い付き合いの始まりだつた。

学生の身とはいえ、学校ではトップの成績を持つ私は現場の整備士に負けず劣らずの知識を持っている。

普通どこの部品が磨耗したり傷つきやすいかは解つていて。

だけど、目の前で誤魔化し笑いを浮かべているセナが持つてきた神機は、またしても不自然な消耗の仕方をしていた。

「セナってばまた変な使い方したでしょ」

「あはは……バレちゃった?」

「バレバレだよもー。で、今度はどういう使い方したの? 怒らないから言つてごらん」
以前は『捕食形態にしながら強引に《チャージクラッシュ》を撃つた』という、なん
でそんなことする必要があるのか不思議でならない使い方でメンテナンスに出してき
たから、滅多なことじや驚かない自信があつた。

「中途半端に盾を展開してヴァジュラの体当たりを流して《チャージクラッシュ》しまし
た。そしたら盾の接合部がガタつくようになりました」

「バツ、はあ!? 普通は盾を展開したら身動き取れないはず……というかヴァジュラの
攻撃を受け流すつて言つてる意味が……ああもう! 訳が解らないよ! とにかく、そ
んな使い方するから変なところに歪みが出ちやつてるじやない!」

ダメだつた。普通に驚かされた。何故か悔しい思いに頭を抱える。

「お、怒らないつて言つたじやん……」

「怒るに決まつてるでしょ! もし任務中に故障しちゃつたらどうするの!? 神機は代
えがきくけど、キミ自身の代わりはいないんだよ!」

「神機が壊れないギリギリのラインは解つてるから壊することはないとと思うよ」

「そういう話じゃ……! つて、今の言い方だとまるで壊さない程度に無茶な使い方を
わざとしてるよう聞こえるんだけど」

「技術は進化し続けなくちゃいけない！ マニュアルに縛られてちやダメなんだ！」

「もうダメだこの人早く何とかしないと……」

これがセナが配属されてから一日目のやり取りだった。

と、毎度こんな調子でボロボロになつた神機を持つてくる。

腹が立つことに彼女の言う通り、本当にあと少しでも酷使していたら使い物にならなくなつていた状態で、しかもボロボロの神機を複数一気に持つてくるので整備班の間ではセナのことを『整備士泣かせ』の異名で恐れられている。

セナが配属された日から彼女に苛められた神機たちを見続けてきたお陰で、神機の状態を見るだけで所有者の戦闘スタイルが解るようになつた。

尤も、彼女の神機を見始めてから三年が経つ今になつてもセナの戦闘スタイルはよく解らないけど……。

一回堪忍袋の尾がブチ切れて、実際の業務にセナを付き合わせることがある。

技術屋以外はうんざりしてどつかに行つちやうのが常だから、神機の整備がいかに難しいかを能天気な頭に叩き込むついでに嫌がらせをしようと思ったのだ。

けれど、不思議なことにセナは興味津々に取り組んで、挙句に「やらせてくんない？」とせがんできた。

免許がないと整備してはいけないので許可はできなかつたけれど、その代わり技術屋

の蘊蓄を語つてあげたら大層喜んでくれた。

「ね、神機関連の技術士つてどうやつてなれるの？」

「座学五年実技三年がほとんどかなあ。ま、私は座学二年で済んだけどね」「ん」、普通の場合なら大学に五年も通わないといけないのかあ。さすがに面倒くさいなあ」

「学科試験を合格することと十分な実技経験が見習い技師の条件だから、ぶつちやけそ
の両方が揃つてれば大学行かなくてもいいんだよ」

「えつ、そうなの!?」じゃあ座学勉強しながら実技磨けばもつと短い期間で技師になれ
るつてこと?」

「制度上ではそうだね。でもそれが出来ないから大学がカリキュラム組んでくれてるん
だけどね」

「よし! じゃありッカに両方教えてもらえば解決だ!」

「人の話聞いてる??」

仕事を減らすために行つたことが、何をどう間違えたのか未だにわからぬけれど、
かえつて仕事を増やすことになつてしまつたのだつた。

片手間に出来ることだし、それなりのお金も払つてもらつてから別に良いつちや良
いんだ。

でも何でセナはついて来れるのかな。

当時の私でもハードなスケジュールで教えてるのに普通について来るからビックリだ。

鬼才なのか天才なのか、今までに出会つたことのない人種だ。

彼女の奇天烈なところはそれだけではない。

セナはこれでもかというほど神機の製作を依頼してくるのだ。

普通、予め作られている神機のどれかに適合性を示し神機使いとなる。

つまり神機使いが神機を選ぶのではなく、神機が神機使いを選ぶ。

そのため神機使いは選ばれた神機と一生を共にするのがほとんどだ。

なのだが、今だに条件は判明していないが、極々稀に複数の神機に選ばれる者がいる。

まさしくセナがその者で、極東支部では彼女だけが神機を選ぶ者なのだ。

しかも二個や三個という次元ではなく、作られたばかりの神機にすら適合するという

前代未聞の沙汰だ。

それに味を占めたセナは、どうやつてそんなに集めてきたのか謎な神機の材料、すなわちアラガミの細胞片を持つてきては神機を作るよう言つてくるようになつた。

彼女が部隊に配属されて一週間経つた時である。

しかも何故か私をご指名してオーダーメイドを発注してくるので、同僚からは同情と

哀れみの念を込めて『整備士泣かせ専属整備士』という大変不名誉な渾名を付けられる始末。

神機製作にかかる手間ひまは言うまでもない。

それを毎日のようにご丁寧に要望を書き連ねた製作依頼書を送りつけてくるので忙殺される日々を過ごした。

一時期目の下に真っ黒なクマが出来てしまい、油汚れとして誤魔化した時期すらあつた。

そんな無茶振りに何とか答え続けたお陰で、本当ならあと三年は整備班で見習いをしなければ正式に配属されなかつたところを、なんと一年に免除してもらえた。

副次的に整備士としての腕も格段に上がつたし、亡き父が残した『リンクサポートデバイス』の開発にも遠くない日に取り組めそうだ。

そういう意味ではセナに感謝しているけど、もう二度とあの多忙な日々に陥れないで欲しいと心から願つていてる。

これだけ聞くとセナがはた迷惑な客人のように思えるけれど、実際は心優しいお姉さんだ。

歳の近い女子同士ということもあつて友達として付き合つてもらつてるし、彼女への講義を通じて良い復習にもなつてるし、榎博士にも紹介してもらつたりして開発者とし

ての人脈も広げることが出来た。

悩み事（セナについて）や相談（セナについて）も乗ってくれるので、仕事詰めの私にとつて丁度良い息抜きになつていて。

それにちょっとだけ憧れてたガールズトークというやつも頻繁に行えて実に充実した日々を送っている。

さて、一通りセナのことについて語れたところで、現在について話をしよう。

「キミねえ、こうやって呼び出してお説教するの何回目か解つてる？」

「さあな。いちいち数えてない」

「私だつて数えてないよ！ それだけ怒られてるって意味だよ全く！」

「ぶんすか怒つてるのに聞く耳を持とうとしない問題児ソーマ君。

彼が着任してから彼の神機の面倒も見てきた私だから解る。

良い意味でも悪い意味でもセナに影響され過ぎている。

渡された神機は見るからに不自然な傷つき方をしている。

それはもうどつかの煉瓦色の人とのものとそつくりだ。

一目見てすぐ察した。

新人さんの頃は至つて普通の神機使いだつたはずなんだけどなあ……。

セナにベツタベタなのは知つてたけどまさかこれほどとは……同世代ながら一途な

態度は見てて恥ずかしいくらいだ。

もちろん嫌味じやなくて、ベタ惚れしてた姿が見てて羨ましいって意味で。

「で、何で『チャージクラッシュ』でクアドリガの突進を止めようなんて考えたのかな」

「何でそこまで解るんだよ……」

「何年あの無茶苦茶な人と付き合つてきたと思つてたのさ。大きく刀身が凹んでる時点
で相当おかしい状態だけど、神機内のオラクルがキヤパシティのオーバーでボロボロになつてたら大体想像つくよ。クアドリガ並の巨体を止めようとしない限り、こんな損傷
を負うことはないからね」

クアドリガと言えば骨のような形骸と戦車のような装甲を持つ巨大なアラガミだ。

人間の兵器を模倣した大火力の砲撃を行う一方で、その巨体に似合わない高い機動力
を見せる。

当然そんな巨体から繰り出される突進はいくら身体強化されたゴツドイーターと言
えど軽くミンチに出来る威力がある。

予備動作は大きいからすぐさま回避するのがセオリ一で、盾を展開してあえて弾き飛
ばされるのが及第点だ。

どういう神経を持ってばあの巨体を止められると思えるのか理解に苦しむ。

私の見当は的中したようで、ソーマ君はうぐつと声を詰まらせてフードを深く被る。

いつも斜に構えた態度を取つてゐる癖に、こういう時だけは妙に子供っぽい。

どうせセナはここら辺で「可愛いなーよしよしー」とか言つて終わらせちゃうんだろ
うけど、私は容赦しないからね。

無言の圧力を掛け続けると観念したのか搾り出すように呟いた。

「……アイツがその方が速く終わらせられるつて言うから」

「子供かキミはつ。はあ……何回も言つてることだけど何度だつて言うよ、キミとセナ
は根本的に違う点が二つあるの。一つは彼女には代わりとなる神機がいくらでもある
こと、そしてもう一つは他のゴッドイーターとセナには絶望的な壁があること」

「アイツに出来て俺に出来ねえ訳がねえだろうが」

「いいや、あるね。現にキミ、右手か左手、はたまた両方か。粉碎骨折してるとじよ」
私は誤魔化せない。

クアドリガの突進を止めたということは、そのダメージをそのまま神機と自身で受け
止めたことに他ならないのだから。

この世の中はアラガミという理不尽な法則で蹂躪されているけど、物理学が消えたわ
けじやない。

運動エネルギー保存則は学生なら誰もが修めなくてはならない必須分野だ。
指摘されたソーマはポケットに突つ込んでいた両手をピクリと動かした。

が、すぐに顔を顰めた。何よりの証拠だ。

「私に言わせれば、両手の粉碎骨折だけで済んでるキミの体も大概なんだけれど、セナなら無傷でやつてみせると思うよ。実際、そうやって神機をボロボロにしてきたからねあの人」

セナの一番おかしなところはそこだ。

無茶苦茶な芸当を可能にする出鱈目なセンス。

そこににつきる。

ヴァジュラの体当たりを中途半端に展開した盾で受け止めると聞けば出来そうではあるが、常識的に考えて自身より何倍も大きい物体が高速でぶつかってくるだけで致命傷になりえるのだ。

それを自身の姿を隠せる程度の大きさの盾で受け流すなんて無謀を超えた無理だ。

仮に出来たとして両腕が繋がつていれば奇跡という有様だろう。

そう、セナは他のゴッドイーターとは根本からして違う。

間違つても彼女の真似をしようなんて思つてはいけない。

あのリンドウさんですら匙を投げた彼女の戦闘スタイルは誰にも真似できない。

否定したくとも彼自身が一番良く解つている理不尽のはずだ。

悔しさのあまり被つっていたフードを取つ払い私に詰め寄つた。

「お前に俺の何が解る？　余計な指図をするな」

「鬼さえ殺せそうな形相で睨んでくるソーマ君。だけど私は臆することなく真正面から言い返す。

「知ってるよ。キミの特異な身体のこと、セナに追いつこうと無茶をしていることも、それでも追いつけなくて焦っていることも」

「つ！」

「神機を見れば全部解る。これもいつも言つてることなんだけど、聞いてなかつた？」

逆に私から詰め寄ると、ソーマ君は簡単に退く。

図星なのは火を見るより明らかだ。

好きな人にいつまでも守られているのは我慢できない、という思いは解らなくもない。

辛かつた環境から救い上げてくれた人ならなおさら思いは強いだろう。

だけど、それで自身を破滅の道に置くのは間違っている。

それでは誰も幸せにならない。

「いいかいソーマ君。何もキミがそれ以上強くなれないとか、セナを守れないとか、そういうことを言いたいわけじゃないんだよ。ただ履き違いないで欲しいだけなんだ。セナを想っているのなら、セナ自身の気持ちも考えないとダメだよ」

ソーマ君は知らない。

キミが大怪我を負つて医務室に担ぎ込まれた時、セナがわき目も振らずに大泣きしていたことを。

あまりの激しさに医者ですら面会拒絶を强行できなかつたくらいに。
キミは親友を泣かせているんだ。

その自覚は持つて欲しい。

こう見えて私は結構根に持つタイプなんだ。

「……なら俺はどうすりやいいんだ……ッ」

「そんなの知らないよ」

「なつ、お前、さつき全部知つてるつて……ッ」

「知つてるのはキミの考へてることだけだよ。これからキミがどうするべきかは知つた
こつちやないし、知つても教えるつもりもないよ。これはキミの問題なんだ、それ
くらい自分で何とかしなよ」

言いたいことだけ言つてしまい、さつさと神機のメンテナンス室に籠る。

閉め切つたドアの向こうから盛大な毒が吐かれ、乱暴な足音が遠のいていき、やがて
完全な静寂が訪れた。

すこーし冷たい言い方しちゃつたけど、これもソーマ君のためを思つて言つてるんだ

からね。

神機使いを支える整備士として、キミの想い人の親友として。
お陰で最近は良い感じに会話できてたのに、また最初の頃に戻っちゃいそうだよ。
セナに冷やしカレードリンク一週間分請求してやる。

密かな決意と共に先ほどのやり取りの疲れによるため息が漏れる。
さて整備するかといつもの作業台に着くと、コンコンとドアがノックされた。
私の返事も待たずに勝手に部屋に入ってきたのは、飘々とした苦笑いという器用な笑
みを浮かべたりンドウさんだつた。

一応ここ関係者以外立ち入り禁止なんだけどなあ……。

「よう、今日も元気そうだな」

「らしくないことやらかして元気ないですよー」

油で汚れた椅子にグダーッと凭れ掛かると、リンドウさんはわざとらしく肩を竦め
て、赤い神機を適当な場所に立てかけた。

「悪いな、ああいうのは俺みたいなおじさんがするもんなんだが」

「聞いてたんですか……。なら代わってくださいよー」

「俺が言って治せるのならとっくにしてるさ」

反抗期のガキはろくに聞く耳持ちやしねえからな、と壁に背を預けて煙草を取り出

す。

「ちよつと、こゝ禁煙」

「お、そうか。悪い悪い」

そそくさとポケットに仕舞い込み腕を組む。

「ソーマは恵まれて良かつたなあ。一時期はどうなるかと思つたが、上手く更正してゐようで何よりだ。ああいうのは親か同い年の奴に言われねえと氣づけねえもんだからな」

「ソーマ君の親がもつとしつかり父親をしてくれてたら良かつたんですけどねー。むしろソーマ君の複雑な心境の原因になっちゃつてますし」

「リッカ、支部長の悪口はそこまでだ。いつどこで聞き耳立ててるか解つたもんじやないからな」

芝居がかつた口調で諫められる。

あの支部長さん、良い人なのは間違いないんだけどどつかずれてる氣がするんだよねえ。

あまり好きになれない人だ。

「さて、気を取り直してメンテをしようというところなんだけどリンドウさん」「おう何だ」

「リンドウさんの神機、なーんで刀身と捕食力場解放部の接合部がグチャグチャになるのかなー? よっぽどめちゃくちゃなコアの摘出をしない限り壊れないよう設計してるんだけど?」

「おつと、仕事の邪魔をしちゃ悪いな。これで俺は退散と——」

「そこに正座」

「——はい」

こうしてセナに影響されたバカ二人目を説教することになつたのだった。

第6話 樺 S i d e

邦枝セナ君は非常に興味深い性質を持つ。
以下私の観察日記の要約。



・実績面

極東支部コロニーの外、アラガミに呑まれる前の世界では『栃木』と呼ばれていた地域で生活していた。

物心ついた頃には既に肉親を失つており、窃盗を生業とする男に従事することで暫定的な保護者を得ていた。

しかし十五歳の時に何らかの理由で保護者に追い出され二年間放浪。

極東支部に辿り着き、神機との適合性が認められフェンリルの保護下に置かれる。

本人の意志もあり第一世代の神機使いとして極東支部討伐班に着任する。

着任から一日目で神機を操作できるようになる。

これは史上最速の適合速度である。

また、複数の神機との適合性も認められており、同様に操作可能であつたことから

アーティフィシャルCNSとの親和性が極めて高いことが推測される。

一方、メディカルチェックの結果は中の上程度。

同時期に着任したソーマ・シックザールより下回る結果となる。

診断上では一切の特異性は認められず。

着任から一週間で難易度6に設定された任務に就いており、どの任務評価も最高値を叩き出している。
これも極めて異例の成長速度で、いずれ支部長直属神機使いになることが予想される。

メディカルチェックの誤診と判断し観測を続ける。

同時期、個人的な投資による神機製作を依頼する姿が見受けられるようになる。
また、神機製作に必要なオラクルリソースと資金を集めるという理由で、任務を片つ端から受けて回る奇行が見受けられるようになる。

人間関係は至って良好。

見捨てられた者と見捨てた者という溝が心配されたが、本人は気にした素振りを見せず、班に拘らず広い視野で人脈を広げている。

受注する任務内容も護衛や防衛任務に比重を置いており、持ち前のコミュニケーション能力により民間人とゴッドイーターとの緩衝材としても機能しているため、居住区か

らの厚い信頼を獲得している。

孤児院へ匿名の寄付もしており人徳の高さが窺える。

極東支部職員内での評判も上々とのこと。

着任から一年目、任務実績の評価から二階級特進により軍曹から准尉へ昇級。

それに伴い自室をベテラン区域に移動する。

ヨハネス・フォン・シックザール支部長による特務を言い渡され承諾するものの、同時に通達された直属部隊に所属することは拒否。

特務のノルマを釣り上げることを条件に支部長はその拒否を承諾。
その後しばらく激務を与えるものの、これを難なく処理。

逆に私財の枯渇を理由に特務の頻度を要求。

これにより週三のペースで発注されていたが週五に増える。
が、それでも不足を訴えるため毎日発注することになる。

副次的に、同じ特務を受けていた雨宮リンドウ少尉の負担が大幅に軽減。
この頃から孤立していたソーマ・シックザールと関わりを持つ。

軍規・命令違反が多く態度に難ありとされていた彼を瞬く間に懐柔、更正へ導く。

その効果は段々と現れており、集団行動での協調性に意識を向ける様子が見られ、また神機使いとしての腕も上がりつつある。

ソーマ・シツクザールと出撃する頻度が急激にあがり、特務以外の任務はほぼ彼と同行するようになる。

指定接触禁忌種の討伐を許される。

極東支部では討伐班第一部隊のみ許されていたが、個人の許可はこれが初となる。

以後、意欲的に指定接触禁忌種の任務に取り組むようになり、現在極東で確認されている全ての指定接触禁忌種を全て単独で討伐する快挙を成し遂げた。

フェンリル本部から表彰される。

しかし実名の公表は拒否する。

それに伴い、様々な意味で極めて価値の高い指定接触禁忌種の細胞片を定期的に採取可能にした。

解析班へ意欲的に無償提供し、アラガミの生態解析の進歩に大きく貢献した。

フェンリル本部から表彰される。

しかし実名の公表ら拒否する。

なお、余ったサンプルは神機開発に私的利用するようになった。

着任して二年目、以上の目覚しい功績を称え再び二階級特進の措置を取られたが、同僚との交流が途絶えることを理由にこれを断固として拒否。

二階級特進は取り下げられた。

衰えぬ活躍に対して何度も昇級を通達するも、やはり拒否。

このことからフェンリル本部は出世意欲は皆無と判断、以後昇級通達を取りやめる。着任して三年目、討伐スコアが最古参の雨宮リンクドウ少尉に迫る。

あと一年もすれば追い抜くだろう。

ゴッドイーターの能力について。

偏食因子との適合性は高いものの、取り上げて評価するほどでもない。

にも関わらず神機との適合性は極めて高く、本部に集計されているデータ内に於いて群を抜いて一位。

先述の通り神機の取り扱いは他を寄せ付けない。

のことからアーティフィシャルCNSとの親和性が極めて高いと推測される。

ただし、新型とは一切適合せず。

原因究明中。

使用する神機は不特定多数。

刀身型銃身型どちらの神機にも適応しているものの刀身型神機、取り分けバスター^ブレードを好んで使う傾向がある。

ただし討伐目標ごとに使い分けており、どのカテゴリの神機も極めて高次元に使いこなしている。

装甲はバツクラーのみを使う。

他のゴッドイーターには見られない固有の能力、《神機開放》と《スキル》を所有する。

判明したのは彼女が着任してから一年過ぎたころである。

《神機開放》バーストモードは生きたアラガミの肉体を捕食することにより神機に直接オラクル細胞を供給し、既存のオラクル細胞と共鳴させ身体能力を飛躍的に向上させる技術、とのことである。

当然神機にそのような機能は備わっておらず、現在この技術を扱えるゴッドイーターは彼女ののみ。

技術提供をしてもらったものの、他に使用できるゴッドイーターは未だに現れない。神機との適合性の高さゆえの技術だと思われる。

ただし、目覚しい身体能力の強化の代償に、身体に多大な負荷を与えるため制限しているとのこと。

《スキル》は解析を続けているものの未だに不明瞭な点が多い能力で、一定条件下における特殊能力の獲得が主だと推測される。

本人曰く「視界の右上に仲間の位置とアラガミの位置がマップに出る」「自分と仲間の体力が赤いバーで表示される」「普段より長く全力疾走できる」と多岐に渡る。

これらは神機を使用している時に現れることがから、神機に潜在的に秘められている能

力を引き出していると考えられる。

戦闘スタイルは常人と掛け離れており、とにかく攻めるのが特徴的。しかし防御は必要最低限かつ完璧に行うためほとんどの任務で負傷をせず帰還している。

どんな状況でもまず攻撃することを考えているらしく、「コアの場所さえ解つていればそのまま引っこ抜いた方が早い」「ウロヴォロスは『チャージクラッシュ』の練習台」「スサノオの尻尾攻撃は足元がお留守だから『チャージクラッシュ』撃ち放題」「盾を上手く使えばどの攻撃も無傷で受け流せてカウンターできた」など、常人では想像もつかない行動を平気で行う。

マニュアル化は不可能だろう。

その奇抜さとは反面、チームでの任務では協調性を第一に考えて行動しており、味方の行動を逐一把握しサポートに徹する。

そのため着任してから三年間、同行者の生還率100%という大偉業を果たしており、同行者の負傷率も限りなく低い。

生存戦術として採用されるも、結果は奮わず。

彼女の能力あつての戦術のようだ。

単独の戦闘力は間違いなく世界一。

協調性にも優れており、汎用性と特化力という相反する性能を併せ持つ非常に優秀なゴッドイーター。

十七歳という若さも含めて、今後更なる期待を寄せられるだろう。



「どうだい？」

「いや、どうだいって言われても……」

そう言つて頬を引きつらせるセナ君。

日々目覚しい活躍を見せるセナ君に関する資料が欲しいと本部から要請されたのだ。その報告書の概要となる私の観察日記をセナ君本人に読んで貰つたのだが、どうやらその顔を見るとお気に召さないらしい。

「これ誰ですか」

「え？ 紛れもなくキミだよ」

「いやいやいや、誰ですかこれ。私じゃないですって」

「……？」

「そんな『キミ以外にいるわけないじやないか』みたいな顔するのやめてください！」

「これでも結構脚色した方なんだよ？」

「そりやそうですよね！ こんな何でもできる超人みたいなことしてませんよ私！」

「これを直すとすると原稿用紙が十枚ほど増えることになるんだが……」「削つたって意味の脚色だつた!? ほんと冗談キツイですよ榊博士、もつと無難なことを書いてくださいよ。そうじやないと私本部に強制召喚されるかもしれないじやないですか」

涙目で懇願してくるセナ君。

むしろ泣きたいのは私の方なんだけどね……。

セナ君は非常に興味深い観察対……じゃなくて非常に重要な戦力だ。

常に人手不足で苦しんでいる最前線たる極東支部から彼女を取り上げられるのは、こちらとしては全くおいしくない話だ。

だから一度彼女の経歴を全部洗い出してみて、後から不自然の無いように削つて報告書を提出しようと思つたんだが、まさか不自然な所しかないように経歴だつたとは……。

ちよつとだけ優れたゴッディーターに見えるように削ろうと試みたんだけど、そうすると逆に何もしてない木偶と化すんだよね。

もちろん上記の概要もまだ削り途中だけど、どうすればいいものやら……。

「いくら任務が任意性とは言え、あれほど出撃してるとは思つてなかつたよ……。討伐スコアもちよつと信じられないものになつてるし……。参考までに見るかい?」

「……いえ、大体心当たりあるんで遠慮しちゃいます」

「そうして青い顔をして地面に蹲る。^{うずくま}」

バトルジヤンキーヒやないつてキミ自身は思つてるだろうけど、はたから見たら
ちよつと人情溢れる真性バトルジヤンキーダよキミ。

「ヨハンの特務に就いてたのは知つてたけど、まさか指定接触禁忌種の討伐まで命じら
れてたなんて知らなかつたよ。私のところに顔出すときいつも元気溢れた笑顔を見せ
てくれるのに、その裏では毎日アラガミを殺戮してるなんて思いもしないよ」

「い、いえ、私だつて好きでやつてるわけじや……」

「それに『神機開放』関連のことだつてリツカ君に聞くまで知らなかつたよ。どうして私
に言つてくれないのさ。困るよそういうの黙つてたら」

「だつて話したら解剖されそだし……」

「あとアラガミのオラクルリソースのことも聞いたよ。サンプルを提供する代わりに解
析班の倉庫間借りしてるんだつて？　ずいぶんサンプルが豊富だなあとは思つてたん
だ……。キミがオラクルリソースのコレクションをしていただけだつたからなんて

……」

「いや、あの……」

「一番目を疑つたのはキミの戦闘だよ。私の存在価値つてあるのでしようかつてヒバリ

君が泣きそうになりながら言つてたよ……。ヴァジユラの突進を盾で受け流して無傷？ クアドリガの突進を強引に止める？ 理由は有利に戦闘できるから？ 何を言つてるのか良く解らなかつたし、解りたくもなかつたよ……」

「なんか、ごめんなさい……」

セナ君は蹲つた姿勢から綺麗な土下座をする。

リンドウ君も大概なゴッディーターのはずなんだけど、彼女の正体を知つた今だとチヤチに思えるのが可哀想だよ。

どうするのこれ、どう報告すれば虚偽なく穩便に済ませられるんだい？

「じゃあ、いつそのこと戦闘の項目は削除しちゃうというのは……」

「……うーん、もうこれ以上考えるのもバカらしくなってきたし、それでいいか。文句付けられたら付けられたで、追つて考えればいいし。とにかくこの無理難題からはやく目を逸らしたい」

スター・ゲイザー

星の観測者と呼ばれた私が目を逸らしたいと思う課題を目の当たりにするとは……。

そうと決まればさつさと終わらせてしまおうとタイミングを始めようとすると、セナ

君はあつと小さな声を漏らして顔を上げた。

「そうだ博士、刀身型神機に捕食して手に入れたオラクルを射出するために銃身型神機の一部を接合してみようつてリッカと考えてるんだけど——」

「セナ君、ちょっと部屋から出ていいって貰つていいかな?」
非常に前衛的な姿勢は好ましいけれど、この場に限つて言えば混乱させるだけになる
から退出願おう。

私の観察対象はつくづく私の予想を裏切ってくれる。

そんな喜びか呆れか解らない思いにため息を吐きながら、指を動かし始めた。

第7話 セナ s i d e

「こちらセナ。無事任務完了了！」

『今日も何も出来なかつた……。相変わらずの頼もしさですね。お疲れ様です』
私の足元に転がつてゐるスサノオ二匹を見下ろしながらヒバリに報告する。

毎日発注される特務をこなしたところだ。

特務。

カツコいい名称の任務だが、言つてしまえば支部長のおつかいである。

そのため難易度も支部長のご機嫌次第で上がつたり下がつたりする。

基本アラガミの中でも討伐困難と言われているアラガミの討伐がメインで、稀に大量
発生した小型アラガミの一掃、極々稀に細胞片の納品だつたりする。

ひとまずオラクルリソースの回収が目的のようで、コアの摘出には細心の注意を払う
ように支部長から厳命されている。

何でも少しでも傷が付くとクオリティが激減してしまうからなんだとか。

私が言うのもアレなんだけど、そんなにオラクルリソースを集めてどうするつもりな
んだろう……。

特務を受けてから二年間、相当な数のアラガミ、それも超弩級と言われているアラガミのコアをかき集めてきた。

リンドウの集めてきたものも含めるとちょっとした大富豪になれるくらいだ。にも関わらず、支部長は貪欲にオラクルリソースを欲する。

むしろノルマを達成すればするほどノルマの上限が上がつてゐる気がする。欲しいのではなく、足りないとでも言うように。

まあ、ノルマの釣り上げは支部長の直属部隊に入らないための条件として私が言ったんだけどね？

そこについては文句ないよ。

でもスサノオ二体同時討伐つて普通頼まないよねえ。

スサノオって言えば『ゴッドイーターキラー』の仇名あだなで恐れられてるアラガミだよ？

その凶暴な戦闘力もさることながら、神機を好んで食べる偏食傾向があるからベテランのゴッドイーターですら接触禁止にされてるのに、どうして二体狩つて来いとか言えるのかな？

頭パーンしてるでしょ絶対。

というか、何で第一種接触禁忌種に指定されてるアラガミが同じ作戦エリアに二体生息してんの。

どんだけこの地域でゴッドイーターたちが死んじやつたの。

あー、でもここ『鎮魂の廃院』とか言われてるんだつけ。

いかにもたくさん殉職者が出ましたよーって名前をしている。実際はアラガミを神と見立てたカルト宗教が巢食つてたところアラガミに食われたとか、胸糞悪い歴史があつたとかなかつたとか。

とにかく、曰く付きの場所だつたのなら仕方ない。
さつさとコアを回収して退散するに限る。

それに年中雪が降つてるせいで寒い。

神機にスサノオをガブガブさせて間もなく二つのコアを回収。

しつかり柄に装着されているコア収納機に黄色い二個の珠が入つたことを確認し、核を失つたスサノオたちが地面に吸い込まれるようにして瓦解したのを見届ける。

「任務完了！　これより帰投準備に——」

『つ!?　作戦エリア内に想定外のアラガミ反応を確認！　偏食場パルスのデータを照合……。えつ、該当無し！　これは——!?』

「え、なに、どうしたの？」

『セナ、聞こえるか、私だ。今お前のいる作戦エリアに正体不明のアラガミが確認され
た』

びんと響くようなこの声はツバキだ。

いつも泰然と構えるツバキらしからぬ焦つた声に眉を顰める。それに指導官のツバキが出張つてくるというのは余程の事態なのか、緩みかけていた緊張が張り巡らされる。

「ツバキさん？　ということは新種のアラガミですか？」

『そのようだ。それもスサノオに負けず劣らずの強い反応を示している。アラガミの現在地を送る、くれぐれも遭遇しないよう――』

『待ちたまえツバキ君。その指示は早計だ』

ツバキの指示に被せるように回線へ割り込んできたのは特務のクライアント、ヨハネス支部長だ。

任務中のゴッドイーターの無線に割つて入つてくることは無理のはずだが、支部長の権限で何とかしたのだろうか。

突然の介入にツバキが態度を崩して声を荒げた。

『支部長！　いえ、セナは激務を達成した直後の身です。万全の状態とは言えません。

ここは一旦体勢を立て直すのが先決かと』

『未知のアラガミを見て見ぬフリをするのは愚策だ。せめて姿かたちは把握しておくべきだ。それに、彼女は疲労などしていいない。そうだろう？　セナ君』

「え、ええ、まあ」

『くつ』

なんか当事者の私を差し置いて話が進んでるような……。
しばらくツバキと支部長の言い争いが続いたが、結局ツバキが職権行使に屈し、私に
偵察の任務を言い渡す。

『可能であれば討伐、コアの回収もよろしく頼むよ』

言うだけ言つて無線を切つた支部長。直後に盛大に毒づいたツバキ。

私は支部長の言う通りまだ余力はぜんぜんあるから平氣なんだけど、あのツバキの怒
りを間近で感じてるヒバリが一番可哀想だ。

任務が終わつたら何か奢つてあげよう。

『すまないなセナ……。任務の後で辛いだろうが、よろしく頼む。偵察だけでいい、戦闘
は控えろ。いいな』

「了解でーす。任務開始しますー」

手元の端末に乱入してきたアラガミの現在地のデータが入る。
確認してみると……どうやら廃院の中にいるらしい。

緊急事態ということでヒバリは外されツバキがオペレーションに入る。
さっくり終わらせて、帰つてソーマで癒されるとしますかねー。



いた。

何か白くて細長い尻尾が見える。

四つん這いだ。

首も長くて角が二本生えてる。

胸に赤熱した塊のようなものが点滅していく、おそらくコアかと思われる。

特徴的なのは左手と背中。

左手には銀色の籠手らしいもので覆われており、背中には岩のような物質で出来ていて
その突起部が確認できる。

今まで見たこと無い骨格だ……間違いない新種だね。

廃院の隅に寄せられていた遺骨に顔を突っ込んで咀嚼している。
人間の骨がお好みらしい。

木材とかだつたらまだ良かつたんだけどなあ……。

何がともあれ姿を写真に収めなくては任務達成にはならない。

万能端末を取り出してつと……。

はいチーズ！ カシャツ！

……ん？ カシャ？

手の中にある端末をまじまじと見つめた後に顔を上げると、そこには長い首をもたげて私をばつちり凝視してゐる新種君。

それからゆつくりと大きい身体をこちらに向けて、遠くにいてもなおうるさく聞こえる咆哮をあげた。

おつと、これはもしかしなくとも――

「やば、ばれた」

『バツ、馬鹿者!! さつさと離脱しろ!!』

そんな怒られたつて私のせいじゃないでしょ!!?

まさか任務に携帯することが義務付けられてる端末にサウンドが付いてるなんて思わないじやん!!

誰だよこれ開発した奴!

何でカメラ機能に音付けようなんて思つたの!?
ええい、帰つたら文句付けてやる。

と思つたらいつの間に目の前まで距離を詰められてる!<br/すでに左腕を振り上げてらっしゃる。

「あつぶな!!」

間一髪、身を大きく振つて左右のパンチを避ける。

すたこらさつさと離れて神機を構えると、そこにいたはずの白いアラガミが姿を消している。

どこへ、という言葉が脳裏に過ぎつた瞬間、背筋にゾクリと悪寒が走った。その感覚に押されて無我夢中に前方へ身を放り投げると、背後からとんでもない熱量と衝撃が撒き散らされた。

慌てて起き上がりつて振り返れば、数瞬前まで自分が立っていたところに紫の炎の剣が地面を穿つており、周辺の雪が一瞬で蒸発してしまい剥き出しになつた地面が雪解け水を吸うことなく力ピカピに乾いてしまつている。

そしてさも当然のように炎の剣を持つている白いアラガミ。

仕留め損なつたのが気に食わなかつたのかひとつ歯を噛み合わせて見せると、炎の剣を突き刺したまま後方へ大きくバツクジャンプ。

直後炎の剣は内側から膨らみ爆散。

離れている私の頬にピリピリと熱を運ぶ。
めちやくちやだ。

炎が実体を持つつてのも結構ぶつ飛んでるけど、何より奴自身が速すぎて目が追いつかない。

今まで戦ってきたアラガミが止まつて見えるほど速くて、攻撃の予備動作なんて私

じゃなきや見逃しちゃうね。

『どうしたセナ!? 状況を報告しろ!!』

「ちょーっとそんな余裕ないかな! 倒したら報告する!」

『なつ!? おいセ——!!』

ぶちつ。

よし、無線は切つたから集中できるね。

というか集中しないと普通に殺されそうだ。

久々だね、こんな死が隣り合わせの戦いは。

ゴツドイーターになる前、アラガミたちから無防備で逃げてた頃を思い出す。
やせ我慢の笑みを浮かべてやると、白いアラガミは左手から激しい紫色の炎を噴出し
天へ向けて咆哮を上げる。

生身の私じや奴の神速についていけない。

勝手知ってるアラガミならいくら速くなろうが問題ないけど、初見での速さを相手
するのは骨が折れすぎて死んじゃう。

あんまり使いたくなかったんだけどなあ……。

リツカの悲鳴に近い怒鳴り声が耳に蘇る。

はは、また怒られちゃうなあ。

でも怒られるだけならまだ良いさ。ここで死んで泣かれるよりはマシだ。
目を瞑つて深く深呼吸。

この間にも奴は神速で迫つてきている。
でも焦るな。

少しでも乱れたら私の身体はアラガミ化してしまうのだから。
神機の中にある無数に存在するオラクル細胞一つ一つを燃焼させるイメージ。
一つに火が灯り、隣接する細胞に燃え移る連鎖が起ころ。
そこにはサノオから奪つたオラクル塊を放り込む。

沸々と神機から手を伝つて熱が押し寄せる。
さあ力を貸してくれ、神機！

——『神機解放』!! ——

全身に目に見えない羽衣が覆う感覚を覚え、開眼する。

神機と私の全身に黄金色の陽炎のようなものが立ち昇るのが見える。
無事に成功したようだ。

そして正面を見据えれば両腕を広げゆつくりと突進してくる白い影。
見える、さつきはぜんぜん見えなかつたけど今なら見える。
あまりの遅さに欠伸が出ちやいそうだ。

地面を軽く蹴り離すと、地面に小さなクレーターが生じ礫と雪が舞う。

私が空中に飛び上がつても白いアラガミは未だ一步を踏み出そうとしている所だ。私が目の前から消えたことにすら気づいていない。

圧倒的運動性能の差。

今私が生きている世界とキミが生きている世界は別次元だ。

それを思い知らせてやる。

空中で体勢を整え、神機を真下に突き刺すように構える。

それから黄金に燃えるオラクルに更に働きかければ、神機から濃紺と漆黒が入り混じつたようなオーラが吹き荒れる。

ビキリとこめかみ辺りに激痛が走るが、そんなものは無視だ。

——あと少しだけ持つてくれよ、私の身体……！　——

そして、撓たわめていた両足を一気に解放し、空気の壁を蹴り抜く。

見据える剣先以外のすべての景色が放射状に歪み、猛烈な空気摩擦を頬に感じる。

偏差射撃のように、私の落下とアラガミの通過が重なることを予見する。

直後に手に重厚な手ごたえを感じ、両足に凄まじい衝撃を覚え急停止。

一拍遅れて轟音が廃院を揺さぶつた。

視界が回復すれば、私の足元には白いアラガミだったものがぶちまけられていた。

パー_ス_ト

神機解放状態で突進しながら『チャージクラッシュ』をぶち込んでやつたのだ。
原型を留められるはずがない。

最初に背中の突起部に衝突、一瞬で結合崩壊を起こす。

突起部が崩壊すると同時に紫炎の円環が展開されるも、何事かが起きる前に背中を貫通。

胸部にうつすら映っていたコアを粉碎。

アラガミの突進の慣性を潰す勢いで地面と縫いとめた。

こんな滅茶苦茶なことをしても私の身体は無傷だ。

衝撃による負傷は皆無。

なぜなら、今私は限定的なアラガミ化を起こしているからだ。

ソーマの比じやない勢いで神機を媒体に身体を無理やり強化した状態は、紛れもなくアラガミ化である。

「解除……ツヅ、ゲホツ、ゲホツ」

その反動は甚大だ。

空気を蹴るなんてムーブ、本来の身体じや到底行えない芸当だ。

それを無理やり成し遂げれば身体の内部にダメージを負うのは必然。

あの超高速機動をするアラガミを軽く超越するスピードで動けば、やはり反動を受け

る。

視力や聴力、嗅覚の強化も副次的に行われるから脳にも負荷が掛かる。つまり諸刃の剣である。

次々と込みあがつてくる血を吐き出し続ける。

十回ほど咳き込んだところでようやく副作用が収まる。

全身が鉛になつたように重いし、散々だ。

無線に電源を入れてコールする。

「あー、ツバギさん?」

『セナ!? その声はどうした!? 逃げている最中か!?』

『ゲホッ、おエ……いえ、血が喉に絡まつただけです。無事討伐しました』

余計な心配掛けちゃつたよ。神機を杖代わりに何とか立ち上がると、ツバキが疑念の色を示す声を出した。

『何? 討伐しただと? 確かなのか?』

『? ええ、確かです』

『それは妙だな……。ツ!? セナ、一刻も早くそこから離脱しろ!!』

『ま、また乱入してきましたか……』

『お前の後ろだ!!』

え、と振り返ると、そこには背中から紫炎の円環を翼状に展開し宙に浮ぶ白いアラガミがいた。

確かにコアを潰し殺したはずのソイツが。

「……うそでしょ」

未曾有の脅威が再び襲い掛かる。

第8話 セナ s i d e

アラガミはオラクル細胞が集まつて出来た細胞群だ。

細胞核となる物が存在しないと形を保てない。

それが俗に言うコアと呼ばれるものであり、これを失つたアラガミは例外なく消滅する。

厳密には目に見えない微粒子となつて大気中に霧散するだけなのだが、確かに眼前の脅威を退けることは出来る。

だと言うのに、目の前に佇む未知のアラガミはコアを粉々にされても生きている。

潰れたはずのコアは元通り胸に埋め込まれており、突起部があつた背中からは紫炎が溢れ出でている。

ありえない。信じたくない。

その光景に私は驚愕のあまり敵前で呆然としてしまう。

『セナ!!』

ツバキの叫びでようやく我に戻つた私は咄嗟に盾を展開。直後に凄まじい衝撃が盾を貫き、後方へ軽々と吹き飛ばす。

したた

背後にあつた壁に強かに打ち付けられ息が詰まる。

咽あがつてきた血を乱暴に吐き捨て体勢を整えた頃には白いアラガミは右腕を掲げ、その掌から禍々しく渦巻く紫炎を噴出し剣の形に整えていた。

次の瞬間には炎の剣を片手に猛然と飛び掛ってきた。

がむしやらに身を投げ出し紙一重で回避すれば、アラガミは背中に展開している炎の円環を眩く輝かせ始めた。

しかしこちらに振り向くことすらなく、わずかに身体を宙に浮かせて全身を撓める。

今しか言う暇がない！

「ツバキさん、戦線を離脱します！ 回収班を回してください！」

『解った！ ……死ぬなよ！』

早口で伝えれば四の五の言わずに無線を切ってくれた。

さすがツバキさん、現場を知ってるだけあつて対応も迅速だ。

殺しても死なない敵。

未曾有のアラガミ。

さすがに私一人でどうこうできると思い上がつていない。

さつさと逃げて榊博士に対策を仰ぐのがベストだ。

だから私の身体！ もう少しだけ私の無理に耐えてくれ……！

「神機解放!!」
[バースト]

神機が唸りを上げて内包するアラガミの力を放出する。

先ほどの神機解放^{バースト}すでにボロボロになつた身体に鞭打ちその力を身にまとう。

鈍器で殴られたような頭痛が走り、私の身体が悲鳴を上げる。

アラガミはようやく振り向いた。そしてそれが奴の攻撃の瞬間だつた。

炎の渦が撒き散らされる。

それも一本ではない。

奴を中心に何十本もの天に届くのではと思えるほど巨大な渦が全方位に迸る。
放された渦は一直線ではなく、湾曲しながら猛進する。

進行上に存在するあらゆる物質を瞬く間に融解し、なお暴れまわる。

今私の渦がスローに見えるが、生身の私には到底見えるようなスピードではない
だろう。

もし他のゴッドイーターたちがコイツと遭遇していたらと思うとゾッとする。

渦が展開される中縫うように安全地帯へ移動し、今もなお炎の渦を撒き散らす化け物
に着実に接近する。

後は奴が放出し終わり隙を晒したところでコアを奪い取つてやれば良い。
復活するとは言えタイムラグがあるのは間違いない。

その間に速攻で離脱する。

そんな私の企みは簡単に阻止される。

渦の放出をやめた瞬間に殺せる間合いへ入つた私を視認した奴は、ひときわ大きな渦を放出した直後に素早く両の掌からそれぞれ剣の形を模した炎を生み出した。

飛び掛つてくるのか。

そう思つたとき、アラガミは宙に浮いていた両足を地に着け、直立した。

今までに見せなかつたそれ。

四つん這いに適した骨格からは考えられない姿勢。

加え両手に絶大な威力を誇る炎の剣。

それが今、私の目の前に聳え立つ。^{そび}

私が一方的に殺せるはずだつた間合いか、アラガミが私を斬殺できる間合いに変貌した。

後退は許されない。

アラガミの制御から外れた炎の渦が今もなお背後で暴れ狂つてゐる。

残された逃げ道は……——真正面のみ。

「はあああああ!!」

無意識に雄叫びを上げ、神機に必殺のオーラを纏わせる。

威力の向上を促すためではない。耐久を上げるためだ。

刹那。

互いの一撃が交わされる。

腕から足に衝撃が流れ、私の立つ地面に無数の亀裂が走る。
腕が碎けるかと思うほどの膂力。

間近で放出し続けられる炎熱で頬がチリチリと炙られる。

盾で防ごうなんて消極的な考えに逃げなくて良かつた。

圧倒的な膂力か炎熱か、そのどちらかで装甲が破壊され私は殺されていただろう。
二合、三合と神速で重なっていく。

『チャージクラッシュ』を限定的に発動することで何とか相殺できるくらいの破壊力。
神機が壊れるが早いか私の身体が壊れるのが早いか。

実際の時間にしては三秒にも満たない剣戟の応酬だったのだろうが、私にとつては永遠にも似た長い時間だった。

そして、しゆうえん終焉が訪れる。

両の剣をクロスさせ斬り払うところを渾身の『チャージクラッシュ』が叩き付けられ、
実体を持つていた炎に輝ひびが入った。
力のあらん限りを込めて振り抜くと同時に奴の剣がバラバラに碎け散つた。

突破した。

その事実からくる安堵に張り詰めていた緊張に弛みが生じる。
僅かな緩みに付け込むように、今まで置き去りにしてきた疲労やダメージが一気に押し寄せる。

腕が付いているのか不思議に思うほど両手の感覚がない。

足が鉛のように重い。オーラを纏っていた神機は点滅を繰り返す。

敵は弱点の胸元を曝け出しているというのに、そのまま視界が暗転しかける。

「う、動けえええええ!!」

私の絶叫に応じ、刀身の根本から先端までを飲み込むように巨大な顎のような身体が現れる。

後先考えずにアラガミの胸元に飛び込み、捕食形態になつた神機を点滅するコアに突き立てる。

食らい付いた神機は独りでに咀嚼そしゃくを開始する。

肉を噛み切り骨を噛み碎く。

あつという間にコアを守つていた肉体を食らい尽くすと、無防備になつたコアを飲み

込んだ。

力任せに神機を引き抜き、崩壊し始めるアラガミの体を足場に飛びずかる。

そのまま見向きもせず、一目散に離脱する。

端末に送られていた回収班が待機する座標へ、神機解放バースト頼りの身体を必死に動かす。ついに身体に限界が訪れ、身体に纏つっていた力から解放された。

常人からかけ離れた速度で走っている最中に疲労困憊の身体で投げ出されたために、ろくな受身も取れずすつ転ぶ。

いつしか積もつていた雪の足場が荒野に変わつており、心臓が早鐘のように鳴り続ける。

鼓動に応じて喉に血が競り上がつてくる。

気持ち悪いほど全身の感覚がない。

派手に転んだはずなのに痛みはおろか、地に横たわつてるとすら思えないほど神経が麻痺している。

唯一感じるのは神機を握る右手の違和感だけだ。

それを確認するだけの気力も体力も残つていない。

動きたくとも身動き一つ取れないのだ。

もしかしたら、死ぬのかな……。

被弾は一回もしてないけど、神機解放バーストを使いすぎたせいで身体が本当の意味で壊れた

のかもしね。

視界もおぼろげで、耳はぐわんぐわんと訳の解らない音を拾うだけ。

周りに誰もいない、一人ぼっち。急に感じる寂寥感^{せきりょうかん}。

ゴツドイーターになる前、目的もなく放浪していた日々を思い出す。いつものように出撃して特務をこなしていくだけなのに、どうして今はこんなに頭がぐちゃぐちゃになつてゐるのか。

志半ばに倒れたゴツドイーターたちもこんな感覚に襲われていたのだろうか。いわゆる走馬灯というやつなのか。

ただ漠然とした意識の中、これが最期になるのなら出撃する前にソーマの顔を見たかつたなあとと思う。

特務を受けてることを知つたら心配掛けちやうと思つてバレないよう深夜帯に岡かけてるのがここで仇になるとは。

『セナ!! セナあっ!!』

幻聴まで聞こえるようになつちやつたよ。

いよいよダメっぽい雰囲気になつてきた。

私がいなくなつてもソーマは上手くやつていけるかなあ……。

私以外の人には無愛想だから心配だなあ……。

だんだんぼやけていた視界に影が差し始めた。

恋しかつた人肌に触れた感覚を最後に、私の意識は暗闇に落ちた。

第9話 ソーマ Side

セナが未知のアラガミに遭遇した時、俺はアナグラにいた。

先日達成した任務に関するレポートの提出をしにツバキを探していたのだ。

普段ラウンジで事務をこなしているツバキだが、書き上げた時間が深夜ということもあり、昼間は人の行き来の激しいラウンジが嘘のように静まり返っていた。

レポートの期日が迫っているわけでは無かつた。

いつもなら日を改めて顔を見かけたときに提出をすれば良いと思つただろう。

しかしその日に限つて、俺が心当たりのある場所を探してから諦めようと思つた。

心の奥底で、このラウンジの静まりようが引っかかっていたからだ。

そして俺の耳はツバキの声を捉えた。

『クソつ、あいつ、無線を切りやがった！』

声を辿れば、そこには作戦司令部とラベルが貼られたドアに行き着いた。

場所に限らず、アナグラ内部に存在する大よその部屋は防音仕様が施されている。

腐つても軍の名義を取つているから、階級に見合わない機密情報などの漏洩を防ぐ目的なのだろう。

だが俺の耳は特別……いや、異常だ。

就寝するときも周りにスピーカーを設置して音を流していなければ、防音仕様の壁越しでも簡単に声を拾えてしまう。

作戦司令部は大規模な防衛作戦や緊急時に使用される部屋だ。

そこからツバキの声がするということは、俺の知らないところで大変な目に遭つて奴がいるということだ。

邪魔しては悪いと身を引こうとした時だ。

『応援部隊を派遣すべきです！ それと回収班も！』

『解つていい！ 近くに作戦行動中の部隊は……チツ、仕方ない、アナグラにいる奴を叩き起こせ！ 何としてもあのバカを……セナを死なせるな!!』

セナ。その名前で引いていた足がピタリと止まつた。

なぜ今ここでセナの名前が出てくる？

今日のミッショーンを終わらせたアイツは「疲れたからもう寝るね」とあくびしながら自室に戻つたはずだ。

それに深夜帯に自主的な出撃はできないはず。

死なせるなどはどういう意味だ？

頭で理解するより先に、俺は作戦司令部のドアを蹴破つていた。

「おい、それはどういうことだ」

「ソーマさん!？」

驚愕の顔で振り向くヒバリと、コメカミを抑えて苦虫を噛み潰したツバキ。ヒバリは無線から流れてくる報告で我に返り忙しく手元の端末に入力しながら号令を掛けるが、ツバキは俺を睨み付けたまま黙りこくつた。

それから搾り出すような声で聞いた。

「聞いていたのか」

「盗み聞きする趣味は無い。それよりセナを死なせるなどはどういう意味だ」

後でセナに殺されるな、と吐き捨てたツバキ。

「第一接触禁忌種に匹敵する未知のアラガミと遭遇し、セナとの通信が途絶えた」

「何!?」

「奴のことだから問題ないと思うが、激務の後だ。万が一のことがある。それに今回の

アラガミは少し様子が変だしな」

後半は口の中で呟かれたが、俺の耳は聞き逃さなかつた。

「その応援部隊に俺を入れろ」

「……解った。サクヤの班に入れ。出撃ゲートに行けば合流できるはずだ」

了承を聞くや否や部屋を飛び出していった。

セナの戦闘能力は誰よりも理解している。

あのセナがそちらのアラガミに負けるわけがねえ。

だが、通信途絶が起ころるほどセナが追い込まれていてるのは事実だ。

そう思うと居ても立つてもいられない。

えも言えぬ予感に急かされながら護送車に飛び込む。

中にいたサクヤに驚かれたが、何かを察したように口をつぐみ、発車するよう号令した。

揺れる護送車の中でサクヤにセナを発見次第、何も触ることはせずただ連絡をしろと厳命された。

衛生兵のサクヤはこういつた現場を何度も経験してきた。

強襲兵の俺より遙かに怪我人の処置に精通している。

でも、それはあたかもセナが敗走していることが前提のような口ぶりで。

あの負け知らずのセナにそんなことは無いと思いたい一方で、胸の中を搔き鳴る不安がもしかしたらと囁く。^{ささやか}

作戦エリアに到着して回収班たる俺らは散開し、セナの探索に乗り出した。

強力なアラガミの周りには常に小型アラガミが取り巻いている。

一説に寄ればボスたるアラガミが食い残した屍を漁るためだと言われているが、つま

りこういつた回収任務は一刻の猶予も許されない。

強力なアラガミが追つてこなくとも、ハイエナのような小型アラガミが負傷兵を襲う可能性もあるからだ。

そして作戦開始から十分後、ついにセナは発見された。

しかし、特徴的な煉瓦色の髪は土と埃で塗れており、口元からは夥しい量の血が流れ、力なく横たわるセナの顔を血溜まりに埋もれさせていた。

見つけたのは俺だつた。あまりの惨状に何も身動きが取れなかつた。

「独りは嫌だよソーマあ」

普段の明瞭なものとは比べ物にならないほど脆い声で、ようやく俺は体を動かせるようになつた。

「セナ!! セナあつ!!」

サクヤに厳命されたことすら気に掛ける余裕はなく、ただがむしやらに叫びセナの身体を抱き上げた。

これだけ叫んでもセナには聞こえている様子は無く、その口からは小さな呻き声と血が流れ落ちるだけだった。

薄く開かれた目には小さく収縮した黒い瞳が光を反射しているだけで、四肢にはろくな力が入っていない。

そして、そこで気づいた。

腕輪を付けるセナの右腕が異様に変化していたことに。

アラガミ化。オラクル細胞の制御限界が超えたとき、腕輪を介して注入される偏食因子を食い破り、捕食の均衡がオラクル細胞へ傾く現象。

ゴッドダイナーでは最も忌避されている、致命的な障害だつた。

「そ……そん、な……」

手首から手先だけだが、確かに人ならざる手に変形していた。

その髪と同じ色の鱗が生えそろつており、五本の指だつたと思われる部位は鋭い鉤爪状になつていた。

そんな状態でも神機は硬く締められていた。

必死に戦つたのだろう。

でも、俺が散々唾棄していた、半分アラガミの状態になつてしまつていた。

「ああ……アア……！」

間に合わなかつた。

その無慈悲な一文が目の前で踊つた。

変質してしまつたセナの右手を両手で握る。

アラガミ化した指はぎこちなく動き、神機から手を離した。

そしてその禍々しい見た目とは反して優しく俺の手を握り返した。

「良かつた……」

「セナ！　おい、セナ！　しつかりしろ!!　目を開けろ!!　セナ!!」

「ソーマ！　セナを見つけた——————つ」

俺の叫び声に気づいたサクヤが駆けてきたが、俺の手を握るセナの手を見て口を手で覆つた。

「なあ、サクヤ、セナは助かるんだよな……?」

「ソーマ……」

「セナが……こんなことで死ぬはずがねえよな……?」

俺の言葉から目を背け、サクヤは無線を繋げた。

「こちら回収班。対象を発見しましたが、身体の一部にアラガミ化が認められました」

「おい、ふざけるなよ……サクヤ、まさかセナを——」

「ソーマ。チームの誰かがアラガミ化したときの対処手段……。解っているわね?」

「ふざけるなアツ!!　そんなことがあって堪るか!!」

「直接手を下すのは部隊長の責任よ……。後は私に任せなさい」

アラガミ化した隊員を処理するには、その隊員の神機で殺さなければならぬ。だが、他人の神機を触れば神機に捕食される。

その矛盾を孕む処理方法はしかし、確かにその神機に侵された身体を侵した神機に閉じ込めるのは合理的でもあつた。

神機に捕食される経験は誰もが経験する。

そう、腕輪を装着するときに捕食されているのだから。

あの想像を絶する苦痛を再び背負わなくてはならない。

だが、それだけでサクヤの苦渋に歪む顔を説明付けることは出来なかつた。

気丈に振舞つていた部隊長ではなく、仲間の死を悼み涙を零す女がそこにいた。

地面に転がるセナの神機に伸ばす手をもう片方の手で抑えつけるサクヤ。

だが覚悟を決めたのか、抑えた手をどけた。

その時だつた。

『待つてくれサクヤ君!』

「さ、榊博士!?」

ツバキがサクヤからの報告を受け、叩き起こした博士からの無線だつた。
ゴッドイーターを生み出した男は迷いを孕んだ声音で言つた。

『セナ君を救えるかもしねりない』

『ほ、本当か榊!!』

『解らない。むしろ失敗する確率の方が遥かに高いだろう。だが、セナ君は私の興味深

い観察対象だ。簡単に死なせるには惜しい』

このごに及んで自分の好奇心のためだけに動いていることに苛立ちを覚えるが、それでセナが救われるのなら是非も無かつた。

「絶対に助けろ!! セナを死なせたら――――お前を殺すからな」

『それは困るね。至急セナ君を回収してアナグラに帰つてきてくれ! その後は何とかしてみよう』



結果的に言うと、セナは助かつた。

実際に何とかして見せた神は説明する。

「精密検査を行つた結果、セナ君の脳細胞に極々僅かなオラクル細胞が癒着していることが認められた。

便宜上癒着と言つていいが、あれは融合と言うのが正しい。

本人の弁では神機解放^{バーストモード}は神機に生きたアラガミのオラクル細胞を攝取させることで、神機本来のオラクル細胞を活性化させ、内に秘めた力を放出させるものらしい。

しかし、その実態は活性化させたオラクル細胞を連結させた腕輪を介して体内に侵入させて、神經を伝つて脳細胞に到達させる。そして意図的に脳の形を変形させることで様々な恩恵をもたらすというものらしいね。

脳は究極のブラツクボックスとも言われていて、ほんの少しでも傷がついてしまうと全てが壊れてしまうほど纖細な一面を持つものの、逆に制御されていた力を解き放ち才能を開花させる者もいたという。

実際に以前の世界で、頭を鉄ポールが貫通した事件があつたそうだが、その被害者は障害を負うことなく、天寿を全うしたと言う。

奇跡的に生命活動を司る部位に損傷は負わず、失った部位は大脳の代償機能によつて補えたのだろう。

とは言え、脳の形を一時的に変えるなんて人間業じゃないよね。本人は無意識でそれを行つていたみたいだけど、それを実行してきた脳細胞と融合したオラクル細胞は誤魔化せない。

バーストモード

神機解放を使えば使うほど神機から送られてくるオラクル細胞が脳に溜まり、弊害を起こす。

今回は脳に収まりきらなかつたオラクル細胞が神機に戻ろうとした所、何らかのトラブルがあつて右手に駐在。そのまま偏食細胞を食い散らかしてアラガミ化を起こしていたようだ。

だから溜まつたオラクル細胞を元の居場所である神機に戻してあげれば、セナ君のアラガミ化を治すことが出来る。

今は実際に戻している最中だよ。
そのためには常に神機とリンクさせる必要があるから、片時も神機を手放せない状態
だけね。

経過を観察しても良好だ。

直に元の綺麗な手に戻るだろう。

ただ他にも目に見えない傷を彼女は負っていた。

脳は全稼働率を100%とするならば、普段は30%ほどしか力を出していない。
それは身体の限界を超えた力を出さないためだね。

身体を守るためにリミッターを掛けているんだ。

でもセナ君は無理やりそのリミッターを外してしまったんだ。

身体のあらゆるところに多大な負荷をかけてしまった。

それ相応のダメージを負っているよ。

これらも治してやりたいけど、アラガミ化のことを考えるとむやみに人為的な処置を
施すのは危険なんだ。

アラガミ化を治し終わつたら治療を開始する予定だ。

まとめると、アラガミ化を克服するのに身体が手一杯で、他に損傷した神経や筋肉に
まで手が回りそうにない。

しばらく……そうだね、三ヶ月か四ヶ月くらい安静にしていれば常人のそれに戻るはずだ』

セナがアラガミ化してから二週間が経つた。

現在セナは特設された医療室で鎮静剤を打たれて眠りに就いている。

安らかな顔でベッドに横たわるセナの右手は未だに醜い形に歪んでいるものの、発見された当初よりはだいぶ良くなっていた。

その右手に握られている神機のコアは規則的に点滅を繰り返しており、着実にセナの手からオラクル細胞を回収している。

最初にセナが目を覚ましたのは医療室に入つてから三日目のときだつた。

「……う

「セナ!? セナ!! 気づいたのか!?

「……その声はソーマ君?」

「ああ、俺だ!! チクショウ、心配させやがつて……!」

ピクリとも動かず眠り続けるセナをずっと見守つてきた身として、張り詰めていたものが緩み、思わず涙が零れてしまう。

だが、それを恥ずかしがる余裕も無く、見つとも無く嗚咽を漏らした。

俺がクアドリガに砲撃されて担ぎ込まれたときのセナも、こんな思いだつたのだろう

か。そう思うと申し訳なさも込みあがつってきた。

セナは両目を開けて、困ったような笑顔を浮かべて左手を差し伸べた。
だが、その左手は見当違ひの方向へ伸びており、セナの向く方向もまた、俺の目を見ておらず、胸元辺りへ向けられていた。

「……おい、セナ？」

「…………あれ、おかしいなあ…………。目は開いてるはずなんだけど、真つ暗で何も見えないや。ソーマ君、悪いんだけど部屋の電気を付けてくれる？」

「は……？ 電気は付いてるぞ」

「…………え？」

いつものからかいではないのは明白だった。

ペチペチと自分の顔を両手で触り、そしてその右手の感触に違和感を覚え、笑顔を見るみる内に萎ませた。

そして、今にも壊れてしまいそうな、作った笑顔で震える右手を眼前にかざして、言った。

「ねえ、ソーマ君。私の右手、どうなつちやつたの？ 私、何も見えないから解らないの」

「……セナ、いいから寝とけ」

「ソーマ君」

「セナ！ 大したことじゃねえ！ すぐに治る！」

「ねえソーマ君！ お願ひだよ!! また独りになんてなりたくない!! 嫌だよ!! こんな暗闇に置いてけぼりにしないで!!」

目が見えなくなっていた。

自分の変質した右手を確認することも出来ず、ただ氣味の悪い感覚を訴える右手を切り離すことも出来ず、突然真っ暗になつた視界へ闇雲に両手をばたつかせた。

癪癩を起こした子供のように泣き叫ぶセナを、俺は必死に抱きとめることしか出来なかつた。

胸から込み上げてくる何かを押さえつけるために、俺はあらん限りの力を込めてその華奢な身体を抱きしめた。

ゴッドイーター用に調整された鉄のコップすら紙くず同然で握りつぶせる俺の力で押さえつけられるのは、さぞ痛かつただろう。

なのに安心したような息を搾り出し、俺の背に左手だけ回して肩に頭を擦りつけただけ、しばらくして涙を零しながら眠りに落ちた。

それから騒ぎを聞きつけた榊たちが鎮静剤を片手に飛び込んで俺は追い出された。

セナの目の網膜には異常は無かつたらしい。

目と脳を繋ぐ神経が摩耗しており、様子を見なければどうしようもないとのことだつた。

結局は榎から説明された通り、アラガミ化を治せれば目も直に治る見通しだ。だが、あの時に味わった無力感は忘れられない。

セナが危険な目に遭っていた時にそばにいてやれなかつたこと。
傷ついたセナを前に取り乱すことしかできなかつたこと。

そもそもセナが特務という危険な任務に毎日就いていたこと。
バーストモード
神機解放という危険な能力を得ていたこと。それを俺に伏せていたこと。

そして、もし俺がセナと共にいたとしても、きつと足手まといになるだけだつたと思つてしまつたこと。

何もかもが俺のちっぽけなプライドをはずたずたに引き裂いた。

セナの戦闘を多少は習つたつもりでいた。
確かに腕は上がつた。

でも、セナは俺の手が届かないような、遙か先まで歩いていた。俺はセナに甘えていただけだつた。

まるで覚悟が足りなかつた。

だから俺はセナの肩代わりをすることにした。

あのクソ親父と顔を合わせて、セナが受けるはずだつた特務の一部を代行することを申し出た。

階級的に任せられないと足蹴にされたが、実績面を押し出して何とか特務の中では最も簡単なものだけは受注されることを許された。

最も簡単とは言え、その実は大型アラガミを一度の任務で何度も狩るものだ。

本来なら部隊を編成して日に分けるほどの内容を、たつた一人で一日にこなせと言う。

正気の沙汰ではない任務ばかりだ。

でも、これがセナが背負つてきたものだ。これぐらいこなせなければ一生俺はセナに着いていけない。必死にこなし続けた。

無印

第10話 ソーマ S.i.d.e

俺が特務を受け始めてから一週間ほど経つた。

セナは順調に快復し、アラガミ化した右手も指先以外は元通りに戻った。

「セナ君ほど神機との親和性が高くないと到底できない芸当だ」

と提案した榊が驚いており、予測より早く身体の治療に取り掛かれるとのことだった。

そして俺の方はと言うと、二日前に着任した”新型”のお守りに出かけていた。

新型——第二世代神機使いと呼ばれている貴重な人材だ。

遠近両立の神機を扱えるポテンシャルを秘めたソイツの見た目は、驚くほど平凡だった。

黒髪に黒目。

背も平均的な高さで、唯一他と変わっているのはフエンリル制服を律儀に着込んでいることくらいか。

名前は神薙ユウ。
かんなぎ
ユウ。

大層な名前だが、十中八九フェンリルに拾われた孤児だろう。

そうでなきや、そんなゴッドイーターのために生まれたような苗字を冠するわけがねえからな……。

そんなユウは俺と同僚のエリック・デアリフォーゲルヴァイデでミッショントコード『鉄の雨』に出撃していた。

噂とは大したもので、俺が特別に難易度の高い任務をこなしているとあつという間に知れ渡っていた。

俺が特務を受けていることを知つてるのはクソ親父と榊、ツバキとヒバリだけのはずだが、立ち振る舞いだけで察せる奴がいるらしい。

セナの時は誰も気づいてなかつた癖に、調子の良い奴らだ。

そんな噂を鵜呑みにしたエリックは、どういうことか俺を超えることが目標などと新型に熱く語つている最中だ。

ミッション中だというのにお氣楽なことだ。

が、俺の正体を知つていて話しかけてくる数少ない奴だ。

他の奴だつたら多少は怖い目に遭わせてやつて教訓にさせるのも良かつたが、今回は特別だ。

「エリック、上だ」

「え？」

冷静にエリックに組み付かんとしていたオウガテイルを叩き落とす。体勢を崩し、地面に這いつくばつたところを容赦なく叩き潰す。アラガミの中でも最弱のオウガテイルだが、その身体は俺たちより一回り大きいほどだ。

体重もそれ相応にあり、飛び掛かれたら瞬く間に押し倒され、凶悪な顎で食いつぶされるだろう。

ザコの代名詞であるアラガミ、オウガテイル。

しかし皮肉なことに、最も多くゴッドマイターを殺したアラガミもあるのだ。

廃工場の屋上から飛び掛かつてくるとは夢にも思つていなかつたらしい。

死んだオウガテイルを無様に尻餅をつきながら呆然と眺めるエリックに手を差し伸べる。

「ほら、立てるか」

「あ、ああ……すまない。僕としたことが情けないところを見せたね」

エリックは所謂ナルシストというやつだが、素の性格は悪い奴じやない。自分の反省すべき点は素直に受け止められる奴だ。

それにナルシストのくせに自分の腕を過大評価しない妙なやつでもある。

そういうところが皆に認められているのだろう、エリックを頼りにする奴は多い。

ユウもそのクチのようで、さつきまで熱弁していたのにさつそく無様を晒したエリックを笑うようなことはせず、駆け寄つて声を掛けていた。

それから俺に声を掛けた。

「その、僕が言うのも変ですが、エリックさんを助けてもらいありがとうございました」「……変な奴だな。初めて顔を合わせる奴が死のうと、簡単に切り捨てるのが極東だぜ」「えつ、そうなんですか!?」

「冗談に決まってるだろ。間に受けるな」

気のない苦笑いを浮かべる新型。

セナに会つていなかつたら、きっとオウガテイルの奇襲に気づくことも、エリックを救えることも、新型と雑談を交えることもなかつただろう。自分の確かな成長を感じられ、人知れず笑みを零す。だが油断は禁物だ。

これくらいではセナに到底追いつけない。

そんな決意からか、無意識に俺はこう言つていた。

「お前は、どんな覚悟を持ってココに来た」

「え?」

俺が戦場に来るとき必ず心中で呟くことだ。

昨日の任務は上手くこなせた。

だが今日はそうとは限らない。

セナなら簡単に終わらせるはずだ。

俺はそのラインに到達していない。

大切な人をこの手で守るために、俺は戦場で戦う。

そのためにも、俺はもつと強くならなくてはならない。

「……ふ、気にするな。少し先輩風を吹かせてみたかつただけだ」

死の恐怖を今更になつて感じたのか腰を抜かすエリックに声を掛けようとしたとき、

新人は呟いた。

「誰かのために戦えたらと……そう思つてます」

「……そうか。見つかると良いな、その相手」

「はい！」

「ソーマ、今回は遅れを取つたが次は僕が助ける番だ。大船に乗つたつもりでいたまえ、
僕が華麗に援護してみせよう！」

声を掛けるまでもなく立ち直つていたエリックにユウが拳を突き上げて賛同する。
頑張れよと適当に口ずさみながら戦場を駆ける。

いつもより足取りが軽く感じられた。



「へえー、新型君……ええと、ユウ君！ 優秀そうじやん」

「新型らしく遠近両方使いこなしてた。動きはぎこちねえが、その内優秀なゴッドイーターになるだろ」

任務を終えたその足でセナのお見舞いにやつて来ている。

「ふふ、今日も来てくれてありがとねソーマ君」

「俺が来れば早く治るんだろ。俺としても早く治つてもらわないと困るからな。仕方なくだ」

「ん、ありがとー」

両目に眼帯をしても相変わらずの快活な笑顔を見せるセナ。

がつちり握られている左手を意味もなく揺らしては楽しそうに鼻歌を歌う。

すっかり元気になつた。

二回目に意識を取り戻したとき、最初に目を覚ました時の取り乱しつぶりを赤くなりながら謝ってきたセナは、俺以外とは面会謝絶となつた。

うつかりセナと呼んでしまっていたが、よほど混乱していたのか、そのことは覚えていなかつた。

榎曰く、身体機能の欠落は想像以上のストレスを本人に与えているはずで、セナにとって俺は特効薬なのだという。

前者は納得するが、後半は怪しいものだが本人が元の調子に戻っているのだから、そういうことにしておく。

そういう訳で、セナの目が戻るまで俺は毎日医療室に通つていた。

ただ通つて無言でいるわけにもいかず、されど取り乱したときに言つてた”また独りにしないで”という言葉を言及するわけにもいかず、その日あつた出来事をかいつまんで話している。

俺が特務を受けていることはセナに伏せている。

余計な心配と負い目を感じさせたくないからだ。

関係者にも伏せるよう厳重に釘を刺しておいたが、なぜか生暖かい眼差しで笑われた。

大方、セナもこんな感じで俺に伏せていたのだろう。

こうして雑談していても、やはりセナは右手のことを気にしているようだつた。氣にするなどいう方が酷だが、俺から見えないように右腕を隠す姿は胸の内を刺すも

のがある。

当然ながら、セナにはセナの身に起こっていることを説明してある。
バーストモード
神機解放の反動は薄々予想はついていたようで、右手がアラガミ化したこと自体には驚いてはいなかつた。

ただ一時的とは言え視力を失つたのは精神的に苦しいものがあるようで、俺と話している以外は鎮静剤を打つてもらい寝ているそうだ。

俺もいつまでも弱つたセナを見たいわけじゃない。

さつきと治してもらつて、また前のようにぐだらないからかいの一つや二つをしてもらわないと、調子が狂う。

自然とセナの左手を握る手に力が籠る。

「今日は情熱的だねー」

「お前は相変わらず暢気だな。成人らしく振舞えよ」

「はあ、以前のソーマ君なら顔を赤くして取り乱してくれたのに……。すっかり大人になつちやつたねえ」

「もう十八だ。ガキ扱いするな」

「そつかあ。じやあオトナの悪戯をしても大丈夫かな?」

そう言い眼帯を外すとぐつと顔を近づけてくる。

本当は見えているのかと思うほど正確に俺の鼻先でピタリと止める。ふいに揺れた煉瓦色の髪からシャンプーの匂いが漂う。

お互の息がかかりそうな距離で瞳を見つめあう。

尤も、セナは見ていないはずだが。

そこらへんに歩いている女よりは整っていると思える顔が目の前にある。首から上に血が上のるのを自覚する。

光が見えないはずの目は寸分違わず俺の目を捉えて、逆に俺が逃げるよう顔を背ける。

ちょうどそのときポケットに忍ばせていた業務用の携帯端末がバイブした。

そばを離れて応答した。

逃げたわけではない。

むうと小さく唸つたセナだが、よく見れば頬が少し赤くなっていた。

自分で仕掛けて恥ずかしがるなら最初からするなど心中で悪態をついて医療室を出る。

「なんだ」

『これからお前の受ける特務について話がある。私の部屋に来たまえ』

君という二人称を普通とするくせに、俺にだけはお前と言うクソ親父は要件だけ述べ

るとさつさと切つてしまふ。

俺も何か話したいとは思わないが、冷静に物事を考えられるようになつた今では何とも慕い甲斐のない親父だと思う。

頭の後ろで腕を組んで寝そべつてゐるセナに声を掛ける。

「悪い。仕事が入つた」

「えー、またあ?」

「人手が足りねえんだと。今日はもう来れない」

「……そつか。それじゃ、また明日ね」

そう言つて寂しそうな笑みを浮かべて左手をひらひらと振るのだ。

さつきまで無邪気にはしゃいでいたのに、別れ際にその顔を見せるのはずるいと思つた。

いつもは俺を玩具のように扱つては笑い姉貴ぶるセナが、今では親を無くした子供のようだ。

セナが俺を見つけたときも、こんな感覚だつたのだろうか。

「治つたらさつきの続きしろよ」

「……えつ、え!? それどういう——」

慌てふためくセナを無視してドアを閉め切る。

もし目が見えないフリをしていたら困るからな。
今の俺の顔は。

意味もなくフードを乱暴に被り直し、エレベーターに乗り込んだ。

第11話 リンドウ s i d e

邦枝セナが任務中に重傷を負つたと聞いた時は耳を疑つた。

奴つさんほど負傷からほど遠い存在を、俺は知らなかつたからだ。

と言つてもサクヤからセナの負傷の内容を打ち明けられるまで、奴つさんが担ぎ込まれたことすら知らなかつたけどな。

確かにアラガミ化の進行している神機使いをアナグラに匿うなど、アラガミを狩る名目を掲げるゴッドイーターが聞いて呆れられるところだ。

内密にするのも無理はない。

そういうこともあつて、セナの入院は極秘事項として取り扱われていた。

アラガミ化を治すまでの間、榎博士に匿われることになつたらしい。

同じ特務を受けていた俺ですら知らされなかつたから、一般兵でセナの現状を知つているのはソーマとリツカくらいだろう。

幸い、奴つさんは顔こそ広いものの特定の誰かと深くつるむことはほとんどなかつたから、セナの長期不在を怪しむ輩は出なかつた。

逆に言えば深くつるんでいた輩は大いに騒いでいたが。

セナが交戦したアラガミはハンニバルと名付けられ、極東で確認されたアラガミの中で最高レベルに認定された。

コアを抜き取つても再生してくる化け物の上にとんでもない機動力を備え、圧倒的火力をまき散らすらしい。

文句なしの接触禁忌第一種だ。

これまで新種は何度も確認されてきたが、ハンニバルは群を抜いて凶暴性が高く、また脈絡もない出現から極東のアラガミ事情に大きな不安が寄せられた。

スサノオ程度と言つてのけるセナに重傷を負わせるアラガミが出てきたことに戦々恐々するばかりだ。

まあ、建前はここら辺にしておこう。

俺が注目している問題は、セナが受けた特務の裏の話だ。

姉上に聞いたところ、事の原因は支部長の横槍だつたらしい。

状況的に見て撤退することが上策だったにも関わらず偵察の任を与え、さらには討伐まで視野に入れさせたんだそうだ。

前々からうちの支部長はどこかきな臭い野郎だとは思つていたが、今回の一件で俺は支部長に裏があると確信した。

まあ、こんなご時世で高い階級に就いた連中に裏がないはずがないのは明白だがな。

俺が特務を受け始めたころにフェンリル本部からヨハネス支部長の身辺調査を要請され、細々とその任をこなしていたわけだが、今回の一件を具申したところ俺自身の警戒を強化するようになると通達された。

そのことから察するに、セナも本部から俺と同じ任務を言い渡されていたに違いない。

きっと本部は密かに身辺調査をされていることに気付いた支部長がセナの暗殺を図つたと考えたのだろう。

しかし少し引っかかるところがある。

全接触禁忌第一種を単独且つ無傷で狩りまくっているセナを暗殺するために、なぜよりにもよつてアラガミを使つたのだろう。

下手なアラガミを刺客として送つても返り討ちに遭うのは、セナの実力を知っている者なら誰もが解ることだろう。

特に支部長は、自身が発令した特務の報告を通して痛感しているはずだ。

何か重大なことを見落としているのではないか。

俺もフェンリル本部も見落としている何か。

喉に引っかかる魚の骨のように、憶測と事実の齟齬が胸につつかえた。

今の俺には事実の確認が必要だ。

どこまで身辺調査を進めたのか。

どういった状況でハンニバルと遭遇したのか。

いつ支部長に気取られたか、はたまた偶然起きた事故だったのか。

それを確かめるために俺はセナの病室へ足を向けた。



榎博士の研究室の一室に設けられた医療室にセナは収容されていた。面会謝絶と書かれたプレートが外されているのを確認しノックする。中から気の抜けた返事が返ってきた。

「よお。今日は大変そうだな」

「そりやあ大変だつたよー。三ヶ月もベッドでじつとしていないといけないなんてね」簡素な病衣を纏つたセナは気さくに右手を挙げて減らず口を叩く。

榎博士から聞いていたが、まさか本当にアラガミ化を抑え込むとはつくづく常人離れした奴だ。

いつもソーマが座っていたであろう椅子にどっかり座りこむ。「身体の調子はどうだ」

「ようやく治療を始められそうだつてさ。お陰で身体を起こすのも一苦労だよ」

両目を覆った眼帯を鬱陶しそうに外しながら肩を竦めて見せる。

そして未だ見えやしない両目をしつかり俺の目へ宛てがつて、平然と言つてのけるの
だつた。

「そういうわけで、重要なお話を聞く姿勢は寝たままでもよろしいですか？ 少尉殿」

「もつと敬意を払つてから尋ねたまえ准尉殿」

まだ何も言つてないのにどうしてコイツはこれから話す内容を知つてゐる風な口を叩
くのかね。

「リンドウが仕事の話をするときは、決まつて何気ないことを前置きするからね」

そして平然と俺の内心を読むな。

「サクヤから聞いたな？」

「ご名答。下手な気を遣わなくとも良いのについて言葉も添えてね」

「さいですか」

「おふざけはここら邊で止めておこうか。盗聴の心配はないから、好きなだけ話せるよ」

榊博士の研究室はアナグラの電子ネットワークから独立している……らしい。

どうやつたらそんなことができたのか解らないが、あの怪しく細められた目を無暗に

覗かない方が賢明だ。

セナが一息ついてベッドに身を沈めたのを契機に、俺は口を開いた。

「単刀直入に行こう。フェンリル本部から支部長の身辺調査の依頼を受けているな？」

「受けてるよ」

「お前さんはどこまで調べた？」

「エイジス計画が嘘つてここまでかな」

「嘘？ それはどういうことだ」

エイジス計画。

それは極東支部が中心となつて進められている計画のことだ。

海上にドーム型のアラガミ防壁を張り巡らせた人工島を建設し、生き残った人類を移住させる予定であるらしい。

現代建築の父とまで言われているヨハネス支部長が発案で、順調に人類最後の砦を建築している。

それが嘘ということなのだろうか。

セナは両手を頭の後ろに回して天井を見上げた。

まるで絵空事を眺めているような調子だつた。

「嘘は言い過ぎたかなあ。精々認識の食い違い、悪くて違う計画の隠れ蓑つてところ。

尤も、私も確証があるわけじゃないから本部には報告してないけどね」

「理由を聞いてもいいか」

「実際に見てみたんだよ、エイジス島を」

「バカを言うな。エイジス島は建設中につき、関係者以外立ち入り禁止って話だろ？」
 「わざわざ正面から入ることはないさ。何せ、一から作る人工島の上に、すっぽり蓋をするようなドーム型が完成形なんでしょ？ そういう建築物は普通、最後に蓋をするものだよ」

「まさか、上から覗いたってのか？ いつたいどうやつて」

「ちらりと俺の顔を見たセナがあつけらかんと言った。

「ヘリで『愚者の空母』に向かう途中、運転手にお願いして寄り道してもらつたんだ。整備士とか護送の運転手とか、そういう人と仲良くなつておいた方が良いよ？ データに残らない情報なんかも貰えるからねー」

その言葉に俺はハツとなり、思わず頭に手を当てた。

コイツが本職に関係する討伐班や防衛班のみならず、色々な奴らと面識を持つていたのは情報収集のためだつたのだ。

確かにセナがそういう関係を築き始めた時期と、特務を受け始めた時期が一致している。

俺は誰にも内密にということに囚われすぎて、自分一人で何とかしようとしていた。

「ま、こういう打算的な話を抜きにしても、色々勉強させてもらえることは多いからね。」

実際にヘリを運転させてもらつたり、神機の製造に立ち会わせてもらつたり

「お前さんは本部から送られてきた優秀なエージェント工作兵か何かか」

冗談交じりに言つてやると、セナは思いのほか真剣な顔で答えた。

「昔、この時代を生き抜くノウハウを教えてくれた人がいただけだよ」

「……そうか。話が逸れたな、続けてくれ」

「そうだね。結論から言うと、エイジス島はあまりにも小さすぎた」

「建設途中だからって訳じやなくて？」

「計画が実行されてから五年は過ぎてるんだよ。さすがに人工島の基盤くらいは粗方作り終わってるはずだよ。本当に人類の一部でも匿おうとしているのなら、極東支部のコロニーより大きくないと話にならない」

エイジス島はフエンリル極東支部から50キロ離れた太平洋上にある。

『鎮魂の廃院』や『愚者の空母』から臨める遠景の中にエイジス島を確認することができるが、それほど離れた場所から見てもなお巨大に見える。

だから盲目的にエイジス計画を信じていた。

あの巨大な島にコロニーに入れなかつた大勢の人たちを匿えるのだと。

俺も支部長の身辺調査が滞り始めたため近々エイジス島に侵入する計画を練つてい

たが、セナは覗き見というある意味初步的な手段でもつて情報を掴んできた。

俺にはそんな大胆な発想を思いつきもしなかつた。

さすが第二世代神機に搭載された『インパルスエッジ』の考案者と言わざるを得ない。「具体的にどれくらいの大きさだつたんだ?」

「私個人が言い表せるほどじやなかつたよ。それくらい大きかつた。けど、エイジス島に人を匿うとして居住区を始めとした食料庫や運営管理施設、収容人数の上限を考えと、とてもじやないけど敷地面積が足りなかつた。村を興した経験が無かつたら気付けなかつた」

廃ダム近くに見捨てられた人たちを集めて作つた村のことだ。

畑を作りダムから水を引き、外壁としてアラガミを食う木で囲つた村には約百人ほどの村人がいる。

たつた数十人を養うのにアナグラと同じくらいの敷地面積を要したこと驚いたのは記憶に新しい。

尤も、素人が四苦八苦しながら作つたからこそでかくなつたのは否めない。

極東支部周辺に広がる居住区みたいに、村人をぎゅうぎゅう詰めにすれば半分くらいの土地で済んだかも知れない。

が、どつちにしろ大勢の人を養うのに広大な敷地が必要なのは変わらない。

それが人類のごく一部と言葉にしても、数万人を想定していると銘打つたからには相応の規模でなくてはおかしい。

「エイジス島の規模から考えた憶測はここまで。あともう一つ不自然な点があつたんだ」

「上から覗いて気付ける不自然な点と言われたら、間違いなく上から覗けなかつた部分だろうな」

「その通り、話が早くて助かるよ。アレはどう見ても”誰にも見せたくありません”って意思があつたね。でなきや一部にだけ急ごしらえの天井を付けるはずがない」

「そこ」に支部長の思惑が隠されてるつて訳か。だからそれを覗こうとしちまつたお前さんが処理されそうになつたと……」

俺が一人納得し独り言を漏らすと、セナが何のことだと眉を顰めた。

「私が処理されそうになつた？ 不吉な話だね、何のこと？」

「俺はてつきりお前さんが支部長の秘密に触れそうになつたから、支部長に特務と銘打つた暗殺を仕掛けられたんだと思つたんだが、違つたか？」

「ああ……私が怪我をしたからなおさらバイアスが掛つちやつたのね。それなら多分誤解だよ。この怪我は私自身が原因だからね」

「どうなのかな？ だがハンニバルを討伐しようと支部長に命令されたつて聞いたぞ」

「私なら初見でも討伐できるつて思つたんでしょ。私もそう思つたから従つたし。それに、特殊なコアがご所望と随分前から聞かされてたんだ。今回の新種のアラガミのコアがそれだと思つたんだろうね」

「……そういうもんか」

「私の暗殺に、よりもよつてアラガミを使おうと企てるほどのバカだつたら話は早かつたけど、ヨハン支部長に限つてそれはないよ」

攻略法さえ見つかればコアの無限リソースをくれてやれるつてのにさ、と笑つて見せるセナ。

まあ、本当にそれができる算段がついてるんだろうな。

たつた一回の交戦経験だけで。

普通のゴツドイーターたる俺から見れば全く笑えない現実だ。

「そもそも何で支部長は大量にオラクルリソースを必要としているんだ?」

「さあね、私もよく解らない。でも、最近はハンニバルを始め多くの新種が見つかってるらしいし、新種の偏食因子を採取できれば応用も効くから集めておくに越したことは無いんじゃない?」

「それらしい理由だな……」

「一応支部長は現代建築の第一責任者だよ? 対アラガミ装甲壁を始めとした多くの建

築には偏食因子が用いられてるし、研究材料として集めてる分には不思議はないよ」

「これ以上はエイジス島に入つてみねえと話が進まなそうだな」

まとめるに、セナの負傷は支部長の思惑によるものではないという見方が濃厚だな。何度も言つてゐる通り、セナを暗殺するためにアラガミを仕向けるのはバカのすることだ。

素直に支部長直属部隊を仕向けた方が数百倍賢い。

だが、やはりハンニバルの出現は気にかかる。

突拍子もなく表れた超級の化け物。

今まで見つけられた新種はどれも何かしらのアラガミと似た骨格を持つていたが、ハンニバルは全く新しい骨格だった。

凶暴性も極めて高く、予想される被害も莫大だ。

何か不吉な予感がしてならない。

誰もが予見しえない脅威が迫つてゐるよう思える。

思わず支部長が何か仕組んでいるのではないかと疑つてしまふほどに。

例え、集めたオラクルリソースを使って未曾有のアラガミを作り出しているとか。

……言つておいてアレだが、さすがに無理だろう。

仮にそうだったとして、そのアラガミをどうするつて話にもなる。

精々画期的な人類救済の目処を探していることを祈る。

「さて、俺はそろそろ行くとするかね」

「あんまり力になれなかつたかな」

「俺よりよっぽど詳しく述べて驚いたわ。後はおじさんに任せて身体を休めな
よつこいせえ、とわざとらしく零しながら椅子から立ち上がつた俺に、セナは待つた
を掛けた。

「関係無いかもしけないけど、特務を受け始めた頃に支部長に変なことを聞かれたんだ
よ」

「変なこと？ セクハラか？」

「その発言がセクハラだよ。確かに『一隻の船が難破し、乗組員は全員海に投げ出された。
一人の男が命からがら、壊れた船の板切れにすがりついた。するとそこへもう一人、同じ
じ板につかまろうとする者が現れた。しかし、二人がつかまれば板そのものが沈んでし
まう。さて、君が板にすがりつく男になつたらどうする？』つだけ」

「それは寓話か？ それで、お前さんは何て答えたんだ」

「随分前のことだからね、もう忘れちゃつたよ。今ならソーマ君を見つけるまで誰にも
譲らないって答えるよ」

「ソーマのゾッコンぶりも大概だが、お前さんも大概だな」

セナは恥ずかしがることもなく、むしろ堂々と胸を張つてみせた。

「ふふ、讃め言葉として受け取つておくよ。でもね、私の答えは一見美しいようにもみえるけど、翻せばソーマ君以外の人間すべてを見殺しにするつて意味なんだ」

「……その二面性が、支部長の考えに繋がつているかもしないってか？」

「エイジス島の話をしていたらふと思いついたから言つてみただけ。でも状況は似てると思わない？」

数万人を乗せられる人工島。

それ以上の人間は乗せられず、乗れなかつた人間はアラガミの餉食になる。

救えるのは限られた席を確保できた幸運な人間だけ。

大雑把に言えば、確かに似てることもない。

しかしこの場合だと支部長は乗せる人間を選ぶ神様だ。

支部長の独断と偏見で助かる人間が選定されるだけだ。

寓話もあつたものじやない。

……いや、もしかしたらその神様にならざるを得ない自分を疎ましく思つたから、セナに質問したのかもしれない。

君ならどうやつて選定するかを。

「……考えすぎだな」

「止めちやつて悪かつたね」

「なあに、面白い話を聞けて良かつた。俺もサクヤのために意地でも板を守るだろうさ」「尤も、そんな状況に遭わないことを祈るばかりだが。

さて、エイジス島に侵入するにはどうすればいいかね。

この間たまたま見つけたセキュリティキーを使って侵入するか。

そんな適当なことを考えながら扉に手を掛けた俺の背中に言葉が投げかけられる。

「エイジス島に行くつもりなら気をつけなよ。ミスつても助けてあげれないから」

だから勝手に人の心を読むなっての。

肩越しに手を振つて返答しながら病室を出た。

第12話 セナ Side

「うん、しつかり治つてゐみたい」

「目の方も大丈夫かい？」

「博士の怪しい顔もバツチリ見えます」

瞳が見えないほどの細目とゴツドイーターを生み出した頭脳を併せてまさしく狐のような榎博士は、私の軽口に合わせて芝居がかつた笑顔を浮かべる。

ソーマに持つてきてもらつたフェンリル制服を着こみ、軽く準備運動をしながら身体の不調子が無いか確かめる。

三ヶ月もベッドの上で寝転がつていたから固くなつてゐる部分もあるけれど、筋肉や腱に負つたダメージは見事に回復していた。

ハンニバルと交戦してから約三ヶ月で私は退院した。

アラガミ化を起こして いたらしい右手は寸分違わず回復しており、ようやく現場復帰することが叶つた。

榎博士のラボに急遽作られた特別医療室から出てソファに腰掛ける。

博士はいつも作業をしているデスクに就いた。

「退院おめでとう。セナ君」

「ありがとう博士。ゴッドマイターになつて約五年、初めての入院でしたよ」

「普通は任務に着任して一ヶ月で入院を経験するはずなんだがね。セナ君も完璧超人ではなかつたということだね」

「御冗談を」

本気で言つたんだけどね？ と呆れた声で返される。

それから場を整えるように咳払いをすると、博士の顔は学者のものに変わつた。

「さてセナ君。キミが話してくれた予想に従つて私なりに調査してみた結果、ハンニバルについて面白いことが解つた」

「やつぱりあのハンニバルは基本種じや無かつたんだね？」

私が先んじて言うとその通りと大仰に頷いて見せた。

戦闘中に感じた違和感から出た疑問だつたのだ。

と言つても大したことじやない。

異様なスピードを誇るハンニバルだが、なぜか振り向くときや体勢を整えるときだけは他のアラガミと大差ない速度だつたのだ。

まるで攻撃だけは絶対に当てるという意思が表れているかのようだ。

尤も、ハンニバルはそういう戦闘スタイルだつたからと言われてしまえばそれまで

だ。

しかし、交戦経験豊富な私が戦闘中に感づいた違和感がただの勘違いとは思えなかつたのだ。

引っ張ってきたモニターに私が撮影したハンニバルの写真が映し出される。講義の時間である。

「本来、アラガミは進化の過程に於いて捕食というプロセスを踏まなくてはならない。またその進化は外見的進化を終えてから内面的進化を開始する。つまり、進化の過程をすっ飛ばしているように思えるアラガミの成長にも、必ず一本の根幹となる道筋が存在するということだね。その進化の過程に局地の天候といった外的営力が加わることによって堕天種が生まれるのだが、そういった進化は進化前の面影を色濃く残すものだ。例えばコンゴウとコンゴウ落天種のように、獲得する能力こそ違えど姿形は酷似している。」

しかし今回のハンニバルは全くの新種。容姿も決定的に違えば能力も違う。前代未聞のアラガミだ。ゆえにこのハンニバルはハンニバルという属の基本種だと想定される訳だけど、セナ君が持ち帰つてくれたコアを解析してみると、これまでに見たことのない突然変異を起こした形跡が見られた」

「突然変異ってヘラのように共食いの果てに至つたような感じのことですか？」

「それもあるだろうね。ヘラの場合は重合結合という特徴が見られたからそう予想されているんだけど、このハンニバルの場合は歪なオラクルが認められてね。あたかもそくならざるを得なかつたかのような強化が施されていたんだ」

「天候とかに適応するため……じゃないんですね」

「解りやすく例えると殺虫剤に耐性を持つた虫のようなものだ。自身の命を脅かす何らかの影響に打ち勝つために、それに特化した防御を用意する。虫の場合は神経細胞と殻を分厚くしたが、ハンニバルは自身の戦闘能力の強化とコアの複製だったということだ。

恐らくハンニバルを捕食する偏食を持つたアラガミに対抗するべく生み出された突然変異種だつたんだろう。骨格や能力から察するに、基本種のハンニバルは決して脆弱ではなかつたはずだ。それを突然変異種を生み出せるまでに追い込んだアラガミがいるということになるね」

「そのハンニバルの天敵と言えるアラガミの正体とかは？」

「さすがにそこまでは解らないよ。それに真に注目すべきはそこじゃない。私たちの与り知らぬところで強力なアラガミが大量に発生している可能性があるということだ」

「ハンニバルの基本種が生まれるまでの空白のプロセスに生まれるはずのアラガミ、そしてハンニバルから派生して進化したアラガミ、ハンニバルの天敵たるアラガミ、そのアラガミの進化系統のアラガミたち……。考えだしたらキリが無い」

「理解が早いね。まさしく水面下から迫る未曾有の脅威だ。今回はセナ君だつたから大事には至らなかつたけど、これが他のゴッドイーターだつたらと思うとゾッとしたしないね。間違いなく殺されていただろうし、そうなるとハンニバルの存在すら知らずに終わつていただろう」

「でもこうした強力なアラガミが陰で大量発生しているということは、何かしらの原因があつてのことのはず……。それを解消できれば、もしかしたら……」

「それは無理だね。一度発生してしまつた以上、それを根絶やしにすることは不可能だ。そこを起点に増加していく一方だ」

珍しく断言してみせた榎博士。

アラガミのコアを抜き取つても殺したという訳ではない。

目に見えない粒子となつて大気に身を溶かしているだけなのだ。

いずれオラクル細胞たちが身を寄せ合つて再び形となる。

最前線と呼ばれる極東だが、私が思つてゐる以上に深刻な危機に直面してゐるのかもしれない。

現場復帰して早々気が重くなる。

私が唸ると博士が気まずそうに申し出る。

「ただ、原因については少し心当たりがあるんだ」

「さすが博士！ それでその原因って何ですか？」

博士が逡巡する素振りを見せて、それから顎に当たる指をビシッと私に突き付けた。

「多分キミだよ」

「えつ」

「そうとしか考えられないんだ……。接触禁忌種ほどの強力なアラガミを乱獲できるような何かと言つたら、キミを除いて誰がいると思う？」

「ちょ、ちょっと待つてください！ いつたいどういう流れでそうなつたんですか!?」

博士は突き付けた手の姿勢を変えて待つたのポーズを取り、眉間に指を添えて考へる。

それから改めて私の顔を見て説明する。

「順番に説明しようか。我々極東支部で日々狩っているアラガミの種類は、実は少ないのは知つているね？ その数はおよそ三十種。一般兵は基本種と墮天種までの討伐しか許可されていないからね。

でも実際はもっと多くのアラガミがいるわけだけど、なぜその三十種に限られているかというとその他のアラガミは凄腕の神機使いですら危ういとされるほど強力という他に、これ以上強力なアラガミが出現するのを抑えるためでもあるんだ」「ええつと……それって人為的に抑えられるものなんですか？」

「ある程度はね。アラガミは大気に分散したオラクル細胞を結集して生まれる。この分散していたオラクル細胞の元となつたアラガミが強力であればあるほど生まれてくるアラガミも強力になるという、『アラガミ進化論』から派生した理論が有名になつてね。オラクル細胞自身が捕食をし、取り込んだ力もオラクル細胞自身に保存されるはずであり、それらオラクル細胞が結集すれば強力なアラガミが生まれるはずだということで、学会の間で強力なアラガミは極力避けることが賢明だという結論が出たんだよ」

「……まさか」

「そのまさかだよ。接触禁忌という由来の大部分はこの結論から来ているんだ。強いアラガミを狩ろうにも犠牲を払わないといけない上に、狩つてもさらに強力なアラガミが生まれる可能性が出るのだから誰も好き好んで狩ろうとは思わないだろう？ それをキミは……」

うつ頭が……、と額を押さえつけた榎博士。

心労に心労が重なつたと言わんばかりに汗を滲ませる。
まるで私が悪いみたいな空気で甚だ心外だ。

私はただ神機の強化と資金集めのために依頼をこなしていくだけであつて、接触禁忌種を狩りたいから狩つていたわけじやない。

つまり私は悪くない。

……いや、どう考へても私が悪い。背中にダラダラと汗が流れるのを感じる。

「あのお……私の討伐スコアとかつてどうなつてます?」

「聞かない方が賢明だよ。キミが犯人だと再確認するようなものだ」

あ、これ完全に私が犯人だわ。

悩みの種で頭痛を催す榎博士と現実逃避に忙しい私。

そろつて頭を抱えて蹲る。^{うずくま}良い年した大人たちの醜態がそこにあつた。

「おーいセナー! 退院祝いに良い報せが——つて何やつてるのキミたち」

そこに快活な声とともにラボに表れたリツカ。

そして床に蹲る私たちを見てドン引きする。

「リツカ! 私は悪くないんだよ! 本当だよ!!」

「よし、ひとまず落ち着こうか?」

差し入れの冷やしカレードリンクで口を湿らせながら事情を話すと、リツカも榎博士と同じく頭痛を催した。

それからこのことは三人だけの秘密ということで話は強制的に打ち切られた。

臭いものには蓋をするのが賢明だ。

「そうそう、セナが発案した『インパルスエッジ』がついに完成したんだ!」

「さすがリツカ君だ。あのむちやくちやな構造を何とかしてみせるとは、まさに麒麟児

だね」

「リツカ愛してる！」

「まあセナの神機と新型君の神機にしか搭載できなかつたけどね」

『インパルスエッジ』それは神機に生きたアラガミを捕食することでオラクルを取り込ませて一力所に貯蔵する。

そして空のオラクルバレットに注入し射出するというものだ。

もともと捕食形態はコアを摘出するために考案されたものだつたが、捕食する際に神機内部にアラガミのオラクル細胞が紛れ込むことがあつた。

しかしそのオラクルを排出する機構が開発できず、メンテナンス時に取り除くしか方法が無かつた。

そこで刀身型神機に銃身型神機の一部を取り付けることで排出機構を設け、攻撃手段に転じることにしたのだ。

この案は私が発案する以前より考えられていたことだつたらしいが、具体的な設計やオラクルの働きが謎に包まれていたため実現することは無いと捨てられのだそだ。

だが、私がアラガミ化を抑えるためにリンクさせていた神機のデータを榎博士が収集、解析を行ひわずか一ヶ月でオラクルの活動傾向を大まかに解明してみせ、図面に排出機構をおこしてリツカに開発を依頼したのだ。

リツカもリツカで二ヶ月で試行錯誤の末にプロトタイプの開発に成功させたのだ。

天才二人によつて生み出された奇跡の技術なのだ。

「セナ君ほど神機との親和性が高くないと、あれほど詳しいデータは得られなかつたよ。今まで我々技術開発班が行き詰つていた壁を取り除いてくれた。セナ君も立派な技術開発者の一人さ」

「神機を握つてゐるだけで技術開発者に加えられるのは気が引けますよ。二人の功績にしておいてください」

私の名前が加わるとまた本部から召集が掛けられそうだからね。

軽く流しておくと、リツカが少し申し訳なさそうな顔で付け加えた。

「それとセナの要望にあつたバスター ブレードに取り付けるつてやつ、あれはちよつと無理そうかなあ」

「え、バスター ブレードくらいの大きさじやないと接着が難しいつて話だつたじやない？」

「接着自体は神機の内側に組み込んじやえば良いつて解つたから問題無かつたんだ。でも重量が嵩かさんじやつて……」

「なるほどねえ。バスター ブレードだと重すぎるし、ショートブレードだと持前の機動力に傷が付く。ロングブレードにしか付けれそうにないかな」

「その通り。これでイマイチ特徴に欠けたロングブレードに瞬発的な火力が備わったつて感じ」

「リンドウが喜びそうだね」

自慢げに語っていた顔に苦みが生じる。表情がコロコロ変わつて見てて面白い。

「あー……実はそのことで榎博士に相談があつたんだ」

「私にかい？」

「これを見てほしいんです。こっちが『インパルスエッジ』を装備した神機で、こっちが通常の神機のデータです」

タブレットの画面を二人で覗き込む。

私は門外漢なのでソファにくつろぎ討議する様子を眺める。

専門用語を飛び交わせつつ、なぜかチラチラと私に目を向け、揃つてため息をつく。

「なにその『これだからコイツは……』みたいな顔は」

「実際その通りだよ。なんだいキミは。どうしてこの神機を扱えるんだ」

いつたい何のことやら。リツカに助けを求めるときれいな顔で説明してくれた。

「本当は『インパルスエッジ』は新型の神機に搭載する予定だつたんだ。刀身と銃身の二つを併せ持つから、設計上楽だからね。でもいざ搭載してみると神機の適合条件が跳ね上がつちやつてさ……。まあ新型に適合するくらいなら問題ないんだけど、旧型が適合

するのはとてもじゃないけど無理な数値になっちゃつたんだ」

「その先是読めた」

「リストに照合してみたら、なぜかキミだけは条件をクリアしててね。こんだけ適合率が高かつたら新型になれると思うんだけど……」

「なぜかセナ君は新型とは適合しないんだなあ、これが」

「あ、と再びため息を零す二人。

そんなこと言われたって私も知らないよ。

「新型で思い出した。セナ君、キミは第一部隊に配属されることになったから」

「えつ、特務の方はどうなつたんですか？」

「それよりも新しく配属された新型君の方が大事だと判断したんだろうね。メンバーはユウ君とサクヤ君とソーマ君、新入りのコウタ君だ。リンドウ君も第一部隊の隊長として配属されたよ」

「コウタ君というのは初耳ですね」

「彼は元気が良いけど、ちよつと鬱陶しい感じの男の子だからね。ソーマ君と反りが合わなかつたんだろう」

「苦笑いしつつ否定しないリツカもひどいな。

「じゃあ私はメンバーに顔合わせしに行こうかな」

「そうすると良い。丁度任務から帰ってきたところみたいだから、ラウンジに行けば会えると思うよ」

「ありがとうございます博士。それじゃリツカ、夜に開発成功記念のお食事に誘うからー！」

「はいはい、気を付けてねー」

二人に見送られながらエレベーターに乗り込んだ。

第13話 ユウ s i d e

僕から見たソーマ・シックザールさんは人として尊敬できる人だ。

いかなる時も冷静沈着で仲間に気を配つてゐる。自分から口を開くことは少ないけれど、内に信念を抱き神機を手に執つてゐる。

神機使いとしても超一流と呼ぶにふさわしく、身の丈に迫る巨大な神機を自在に操り強大なアラガミを次々と屠つていく後姿に胸を熱くさせられる。

”死神”と陰口を叩かれているらしいが、任務に同行させてもらつてゐる身として言わせてもらえば守り神のような人だ。陰口を叩く人はソーマさんを上辺だけで語つているのだろう。

仮に僕が知る前のソーマさんが”死神”だつたとしても、ソーマさん自身が誇りを受けながらも努力し続け生まれ変わつたに違ひない。ソーマさんの語る言葉の節々に滲み出る優しさは、それ故だろう。

ソーマさんことを少しでも理解してゐる人は、揃つてソーマさんに信頼を寄せている。第一部隊のみんなは勿論のこと、凄腕ゴッドイーターのエリックさんもライバルとして認めてゐるし、隊長のリンドウさんもソーマさんの腕を買つてゐる。

ひとつ残念なところを挙げれば、口数は少なくちよつとだけぶつきら棒な所があるせいか、コウタには不評のようであることくらいか。



任務を終え極東支部に到着した。ようやく任務の緊張感とアラガミへの恐怖に慣れてくれたけれど、未だに護送車に揺られ尻を痛めるのは耐え難い。

護送車から降りてゲートへ向かう道中に同行していたコウタが気さくに挨拶しながら肩を組んできた。

「俺たちの華麗な連係プレイで大勝利！ もう敵無しだよなー」

「コンゴウ一体の討伐にサクヤさんとソーマさんが着いていたから無事だつただけだよ。僕たち二人だけじやまだ無理」

細かい事は気にするなー、とおどけて見せた。それから頭にかかるミット帽を正しながら続ける。

「それにしてもソーマの奴、もうちょい喋つてくれたつていいよなー。護送車の端っこで一人座られると陰気くさくなるじゃんか」

「コウタ、ソーマさんは僕たちより年上だし階級も上の人なんだから、せめて敬語で話しなよ」

『ゴッドイーターに年も階級も関係ねえさ』つてリンドウさんが言つてたぜ！ ユウは

「固すぎなんだよ」

「関係ありますー。リンドウの軽口を真に受けちやダメよ?」

ベシツとミット帽にチヨップを落としながら注意をしたのはサクヤさん。極東随一の狙撃手であり、妙齢の美女だ。抜群のプロポーションを際立たせるような服装と本人の包容力の高さも相まって、大人の色気がすごいのなんの。

おかげでコウタがでれーと鼻の下を伸ばしながら誠意の籠つてない謝罪を述べる。まつたくもう、とため息を漏らすサクヤさんに習つて僕も呆れの吐息を付く。

ふと後ろを見ればソーマさんは左腕につけた簡素な腕時計に目をやつており、僕たちの会話にまるで関心を示していない様子だ。目の前で不満を言われたというのに一切気にしない態度は貫禄すらある。

あれが冷たい態度と取られているのだろうか、と疑問に思つてると明朗な声が通路に響き渡つた。

「お帰りー！」

エントランスに入るゲートに目を引くような明るい煉瓦色の髪を持つ女性が手を振つて僕たちを迎えていた。離れていて顔まではよく見えないが、少し高めの身長のようだ。

初めて見る人でコウタに視線を投げかけると、コウタも知らないようで首を傾げてい

る。サクヤさんはハッと鋭く息を飲んだ後に安堵の表情を浮かべた。

そして意外な人物が煉瓦色の髪の女性に応えた。

「やつと治ったか」

ふてぶてしい口調ながらもどこか柔らかさを感じる声でそう言つたのはソーマさんだつた。いつの間に追い抜いたのか、すでにその女性の前に立つておりフードを脱いでいた。

軍曹のソーマさんと親しげに接する女性は同等か、それ以上の地位の人なのだろうか。

女性はソーマさんに見せ付けるように掲げた左手を開閉させながら笑つてみせる。

「えつへへ、お陰様でね」

「俺に飽きられる前に治せて良かつたな」

「またまたそんなこと言つちやつてー。実は二人きりになれて喜んでたんじやないのー

？」

「いつでも二人きりになれるのにいちいち喜ぶか」

「……いつでも二人きりになつてくれるの？ 本当に？」

「はあ？ いつも任務でそういうが」

「……はあ。この朴念仁め。そんなことだろうと思つたよ」

[?]

僕たちの知っているソーマさんとかけ離れた姿に驚愕を禁じえない。コウタも目を見開き口をあんぐりと開けて呆けている。

いつになく饒舌に、そして楽しそうに会話をしているソーマさんは僕たちの足が止まつていてるのに気づき振り向いた。そこには僕たちの知っている仮面があつた。

「ボサつとするな。特にそこのバカ丸出しの奴」

「なつ、誰がバカだコノヤロー！」

我に返ったコウタが拳を振り上げて遺憾の念を示すと、ソーマさんはフッと完全に馬鹿にした表情を浮かべた。

「誰もお前とは言つてないだろ」

「うぐつ

「自覚があるようで何よりだ。バカはうつるからな、お前も治す努力をするんだな」

気にしていない訳じやなかつた。むしろ結構根に持つてた。

倍返しされたコウタは口角を引き攣らせたが、ソーマさんはさつさとゲートを潜つて行つてしまふ。あらあらと笑いを零すサクヤさんも煉瓦色の女性に軽く挨拶をして潜つた。

ソーマさんとサクヤさんを見送った女性は僕たちに気さくに声を掛けてきた。

「やあ。キミがユウ君で、そつちのキミがコウタ君で合つてるかな?」

「あ、はい! 最近第一部隊に配属された神薙ユウと申します!」

ソーマさんと対等の人だと思うと無意識に背筋を伸ばして敬礼を取つていた。女性は両手をばたつかせて僕の敬礼を解いた。

「あはは、そんなに畏まらなくていいよ。実は私も第一部隊に配属された身でね? 邦枝セナって言うの。よろしくね」

セナと名乗った女性は人懐っこい笑みを浮かべた。しかし緊張は緩めることができずぎこちない笑みを返してしまふ。

と言うのもソーマさんと同等の人という他に緊張する理由があつた。

「うつわ……すっげえ美人……」

隣のバカが意図せず漏らした通り、セナさんはサクヤさんに引けを取らないほどの美人なのだ。それも色氣があるという感じではなく、大人と子供を足して割つたような綺麗と可愛いが両立した清々しいものだ。

服装も女性用のフエンリル制服をびちつと着こなしており、理想的な四肢やくびれに張り付く黒い生地が女性らしい艶かしさを醸し出す。けれどいやらしさは一切感じさせない。露出の多い女性陣では珍しいタイプだ。

誰かが言つていた。極東支部の女性陣は美人しかいないと。まさに的を射ていた。

そしてどの美人を前にもしても緊張するのは仕方のないことだった。

「ん？ 私が？ それはありがとう。初めて言われたよ」

「初めて言われた！ 恐るべしフェンリル……要求ラインが高すぎる……」

「すみません、このバカが何か言つてますけど気にしないでください」

「極東は美人揃いだからね。ただ実力者でもあるから、迂闊に手を出そうものなら何さ

れるか解らないよー？」

「セナさんもですか！」

「やめなよコウタ」

「残念だけど私はもう虜にされた身だから、興味のない人に手を出されたら思い切り叩
いちやうかも」

カラッと笑つてみせたセナさんは「それじや任務のときはよろしくね」と言い残し颯
爽と身を翻して去つていった。飄々として掴みどころのない、けれどどこか惹かれるも
のを持つ人だつた。

見えなくなるまでセナさんの後姿を追つていたコウタがしみじみと呟く。

「俺……ゴッドイーターになつてよかつた」

「はあつ、だからバカつて言われるんだよバカコウタ」

第一部隊が賑やかになりそうだ。



「ほいっと。任務完了っ」

「はあ……はあ……セ、セナさん……疲れました……」

「ちようど折り返し地点だから頑張ろう！」

「え、ちょっと待つてください、これで折り返し地点つて……四回連續ミッショングを受けるなんて聞いてませんよ!!」

汗水垂らして訴えるとセナさんは「ピクニツクじやあるまし」と両手を腰に当て困り顔でため息を付く。一番動き回っていたはずなのに汗一つかかず、息もまつたく乱れていないのだから恐れ入る。

「ソ、ソーマさんも何か言つてくださいよ……さすがにブラツクすぎますよこれ……」「この程度で弱音吐いてると先が思いやられるな。大型アラガミ三体同時討伐なんざザラだぞ」

「……もうゴッドイーター やめてもいいですか」

新型が今更逃げれると思えねえけどな、と事実上降伏勧告されてがつくし肩を落とす。ソーマさんもソーマさんで余力があり余っている様子だ。

セナさんはめちゃくちやスバルタだった。いや、教え方は解りやすいし、僕が会得でくるまで根気強く付き合ってくれるので助かるけど、そのスケジュールが尋常じやない

かつた。

セナさんがロングブレードを使うと聞いたのが事の発端で、僕もロングブレードを使う身として先輩に教えてもらいたいと頼むと快く承ってくれた。

ここまででは問題無かった。けれどその時に「私リハビリしないといけないから、そのついででも大丈夫?」と確認してきたときにイエスを言つたのが過ちだつた。

最初に受けたミツションが『サリエル、クアドリガ、ボルグ・カムランそれぞれの墮天種の討伐』という超高難易度のもので、新兵の僕には不適切じやないかと聞いてみたけどセナさんは「大丈夫大丈夫。良い練習台になるよ」と答えながら僕に三体の討伐を全部やらせた。

丸投げというわけではなく、取り巻きの小型アラガミを排除しつつ危ないときは完璧なフォローを入れ、それ以外は手を出さないという形式だ。

ようやく一体倒せたと思つたら間髪入れずに次の目標を連れてきて戦わせ、また倒したら連れてくるというわんこソバよろしく状態だつた。

本当に身の危険が迫つた時は絶対に助けてくれるし、アラガミの動きをコントロールして僕の戦いやすいように調整してくれているため文句を言うに言えず。更に丁寧に解りやすいアドバイスをくれるのでもつと文句を言えず。

言いあぐねている内に本日二回目のミツジョンに連れて行かれて何とか捌ききつた

ところなのである。様々なアラガミと戦つて戦い方が上手くなつたかは解らないが、新兵がこなす量じゃないのは確かだ。

ツバキさんに「ミッショնは任意制だが数日に一回受けるだけでもいい」と教えられたが、セナさんとソーマさんは一日に三つか四つのミッショնをこなしているらしい。それが普通らしい。

未だに納得できないが、それくらいないと一流のゴッドイーターになれないのだろう。

僕は明確な意思を持たずにゴッドイーターになつてしまつた。だからせめて目の前の人たちを守れるくらいに強くなりたい。そう思つたからセナさんに教えを乞うた。
「……いえ、弱音を吐いてすみません。次のミッショնに行きましょう！」

「おっ、その調子その調子！」

「フン、少しは見所があるじやねえか」

決意を新たにぐつと立ち上がる。と、その時ヒバリさんから無線が入つた。

『作戦エリア内に大型アラガミが侵入しました。これは……スサノオ!?』

「ス、スサノオ!? 『ゴッドイーターキラー』と恐れられる、あのスサノオですか!?』

あまりの凶暴さにゆえに第一種接触禁忌アラガミとしてデータバンクに登録されているアラガミの乱入に真っ青になる僕。

しかしセナさんとソーマさんはのほほんとした調子で聞き流しており、怖がっている様子は無い。

「んー、スサノオか。ソーマ君、いける?」

「当たり前だ。お前が寝てた間、俺がどれだけ強くなつたと思つてやがる」
そして狩る気満々の会話までしている。

「待つてください! スサノオを三人で相手するなんて無謀ですよ!」

「いや、ユウ君はさすがに危ないから遠くから見てるだけで良いよ」

「なおさら無謀じやないですか!」

「スサノオ程度って言えるくらいにならねえと話になんねえぞ」

「えつ、僕がおかしいんですか? これ僕がおかしいんですか?」

『安心してくださいユウさん、この二人がおかしいだけです』

ヒバリさんの諦念を感じさせるフォローが入る。そして何事も無かつたようにオペレートを始めてしまう。

『セナさんとソーマさんは乱入したスサノオを速やかに討伐してください。ユウさんは危険ですので回収ポイントに待機してください』
「りよーかい」

「了解」

「……もういいや。了解しました」

かくしてスサノオはものの二分で討伐された。望遠鏡でその一部始終を見ていたが、二人とも一糸乱れぬ連携でスサノオを翻弄し無傷で突破していた。お互いを知り尽くし、信じあつてることが感じ取れる連携だった。

ただセナさんが並走しながら『インパルスエッジ』を撃ち込み続けるという暴挙を行つていたのが気がかりだつた。ソーマさんも平然と走りながら『チャージクラッシュユ』を溜めては撃つて溜めては撃つてを繰り返してゐるし、僕が予行演習のときに習つたマニュアルとだいぶかけ離れていた。

それからしつかり二つの連続討伐のミッショնをセナさん式スパルタ訓練で乗り越えた。三つ目のミッショնで限界に来ていたはずだけど、四つ目のミッショն中は無心で戦つていたため疲れを感じずに乗り切れた。

凱旋を兼ねて別行動でサクヤさんに狙撃訓練を見てもらつて、コウタに報告するとドン引きされた。リンドウさんは「良い感じに極東に染まつてるじゃねえか」と笑つて、いたから、たぶんこれが普通のゴッドイーターなのだろう。サクヤさんが呆れのため息をついていたけど気のせいだろう。

訓練を受けて以来、僕も単騎で連続討伐のミッショնに出かけて自主練をしている。最初は辛かつたけど日に日にミッショնを終えても余裕を感じるようになつてきた。

評価もSSS+をちらほら貰えるくらいだし、着実にゴッドイーターとしての腕を上げ
れている。

なぜかコウタは「悟りを開きやがった……」と畏怖の念を抱いていた。甘えてるつ
ぽいから僕の自主練にしばらくつき合わせたら「大型アラガミ二頭の討伐？ 楽勝楽勝
！」と言うようになつた。

ようやく並のゴッドイーターになれそうである。

第14話 リツカ Side

「セナの退院祝いに」

「リツカの偉大な発明祝いに」

「「乾杯！」」

キンと涼しい音を立てて三人同時にガラスのコップを呷る。お酒だつたら大人らしこれど、生憎セナはアイスマilkティー、ヒバリちゃんはアイスコーヒー、私はアップルジュースである。年頃という便利な言葉で言い訳しておくとする。

今年で成人したセナは初めて配給されたビールを心底楽しみにしていたらしく、わざわざ私を呼び出して飲んだのだが想像を絶するマズさだったようで、それ以来はリンドウとの取引材料と化していた。

つまりお酒が大の苦手なのだ。

さておき、今日はセナの部屋で恒例の女子会を兼ねて祝賀会を開いていた。結構な頻度で開いているので新鮮さは皆無だけれども、こんなご時勢で苦労の耐えない職業に就いている女子同士は何かにつけて顔を合わせたいのだ。

極東支部に所属する女性は全体の約二割と少ない上に、二十歳以下の者はここに集

まつて いる私た ちとほんの数人だけだ。職業柄大人びた女性ばかりだし年頃というのも相まつてこの三人で集まるのがほとんどだ。

「ほんと、セナさんには肝を冷やされますよ。何だかんだで乗り越えちゃうから杞憂に終わりますけど、今回ばかりはダメかと思いました」

「あはは、私もミツショーン中にぶつ倒れたときは死ぬかもって思つたよー。目が見えなくなるわ耳がおかしくなるわ走馬灯が見えるわ、散々だつたね」

「話のネタ程度に済んで本当に良かつた。ソーマ君なんて目も当てられないくらい落ち込んでたし……」

「そ うなんですよー！ その日からセナさんに迫るくらい任務を受けて回るし、作戦行動中も無言で怖かつたんですから」

ソーマ君が担ぎこまれたときのセナより勝るものがあつた。メンテナンスで顔を合わせるときなんて鬼気迫る表情で無言で神機を渡してくるもんだから喋り辛いたらありやしない。

事情を知つている人から見ると自分の無力さを呪い必死になつているつて解るけど、はたから見たら急に不機嫌になつて暴れまわつてるようにしか見えないからね……。また変な噂されてなければ良いけど。

当のセナは健気な弟を見守る姉のような笑みで聞いてるし、反省してんのかなこの

人。

「口すっぱくして言つてるけど、もう二度と神機開放バーストを使っちゃダメだよ？」

「解つてるつて。私も突然失明する体験なんてまつぱらごめんだよ」

その点は本気で反省しているようで苦味100%というセナにしては珍しい表情だ。 樺博士によると、これ以上神機開放バーストを使うと身体がオラクル細胞に対し危機感を覚えなくなり、偏食因子とオラクル細胞の境を見失つてしまふ危険性があるらしい。何度も同じところに痛みを与えているとその内慣れてしまうように、偏食因子がオラクル細胞を捕食しなくなつてしまふそうだ。

当然アラガミ化を起こすし、そうなつてしまふと今度こそは治らないかもしない。 今回のアラガミ化もセナの神機との適合率の高さによるものと推測されているけど、実際はなぜ治せたのか不明なままなのだ。神機開放バーストは本当に諸刃の剣、禁忌の技なのだ。 ミルクティーを飲みきつたセナは電子ポットに水を注ぎながら話を振る。

「そんなことより、『インパルスエッジ』の件なんだけどさ」「何か不調子でもあつた？」

「いや全然。『インパルスエッジ』に使う空のオラクルバレットをカスタマイズしてみたんだよね」

「便宜的にオラクルバレットの弾殻と言つてるけど、実際のオラクルバレットとは別物

だから使えないと思うよ」

「昨日ミツションで使つてみたら効果絶大だつたつて話をしようとしてたんだけど……」

「えつ？」

「えつ？」

何食わぬ顔してまた何かやり始めたぞこの人。思わずその頭を引っぱたきくなる衝動を堪えて眉間を揉むと、ヒバリちゃんがコーヒーに浮かぶ氷を鳴らしながら補足する。

「確かにセナさん射撃してましたね。でも普通のオラクルバレットとは全然違つたような……」

「弾丸モジュールと制御モジュールで発射される時の角度とされた後の軌道を設定して、球モジュールで指向性を設定、レーザーモジュールで標的を攻撃つてエディットしたからね」

「ごめん、もう一回言つてくれる？　今言つてたことの半分以上知らない単語だつたんだけど？」

「あー私が勝手にそう呼んでるやつだからね。簡単に言えばオラクルバレットを調整しただけだよ」

ケロつとした顔で言いながら沸かし終えた湯をティーカップに注ぎティーパックを沈めるセナ。

——コ、コイツ……オラクルバレットを調整したって言つたのか？ それがどれだけ難しいか解つた上の発言か……？ ——

オラクルバレットの性質は現時点では大まかなカテゴリに分類できることが判明しているのだが、カテゴリの数が尋常でなく、詳しく調べれば調べるほど細分化できてしまふため、まさしくジーンマップのように複雑なのである。

そのため現在用意されているオラクルバレットは単純化された物ばかりで、銃身型神機使いは専ら弾丸かレーザーを使用している。中には放射をメインにするトリガー・ハッピーがいたりする。

そんなオラクルバレットは技術開発部の間で重要課題とされていて、極東支部が誇る優秀な開発者たちが日々頭を悩ませながら研究している。勿論私もその一人だ。

「……セナ、そのオラクルバレット持つてきて」

「わ、解りました」

ヒバリちゃんが思い切り頬を引き攣つたのを横目にアップルジュースを一気に飲み干す。セナも物々しく引き出しから箱を取り出して私の前に差し出す。

開いてみると弾倉にたくさんの弾殻が詰まつており、無言で促すといそと漁つて

一つの弾殻を選び取り私に手渡す。

一見何の変哲もないオラクルバレットに見えるが、よくよく見てみると八段構造になつてゐるらしく、一般的のものとは完全な別物と解る。

「今日中にオラクルバレットに関する資料をまとめて私に提出すること」

「え、この後今日の任務の報告書三枚まとめる予定が——」

「このオラクルバレットは没収するね。詳しく調べないといけないから」

「いや、それ明日も使うつもり——」

「いいね?」

「アツハイ」

この奇天烈ときたら長年研究者たちが悩まされてきたブラックボックスを平然と開発してのけたのだ。さすがに開発者の矜持に深い傷が付く。

セナが半泣きでヒバリちゃんに助け舟を求めるが、ヒバリちゃんはもう我関せずの態度を決め込んでおりあえなく肩を落とした。ヒバリちゃんも日々セナの出鱈目っぴりにより仕事を奪われているから、多少は出来るのだろう。

「それで、セナさんはソーマさんとどこまでいきました?」

オラクルバレットのくだりを丸々無かつたことにして話を繋げたヒバリちゃん。兵器の話ををするより恋話をする方がよっぽど女子らしい。私とセナだけだといつとも技

術開発の話に流れちゃうから貴重な存在と言える。

セナはこの後書くつもりだつたのだろう白紙の報告書を遠い目で見つめながら応える。

「んー、特に進展なしかなー」

「セナさんそればっかりじやないですか……。もつと積極的にアタックしないとマンネリ化しますよ」

「そんなこと言われてもなあ。実際のところソーマ君のこと好きか解んないし」

「どの口でそんなこと言ってんの。それは嘘でしょ」

「どの口ってひどいな……。勿論好きなことは好きだよ? でもどちらかつていうと弟みたいな感じで好きなんだよなあ」

でもこの前看病してくれたときはキュンつてしましどうなんだろうね、と本気で悩んでいる顔でティーパックをいじる。

あまりの優柔不斷さにうわあ……と呟きながら私とヒバリちゃんが無言で横目のやり取りをする。これじゃあまりにソーマ君が報われなさすぎる。

「確かにキスとかしたいなあつて思うときもあるけどさ、もつとこう、恋人らしいことをしたいとは思わないんだよね」

「キスより恋人らしいことつてあるんですか」

「例えばエツチとか」

「キミの感性がどつかずれてるというのは良く解った」

普段あんだけイチャイチャしていながらそれが恋人らしいことだということにまるで自覚がないらしい。セナにとつては普通のスキンシップなのかもしれないけど、ソーマ君からしたら猛攻撃されているようなものだろう。

これだけ美人の人から無防備に迫られ続けたらそりや好きになるわ。しかも落ち込んでいるときに手を差し伸べてくれた天使のような人に、だ。

これでいざ告白してみたら「ごめん、弟としか見れないから付き合えない」とか言われたら自殺しちゃうんじゃないかな。

大体同じ感想を抱いたようでヒバリちゃんも頭を抱えている。

「私なんて六歳も上の成人男性から毎日言い寄られているのに……なんでセナさんはソーマさんのようなイケメンでカツコイイ人と両思いなんですかあ……」

「タツミさんもイケメンでカツコイイじゃん」

「まあ、それは認めますけど。絡み方がありえないくらい面倒くさくて……。あと年の差が絶望的にアレです。さすがに無理です」

特に理由のない罵倒がタツミさんを襲う!! まあ年の差結婚というのはよくある話だけど、さすがに十七歳の女の子視点で見ると七歳の差はキツイものがある。私も時々

タツミさんがアプローチしているところを見たことがあるが、あれは口リコンと陰口されても仕方ない。それがヒバリちゃんが職員になつた年から、つまり十五歳から続いているのだから同情を禁じ得ない。

こんなに可愛い女の子なら選り取り見取りだらうに、恋の闇を垣間見た氣がする。

「タツミさんのことは忘れてください。アレはトラウマレベルなので……。それよりリツカさんは意中の人とかいないんですか？」

「言われてみればリツカの色話って聞いたことないね」

「えー私ー？ 男性より神機の方が好きだから特にないなあ」

「おう……この職人気質かたぎつぱりよ……」

「勿体無き過ぎですよりリツカさん。噂によればリツカさんは密かに人気らしいですし」

「私が人気!? 思いもよらなかつたなあ……。常に油と埃で汚れた服を着て いる私のどこが良いと思つたのだろうか。嬉しいと思う反面疑問が生じる。

「んー強いて言うならユウ君は好みかな。ゴッドイーターなのに珍しく穏やかな人だし、何より性格が良いし」

「おーさすがリツカ、お目が高い。私もユウ君が近々女性陣の間で流行ると見込んでたんだよねー」

ほ、良かった。このまま流すのも白けちやいそだから、実はパつと思ひ浮かんだ人

を言つただけだつたんだけど、どうやらユウ君は好評のようだ。当然思つていた感想を言つたから嘘はついてないけど、なんだか失礼なことをした気がする。

内心でゴメンと謝つていると、ヒバリちゃんがとんでもない爆弾を投下した。

「お二人とも冗談はよして下さい。ユウさんは女の子ですよ？」

「……え？」

「えっ？」

それこそ何の冗談だとばかりヒバリちゃんを凝視する私とセナ。当のヒバリちゃんは予想外の反応だつたのか困惑した表情で私たち間で視線を行つたり来たりさせる。「ほ、本気で男の子と思つてたんですかっ？」

「いや、ユウ君どう見ても男の子じやない」

「セナの言う通りだよ。逆に女の子の要素はどこにあるの」

強引に考えるとコウタ君以外には丁寧語を使つていたり、年頃の男性らしからぬ穏やかさを持つていたり、男性にしては妙に細くて弾力のある身体付きで可愛らしい顔をしているけれど、さすがにそれだけで女の子と断るのは無理な話だ。そもそも男性用フェンリル制服着てるし。

あのセナですら気づけなかつたのが良い証拠だ。

ヒバリちゃんが「ちよつと待つてくださいね」とそばに置いていたタブレットを起動

して慌しく指を走らせる。少ししてから本当は私以外閲覧禁止なんんですけど前置きをして画面を見せる。

「ゴッドイーターの登録書には確かに女性と書かれてますよ」

「……本当だ」

「入力ミスとかじやなくて？」

「ゴッドイーターの全ての活動に関わる資料ですから誤植の可能性は無いと思います」
……すると、本当にユウ君はユウちゃんだったってこと？ 驚愕の事実を前にセナすら口をぽつかり開けて画面に食いついている。

「ユウ君が女の子だつたなんて……」

「これ知ってる人、たぶん私たちとツバキさんだけじゃ……」

「皆さんてつきり知っているものだと思ってました。男の子っぽい雰囲気してるからあえて君呼びをしていたのかと……」

「いやいやいや、そんなこと無いって。みんな心の底から男の子と思つてるって。だって制服からして男の子じやん。え、これコウタ君知つてるの？」
「絶対知らないでしょ……。そうでなきや肩組んだりしないって普通」

また新たな闇を発見してしまった私たち三人の間に言い難い沈黙が支配する。恋話をしていたはずなのになんでこんな複雑な気持ちになつているのだろう。恐らく三人

がそう思つたはづだ。

「まあ……アレだ、話を変えよう」

「そうだね……。さすがに業が深すぎる……」

「なんか、ごめんなさい……」

そう言つて再び沈黙の帳が下りる。まずい、ユウ君……じやなくてユウちゃんの話を出したのは私だ。この気まずい沈黙を破る責任がある。

こういうときに限つて頭が上手く回らないものだが、奇跡的に天啓を得た。

「そう！ 二人は終末捕食つて知つてる？」

「なんじやそりや。新しい捕食形態か何か？」

「違いますよセナさん。アラガミ同士が互いを捕食し続けた末に現れる最大のアラガミに地球そのものが捕食されるという終末論のことです」

さすがヒバリちゃん、情報収集の広さと深さは追随を許さない。セナはほえーと相槌を打ちながら先を促す。

「風の噂によると、誰かが終末捕食を意図的に引き起こそうとしているらしいよ」

「意図的にですか？ いずれ起こるだろうと都市伝説として語られているのは知つてますが、それはちょっと怖いですね」

「だよねー。今のアラガミたちを見ている限りじゃ考えられないし。……そんな思いつ

めた顔してどうしたの、セナ?」

口元に手を当てて俯いて思考の海に潜っているセナに声をかけると、パッと顔を上げて誤魔化し笑いを浮かべる。

「ああ、ううん。何でも無い」

「そんな真剣に捉えられちゃうと困りますよ。先ほども言つた通り、これは都市伝説なんですから」

「そうだよね！　ちよつと起こったときのことを考えたら怖くなっちゃって」

「セナさんがアラガミに怖がるなんてよっぽどですねー。セナさんも人間らしいところがあるつて安心しました」

「ちょ、ヒバリちゃん私のこと何だと思つてるの……」

お互いに冗談を言い合い笑い合う。ヒバリちゃんには上手く誤魔化せたみたいだけど、私は確かにセナが呟いたのが聞こえた。

——『アラガミ進化論』、か……と。

それが何のことを意味しているか解らないけど、セナがあれほど深刻な表情を浮かべていたとなるとただ事じやないのは確かだ。
じつと見つめているとセナが一瞬横目でウインクを寄越してきて、これ以上の詮索の拒否を申し立ててきた。

喉に引っかかるものがあるけど、セナがそう言うのなら深く突っ込まないでおこう。
一介の技術者に過ぎない私には知らない方が良いことなんて山ほどあるのだから。
でも、その暗闇に親友が片足を呑まれているのだとしたら。私は我が身を顧みず支え
る覚悟だ。

一瞬の不穏はセナの巧みな口によつて吹き飛ばされ、時間を忘れて私たち三人は夜を
過ごした。

第15話 ソーマ side

パートナーに内緒で特務を受けている俺は、早朝にそれを割り当てている。

セナは退院した後も性懲りも無く特務を受けているらしく、やはり深夜に取り組んでいる。その分、就寝時間が遅くなり、当然起床時間も遅くなる。

まあ、それでも8時には起きているのだが……。毎日何時間寝ているのか心配で仕方ない。ちなみにアナグラのゴッドイーターの平均起床時間は9時である。任務の受注が強制でないのと、早朝に発注される任務は少ない上に収入が乏しいものばかりだからだ。

ともかく、セナの目が閉ざされている時間は早朝しかない。

なぜセナに内緒にしているのかと言えば、やはり無用な心配をかけたくないからだ。確かにセナの負担の肩代わりという目的もある。だが、本音を言えば鍛錬に利用しているだけだ。

今の俺は余りにも弱い。

セナに着いて行き、見習い、その内心のどこかで自分は無敵なんだと錯覚していた。任務で負傷することも殆どなくなり、任務評価も高いことも錯覚を助長させていた。

しかし、セナが泥まみれで倒れていたのを見て目が覚めた。

あのセナが神機解放^{バ'イスト}という奥の手を使わざるを得ない状況に追い込むほどのアラガミが現れた。並のゴッドイーターなら名前を聞いただけで震え上がるような接触禁忌種を鼻歌交じりで狩れるセナが、だ。

俺がその未曾有のアラガミと遭遇した時、果たして狩ることができただろうか。

否。断じて否。骨が残つていればまだ良い方だつただろう。

もしセナと一緒にソイツと遭遇した時、果たして狩ることができただろうか。

これも否だ。むしろ足手まといになり、余計にセナを危険に晒すことになつただろ

う。

今の俺には力が必要だ。実力。知力。技術。ありとあらゆる力が必要なんだ。

俺を死神と言つた奴は、なるほどを得ていた。こんな足手まといがいれば、セナの首を切り落とさせられるだろうから。

俺の望みは唯一つ。セナを守ることだけだ。

それを成すには、力が必要だ。

「お疲れ様ですソーマさん。報酬の方は……」

「いつものように頼む」

やり取りを手短に済ませ、次のミッションの物色に移る。

受付を務めるヒバリは、ほとほと困ったような営業スマイルを浮かべ、ため息を押し殺す。

特務をこなした直後にまた出撃しようとしているからな。ゴッディーラーとして歓迎されるべき勤勉さだが、人間としては過労も良いところ。

受付には事務処理を始め、ゴッディーラーの近況把握も含まれている。働くなさすぎる奴をしょっぴくためなんだろうが、まさか働きすぎる奴を止める日が来ようとは夢にも思わなかつただろう。

実際、何度も止めろと言われている。悉く無視して今に至る訳だが。

それでも強引に止めようとしないのは、恐らく動機を理解しているからなのだろう。

内心を知られているのは業腹だが、それが鍛錬できる理由ならば我慢する。

受付に設備されている受注可能な任務一覧表を映すタブレットから目を離し、腕時計に目をやる。

……7時ちょっと前か。これなら8時までにアナグラ付近の任務の一つくらい消化出来るな。

視界の端でヒバリが無言で首を振るのが見えたが、俺も無言で向き直りタブレットに表示されているミツシヨン名を指差して見せつける。

眉間に指を添えつつ、片手間に手元の端末を操作するヒバリ。そして、心底不本意そ

うに護送車のキーを差し出す。

俺はわざとらしく笑つて見せてそれを受け取り、さつきと翻す。背後で聞こえがよしにため息を吐かれた。

もう何十回も同じやり取りをしているんだから、いい加減諦めるべきだろうに。今となつては、一種のコミュニケーションになつてる。

……受付がそんな私情丸出しの態度で良いのか？と常々思うが、先ほど言つた通り、それは翻つて今の俺が目に余る行為をしているからと理解しているので、いわゆるご愛嬌である。

鬱陶しいとは思う。けれど、それは野良猫が足に纏わり付いてくるときに抱くようなものであつて、別に毛嫌いするようなものじやない。

なぜなら、以前の俺はそもそも、そんな人間らしいやり取りをすることすら出来なかつたのだから。

口では化け物の俺なんて云々と斜に構えて誤魔化していたが、今は素直に認められる。

俺は誰かと接したかつた。俺を真つ当な一人の人として、対等に話したかつたのだ。まあ、あり大抵に言つてしまえば、周りの奴らに嫉妬していたわけだ。

そんな態度を取るものだから、余計に人が寄り付かないし、角が立つ。俺は更に意固

地になつて態度を改めない。笑つてしまふくらいガキだつた。

セナ曰く、狐と葡萄のようなものだつたらしい。どういう訓話か知らないが、その狐もさぞ捻くれた滑稽な奴だつたのだろう。

そんな救いようのない俺をここまで引っ張り上げてくれた人がいた。哀れみとか同調ではなく、ただ的好奇心で。なんて事はないと笑いながら、底なし沼に嵌つた俺を日の下に引きずり出してくれた。

その笑顔が余りに眩しくて。余りに尊くて。あの光が無くなれば、きっと絶望のあまり死んでしまうくらいに、俺の心を温めてくれた。

恩返しをしたいとか、そんな恩着せがましい理由じやない。もつと汚らしいが欲にまみれた理由だ。

側を離れないでほしい。失いたくない。失つてしまえば俺が死んでしまうから、俺は必死に足搔く。

遙かな絶壁にでも指を掛けよう。無限の海をイカダで乗り越えよう。月にだつて吠えてやる。

それが人となつた俺の全てだ。

誰に聞かせることもない心の独白を終え、決意新たに踏み出した俺だつたのだが……「やあソーマ。今日も華麗に任務を完遂しているようじやないか」

声音だけでどんな性格をしているか解つてしまふようなそれは、階段の上に置かれたソファから発せられた。

顔を覗かせれば尊大に踏ん反り返るパンクな服装とサングラスが特徴的な、煤けた赤髪が特徴の顔見知りがいた。

「珍しいな。お前、早起きするタイプじゃないだろ、エリック？」

フツ、とキザつたらしく前髪を払うエリック。

コイツを一言で紹介するならば、ナルシストが服を着たような奴である。
だがそのデカイ態度は奴の確かな腕前からくるもので、態度は鼻に付くが心は善良過ぎるくらい純粋な奴だ。いわゆる、憎めない奴。

でなければ個性の強い奴の集まりであるアナグラと言えど鼻つまみ者になつてゐる
だろうし、死神だつた俺に平然と声をかけたりしないだろう。

ちなみに、コイツとは同期だつたりする。そんなこともあり、ちよくちよく任務を共
にする腐れ縁である。

「……で、俺に用があんのか？見ての通り忙しい身なんだが」

「なに、そう大したことじやないさ。久しぶりに一緒にミツショーンに行こうかと思つた
のさ」

言われてみれば、ここ最近……具体的に言えば、セナが入院した三ヶ月前あたりから
ブツツリ交流が切れてたな。まあ、コイツに限らず、ほとんどの奴とも切れてたんだが。
振り返ると死神だつた頃と大差ない環境だな、これ。

……そう思うと、何だか今から一人で行くのは間違っている気がしてした。忙しいと言つても、今に限れば一時間以内に軽いミツショーンを片付けるだけの話だ。特務のような特殊なものでも無いし、ここらで交流を改めるのも悪くない。

——別に、もう一人であるべきだと考える必要もないからな。

階段にかけていた足を下ろし、受付に首を伸ばす。案の定会話を聞いていたヒバリとバツチリ目が合い、凛々しい笑みと共にグッと親指を立てていた。俺一人で奔走するより余程安心できるのだろう。俺が何か言う前に手を動かした。

そんなヒバリの様子に、俺は自分が思っているより多大な心労を彼女に掛けていたのを今更ながら実感した。

「ヒバリ。何と言うか、すまんかつた」

彼女から見れば脈拍もない謝罪だつたろうに、ヒバリはやれやれと肩を竦めて笑顔で答える。

「全くですよ。まあ、自覚していただけ以前よりだいぶ成長していますが、もう少し頭を冷やせるようになつてくださいね」

「……お前、俺より年下だよな？ 何でそんな上から目線なんだ」

「ふふ、伊達に受付を務めているわけじゃないんですよー？ それに女の子は強かなんです。数年の付き合いがあれば、相手の機微を読み取るくらい訳ないですよ」

ドヤ顔で嘯くヒバリに、今度は俺が肩を竦める番だった。確かに身の回りの女には敷かれてばかりである。

行つてらつしやいという元気な声に肩越しに手を挙げて応えておき、エリックの前に立つ。

「そういう訳だ。足引つ張んなよ」

「誰にものを言つているんだい？ 僕はエリートゴッディーター。どんな任務も華麗になしてみせよう」

時間が経つても相変わらずの態度に、やつぱりお前は憎めない奴だと思いながら出撃ゲートをくぐった。



俺とエリックが引き受けた任務はアナグラ周辺に寄り添う住居区の防衛だ。より正確に言えば防壁の外に出て、将来襲来してくる危険のあるアラガミ群の掃討である。

具体的にどのアラガミを狩るか決まっていなかったため、たまに貧乏くじを引くことがあり、人気のない任務だ。俺にとつては都合のいい任務なんだが。

朝日が昇り、思わずぐつと体を伸ばしたくなる陽光を浴びながら荒野に繰り出した俺たちは、ヒバリに指示されるままに動き、アラガミを殲滅した。

エリックも銃型神機を遺憾なく発揮し、俺の支援をしつつアラガミの牽制を行い、エリートゴッドイーターの自称に恥じない働きぶりを見せた。

以前奴は頭上から奇襲してきたオウガテイルに気づかず死にかけたことがあつたが、決して口先だけのバカじやない。むしろ極東のゴッドイーターの中でも上位に食い込む実力者だ。

ゴッドイーターの死因の一番はアラガミによる奇襲である。基本四人一組で討伐に臨むため、標的に殺されることは少ないからだ。

エリックの名誉のために明言すれば、エリック上田は日常茶飯事起ころる事故。どんな熟練のゴッドイーターでも避けられぬ理不尽だ。

「今物凄く不名誉なあだ名で呼ばれた気がするんだけど」

「気のせいだエリック。そんな格好をしているから体が冷えただけだ」
エリックはむき出しの両腕を撫りながらぼやく。俺は討伐したボルグ・カムランを神機に捕喰させてるので顔を向けていない。

きつと赤い革ジヤンを肌着しただけの格好だから寒いのだろう。

このご時世に娯楽なんて贅沢は許されない。しかし娯楽なくして生きれないのが人なので、ファッショソや料理など細やかな物に大変こだわるようになつた。

つまり、アナグラに奇抜な格好をしている奴が多いのは変なことではなく、むしろ人らしく生きようとしている結果なのである。

……何が言いたいかと言うと、エリックの勘の良さを適当に煙に巻こうとしただけだ。

そんな幼稚な軽口を叩いた後、エリックは切り返した。

「しかし流石だなソーマ。いや、敢えて我がライバルと言い直そう。男子三日会わざらば刮目せよと言うけど、君は目に余るくらいの成長ぶりだ。一体何をすればそこまで華麗になれるんだい？」

「適当に仕事をこなしてりや誰でもこうなる」

「ふうん。適当、か。ここ数日のことしか知らないが、君の生活には尋常ならざるものを感じたよ」

エリックの相槌に含むものを感じたため目線をやると、いつもの自尊心に満ちた勝気な笑みはなく、アラガミと対峙している時にすら見せることのない真剣な表情を浮かべていた。

サングラスに隠れた目付きは窺えないが、きっと柔らかい色を湛えていることだろう。声音だけでも十分に伝わってくる。奴が新人にも憎まれない理由は、こういった真心からくる優しさを感じ取れるからなのかも知れない。

「僕としてはこつちが本題だつたんだよ。次々と任務を捌く姿は実に痛快だが、その顔が鬼気迫るものであつては華麗さに欠けると言うもの。ライバルとして、そして親友として見過ごすわけにはいかない。どうだい、ソーマ？ 何か悩みがあるのなら、この僕が相談に乗ろう」

無駄に長い口上の末に、エリックは得意げに鼻を鳴らしながら近場の瓦礫に腰掛けた。

俺は特務を受けていることやその真意について、誰かに相談しようとしたことはないし、することもないと思つていた。

だからエリックの誘いに乗ることもないはずだ。

けれど、その考えに反して”コイツになら”という思いが心の隅に巣くつた。どうしてこんな簡単に考えが揺らぐのか不思議だつたが、悪い気はしなかつた。そしてやけにあつさりと、俺はエリックの隣に腰掛けたのだつた。



特務絡みのことは省きながら気持ちを吐露すると、エリックはふむと相槌を打つた。
それからニヤリと口角を釣り上げる。

「なるほど、君も男になつたんだな」

「はあ？」

「男は守るべきもののために身を呈して戦う生き物だ。そして胸に秘める情熱を隠しながら華麗に男を遂行するのが紳士さ。君は正しく紳士だ」

「お、とう」

やけに尊大に言うものだから曖昧に頷くことしか出来なかつた。

引き気味の返事に気を悪くすることもなく、満足そうに頷いたエリック。

「本来ゴツドイーターは民衆を守る使命を背負つている。それは何故か。それを成せる能力を持つてゐるからだ。」力ある者は力なき隣人に手を差し伸べよ。」僕の家の家訓さ

ノブレスオブリージュ。それはアラガミが世界に蔓延る前の時代に一部の地域に浸透していた思想のこと、らしい。

本来の意味は平民より豊かな貴族は、その分多く働くべきというものなんだそうだ。
解釈の違いでお互いがお互いに足りない部分を補う協力体制のこととも。

成る程確かに道理である。エリックの言つた通り、何かを成すための力を持つならば、それを隣人のために行使するのは大変な美德だ。

しかし、現實にそんな聖人君子はいないだろう。きっとその思想も口上としか捉えられないなかつたのではないか。今、人類滅亡の危機に瀕している俺たちの時代でさえ、上位者は己の私腹を肥やしているのだから。

そんな夢物語を、エリックはごく眞面目に語つた。

「少し僕の話もしようか。僕の家、フォーゲルヴァイデ家はフエンリル傘下企業の一部を統括していて、それ相応に豊かだ。貴族と呼んでも差し支えない。僕が物心付いた時から何不自由なく育てられた。あれが欲しいと言えば手に入つたし、嫌な物から目をそらすことだつて出来た。まあ、絵に描いたような坊ちやんだつたさ。家訓も表面上でしか理解していなかつたし、志そうなんて微塵も思つていなかつた」

苦々しい表情で吐き捨てるように言う。貴族の子ならば当然の成長ぶりだが、彼にとっては汚点に他ならないのだろう。

「そんな僕にも守るべきものが出来たんだ。三つ下の妹さ。本当に可愛い奴でね……どこに行くにしてもすぐ後ろを付いてくるんだ。どうして付いてくるんだいと聞くと、一緒にはいる怖くないからつて答えたのさ。その時によく僕は家訓を眞の意味で理解出来た。この震える妹を守れるのは僕しかいないんだつてね。幸い僕にはゴツド

イーターの適性があつたから、すぐ志願したさ」

「……それで今に至ると」

ざつくりと言うとね、と区切つた。

「そこ」で本題だ。つまるところ、君は邦枝セナを守りたいと思つてゐるが、彼女に劣つてゐると自覚してゐる。その差をなんとか埋めようにも上手くいかない。だから焦つてゐる。その悩み自体は悪くないと思う。むしろ、あの邦枝セナに迫ろうと努力を惜しない姿勢は僕も見習いたい。問題は君が自分の身を省みないところだ』

サングラスの奥から覗く目は責める色を浮かべながら、どこか悲哀を感じさせた。

「さつき僕の話を引き合いに出したのは、君が守るという行為を勘違いしているからだ。守るという行為は決して自己犠牲のことじやない。僕は妹エリナを守るためにゴッドイーターになつた。だから僕は死ねない。僕が死ねばエリナを守れる人がいなくなるし、何よりエリナが悲しむ。いつもの嘯きだと侮つてくれるなよ、ソーマ。これは事実だ。僕にとつてエリナが欠け替えのない存在であるのと同じで、エリナにとつても僕は欠け替えのない存在なんだ。お互いがお互いを支え合う。それがノブレスオブリージュだ。それが守るということだ。そこの所をきちんと理解しているかい?」

その問いに俺は口答えすることが出来なかつた。

散々リツカに言われてきたことだ。神機は替えが利くが、俺自身の代わりはないのだ

と。セナの気持ちも考えろと。

それを俺はわかつてゐるつもりだつた。何を当たり前なことを。そう思つてた。けれど、実際にそれを理解してゐるエリックの言葉の重みに触れて、ようやく俺は自覚していなかつたのだと思い知つた。

なぜ今まで自覚できなかつたのか不思議でならない。多分、努力してゐる自分に醉つていたために、無自覚に自分は死なないと想い込んでいたのだろう。

ガツンと頭を殴られたような衝撃を受ける俺を見て、やれやれとため息をついたエリックは尻をはたきながら立ち上がつた。

「君はバカじやない。が、どうも一つのことに意識を向けると、他のことに気が回らなくなるきらいがある。集中できるのは美德だけど、周りが見えなくなるのはよろしくない。今回を教訓に意識したまえ」

「ああ、そうする」

「ながららしくないことをしてしまつたな、と悪戯な笑みを零すエリックに、俺は堪らず訪ねた。

「どうしてお前はそんなに大人びたんだ? 俺と同い年とは思えないくらい考えがしつかりしてるじゃねえか」

まるで地に足をつけた大人のように振る舞う。普段の飄々とした態度も、その思考が

裏付けしているように感じてきた。

俺の問いに、なんて事はないと答えた。

「さつき言つただろう？ こう見えて僕はそことこの企業の御曹司つてやつなんだ。当然、将来的に繼がなくちやいけない。このご時世の社会事情とか、企業間の権力争いを始めとしたジメジメとした陰湿な世界に飛び込まなくちやいけないわけだ。そういうことで親から教え込まれた知識があつたし、何よりそんな息苦しい世界に妹を送り込みたくなかつた。だから色々と考えてた時期があつたのさ。つまるところ、君より幾分か考える機会が多かつただけ。君が気に病む必要はない」

「……そうか」

「そう、忘れていたが、今回僕が言いたかつたのはもう少し自分を大切にしろということだけだ。努力する分には大変結構だが、過ぎたるは及ばざるが如しつてやつだ。君の悩みの根本である力不足については僕はどうしてやることもできないけど、相談くらいなら喜んで受けよう。一人で抱え込むよりずっと建設的だ」

さあ凱旋といふか！ と颯爽と歩き去つていくエリックの背中がとても頬もしく見えた。

第16話 ソーマ Side

俺とセナは久しぶりの休暇を過ごしていた。

本当は第一班にミッショーンが入っていたのだが、リンドウが『お前らがいると新人の教育にならん』とメンバーから外したのだ。

何を今更と思ったものの、個人プレーの鍛錬は施している一方でチームプレーの訓練は殆どしていない自覚はあつた。

そんなわけで得られた休日はセナの誘いによつて潰されたのだった。

尤も、セナの部屋でぐうたら過ごすだけなのだが。

こいつの部屋には何度か来たことがある。そのたびに女らしくない部屋という感想を抱く。

何もかも束縛されたご時世、細やかなものに慰みを求めるようになつたせいか、やたらと小物に注目が集まる時代になつた。

そんな時代の女性が黙つているはずもなく、ファッショーンをはじめとした身の回りの気配りが尋常ではない。サクヤの部屋も一回だけ見たことがあるが、一言で言えばワチヤワチヤしていた。

翻るにセナの部屋は、もしかしたら男性より閑散としているかもしない。生活感がないという意味ではなく、無駄がなく着飾らないという意味だ。

カーペットやシーツ、カーテンは配当されたものだし、娯楽品の類も見受けられない。唯一目につく小物は机に置いてある古びたロケットだけだ。

普段のセナからでは信じられないほど無機質つぶりだ。無邪氣・快活・元気溌剌の明るい三拍子が揃っている女はこいつくらいじやないか。

しかし同時に俺は思う。セナは理由無しで変なことをしない。この質素な生活も金の節約のためなのかもしれない。

特務やその他諸々の功績で目も眩むような大金を持つてはいるはずなのに、それを更に貯めてどうしようというのか。

そこまではわからないが、きっと彼女の信念に基づくことに使うつもりなのだろう。例えば見ず知らずの人たちのために村を作るとか。

部屋主が引つ張り出して来た来客用の布団に腰を落ち着けさせこの殺風景な部屋を見回した後、ベッドに寝転がる部屋主に目を向ける。

いつものフェンリル制服ではなくラフな部屋着に着替えていたセナは裸足をぶらぶらとさせながらタブレットを眺めている。

あまりの無防備さに呆れのため息が出るが、こいつはこいつなりにガードが固いこと

を知つてゐる。逆に言えば、こんな隙を見せるのはガードをする必要がないと言つていいようなもので、俺に対する信頼が現れているとも言える。

一応俺も男なんだがな……。なら襲うのかと言われば全くな否だが。

セナがこの答えを聞けばやつぱりねと笑みを浮かべることだろう。男としては受け入れ難くも嬉しいような、複雑な信頼感である。

入室してからそれきり秒針が時を刻む音とセナの足が布団を叩く音だけが支配するなか、手持ち無沙汰になつた俺は適当な世間話を投げかけた。

「それ、何読んでんだ？」

「んー？ 現代技術の資料」

メガネの奥からこちらを見上げたセナはタブレットを俺に寄越した。

受け取つて見てみると、いくつかの図面とたくさんの専門的数式や用語が並んでいた。図を見る限り神機の構造を説明しているようだが、詳しい内容はほとんどわからない。

肩を竦めて返せばセナが面白そうにほくそ笑んだ。

「これでもわかりやすくまとめてある方なんだから」

「なんでそんなもん読んでんだよ」

「もちろん勉強のため」

大きく伸びをしたセナ。

「私ね、将来は技師になろうって思つてゐるの。技術開発だね」

「へえ……」

「あんまり驚かないんだね」

「何となくそんな気がしてたからな。前々からリツカに色々教えてもらつてただろ」

神機作成の場に立ち会わせてもらつたこともあるらしい。よほど関心がない限りそれが見学を望むことはないだろう。

「鋭いねー。リツカと知り合つてからずつと教えてもらつてるんだよね。あと二年くらいで見習い技師になれるつてさ」

「てことは最初から技師になるつもりでいたのか」

てつきり最近思い至つたのかと思つていたが。言外にそのニュアンスを含ませると困つたような笑みを浮かべる。

「まあ、俗に言えば将来の夢つてやつでさ。実はゴッドイーターになつたのもその土台のためだつたりするんだよ」

将来の夢。そんな言葉をついぞ聞くとは思わなかつた。

アラガミがいなかつた時代は知らないが、現代は明日を迎えるために糊口を凌ぐのに精一杯だ。将来は選ぶものではなく、決まつてゐるようなものだ。数少ない例外は神機

適正を得られたゴッディーラーたちなのだが、それでも多少生活が楽になる代わりに一般人より厳しい毎日を送らなくてはならない。

そんなギスギスした時代に、いつしか人々は夢を見ることをやめた。過酷な現実にのみ目を向けて、血眼になりながら暗中をがむしゃらに模索する日々だ。

偉そうに述べる俺も然りだ。具体的な将来なんて考えたこともなかつた。精々がゴッディーラーのままクソツタレな日々を送るのだろう、くらい。

「ソーマ君はないの？なりたいものとか、やりたいこととか」

三角座りして膝に顔を埋めこちらを見つめてくる瞳は、一緒に来ないかと誘つているようだつた。

「……ねえな。考えたこともねえ」

誘惑を断ち切るように断言した。少し残念そうに頬を膨らませたのを尻目に続ける。

「俺が今から技師を目指そうとしたつて間に合わねえだろ。確か八年は必要じやなかつたか？」

そうだねと相槌を返したセナ。

技師、とりわけ技術開発部門は言つてしまえば人類の明日を切り拓く部門だ。

人類の明日を握つているとさえ言えるほど重要な部門は、いつでも有望な人材を欲している。コロニー内にある唯一の大学の仕組みを見る限り、人の生命を扱う医療部門よ

り厳しいらしい。

そのため技術開発部門に入学する生徒ははずば抜けて優秀な奴らで、さらに地獄のような教育を受けて才能を磨いているのだそうだ。

リツカに聞いたところによれば五年かけて基礎教養を受けて三年間臨床実習をするらしい。これでも教育としては不十分だが、それでも技師が足りないからと卒業したらすぐ研究室に取り込まれる。

それに引き換え、いわゆる天才と言われている奴らが八年間必死こいてようやく得られる地位をその半分くらいの期間で勝ち取ろうとしているセナは無謀を飛び越えて無理だ。それも本職のゴッドイーターの片手間に勉強している程度では、とても追いつけないだろう。

しかし、リツカが言うにはあと二年でセナは暫定的に合格できるらしい。全体の履修期間は大体五年くらいか。

甘やかして適當なことを言つてる可能性もあるが、バカが付くほどの職人気質で有名なリツカが自分の土俵上の話をおろそかにするとも思えない。セナが真剣に考えているからこそ、なおさら真面目に対応しているだろう。

そうなるとやっぱり近いうちに技師になれるのだろうか。

この手のぶつとんだことは今に始まつたことじやないが、技師になつてから周りの奴

らに妬みで殺されないか心配だ。

ちなみに俺と同い年のリツカはそんな超難関のところを三年飛び級して卒業している。世界の最前線と言われている極東を支える技師だけあってアソコも超が付く天才なのだ。

閑話休題。

「仮に今から勉強しても俺じゃ追いつけねえよ。それに興味あるものもあるしな」「ほんと!?!なになに!」

目をキラキラさせて食いついてきたセナに苦笑いをこぼしながら素直に教える。

「アラガミの研究だ。特に建築関係だな」

「ソーマ君、それって……」

「ああ。親父のことだ」

本当に意外だつたらしく、目を丸くしたまま言葉を失っている。

「そんなに驚くことかよ」

「……うん。たぶん今世紀で一番驚いた」

おふざけを混ぜられる程度に驚いたらしい。

「多少は考えを改めた今親父を見つめ直すくらいするだろ」

「あー……わからんこともない」

「それで親父について詳しく調べた」

正直、これが本当に自分の父親なのかと疑つたくらい、ヨハネス・シックザールという人物は偉大だった。

今の世界が成り立つための基盤そのものを築き上げた現代建築の父。有名な建築物のプロジェクトに必ずと言つていいほど名を連ね、今なお開発をし続ける研究者。

ただのクソ野郎だと思つていた親父の側面……いや、正体を目の当たりにした俺は考えを改めた。

親父は尊敬に値する人物だった。父親としては相変わらず最低だと思うが、人としては親父を認めざるを得なかつた。

同時にそういう守り方もあるのかと思ったのだ。

エリツクに諭され、がむしやらになつても仕方ないと気づいた今、ゴッドイーター以外の道にも目を向ける必要がある。

その一環としてそういう進路を考えたのだつた。

が、ハンニバルという明確な脅威が明るみに出た以上、セナにお鉢が回つてくるのは目に見えているわけで。

隣に立つて戦いたいと願うのは無茶なことなのだろうか。

「……まあ、色々思うことがあつてな。その道を進むのもありかもしがねえって考えて

るだけだ」

自分をはぐらかすように切り上げると煉瓦色の髪を楽しげに揺らした。

「それなら榎博士に相談してみたら？ 思い付きでも研究家になりたいって人なら大歓迎だと思うし」

「榎のおっさんか……。知らねえ間に助手に仕立て上げられそうだな」

「私もそこはかとなく仕向けられたから気をつけてね」

冗談めかして言っているが多分本当のことなのだろう。苦笑いがその証拠である。

氣をつけるという言葉とともにタブレットを返してやると、セナの楽しそうな笑みに鄉愁の色が混ざった。

「そつか……。ソーマ君も将来のこと考えるようになつちやつたかあ……」

「まるでそうなつてほしくなかつたみたいな口ぶりだな」

「いやあ、決して悪い意味じやないんだよ。ただ、キミももう大人になつたんだなあつて実感してね」

ぶーたれてたキミが懐かしいよ、と手元のスクリーンを指先で撫でた。その仕草がや

けに子供っぽく見えた。

「……もう守られてばかりじやいられなくなつたからな」

「ソーマ君？」

弾かれたように顔を上げたセナの目を見ながらはつきりと言った。

「お前を独りにしねえ」

すると、これでもかというほど目を見開いた後、おもむろに瞼が伏せられた。

哀愁漂う夢い笑みのままポツリと呟いた。

「やつぱり言っちゃってたか……。言うつもり、なかつたんだけど」

「……悪い」

「いいよ。ソーマ君のせいじゃないし。私も言っちゃったような気がしてたから」

失明したセナが錯乱した時に口走った悲鳴は今でも耳に残っている。

“また独りにしないで”。セナの胸の奥に隠されているモノを端的に表したその言葉。

当時は記憶が曖昧だったが、落ち着くに連れて何を言つたのか朧げに思い当たつたらしい。

何にせよ、あまり触れられたくない話であることは明白だ。

しかし俺にとつてはいずれ直面する話もある。俺自身がセナのそばに居たいと願う限り目を逸らすことはできない。

だからこそ今このタイミングで持ち出した。どうすればセナを守れるのか、その答えを見つけるために。

とは言え、それきり黙つてしまつたセナになんて声をかければいいかわからず、ふるふると震える睫毛を見つめた。

気弱に揺れ動く瞳がこちらを向いたのはしばらくした後だつた。

「……聞かないんだね」

「このご時世口クでもない話には事欠かねえからな。聞いても聞かなくても同じだ」

過去に何があつても、何をしていたとしても、この気持ちは変わらない。

それに誰にでも言いたくない秘め事の一つはあるものだ。もちろん俺にだつてある。「言いたかったのはお前の過去についてじやねえ。俺の勝手な宣言だ。気にすんな」

この手の気遣いをした試しがないせいでひどくぶつきらぼうな口調になつた。が、人の機微に聴いセナには十分だつたらしい。きもち明るい色が射した。

「……相変わらず優しいね。ソーマ君は」

「どうだかな。邪魔つて言われてもつきまとつてやるつて話だぜ」

冗談めかして言つてやると「それは困つたねえ」と言葉とは裏腹の顔で返した。

そして暗い雰囲気に戻さないようそのままの調子で続けた。

「ごめん。やっぱソーマ君でもまだ言えないかな。私自身も踏ん切りついてないから

さ」

「別に無理して話そうとしなくていい」

「軽い気持ちで言えるようになるまで秘密つてことで」

さつきまでの自分を吹き飛ばすかのようベッドから飛び起きたセナはズカズカと側まで歩いてきて、ぬいぐるみにでも相手にするノリで背後から抱き着いてきた。

急な奇行に思わず引き？がしそうになつたが、耳元の吐息が少し掠れていることに気づき、そのままにしておいた。

「でも、キミの気持ちは本当に嬉しかった。こんな私でもよかつたらずつとそばにいて下さい」

「……おう」

無愛想な返事にも満足そうに頷き、ことさら強い力を腕に込めてきた。

「おい。いい加減離れる。暑いだろうが」

「ヤダ。今日はこのまま過ごす」

「んな冗談言つてる暇あつたら勉強してろ」

「はーい。勉強に戻りまーす」

すると器用に長い足でタブレットを引っ張ってきて手に取つたと思ひきや、体勢はそのまままで読み始めた。

俺の目の前に画面がありそれを肩越しに見ているのだ。てつくりベッドに戻るとばかり思つていた俺はしばらく口が塞がらなかつた。

「……おい。まさか本気で言つてんのか？」

「うん。そうじやないと落ち着かない気分だから。……キミは嫌？」

卑怯な声音と尋ね方だつた。狙つてやつてるのかわからない分タチが悪い。
さつきのことがあつた手前無碍にすることも気が引けた。思い切りため息をつきながら言つてやる。

「……せめてタブレットの位置はえらべろ。邪魔すぎる」

「えへへー。ありがと」

上機嫌な鼻歌を聞きながらこれからどうしようか考えるのだつた。

第17話 リンドウ side

「おはようリンドウ！」

「よう。今日も元気そうだな」

「いつもより元気だよ！」

朝から潰刺な笑みを振りまく奴さんはそこの子供よりも無邪氣だ。

成人したというのにそれでいいのかね。まあ、それが奴さんらしいところでもあるが。

大方、昨日気まぐれで与えた休暇でソーマと仲良くやつたんだろう。

思えばソーマもよく成長したものだ。

言うことは全く聞かねえわ、ようやく聞いたと思えば生意気な口を叩くわ。問題児だったアッシュがあそこまで丸くなるとは……。

セナもセナで超人離れしてやがるから、ああいう普通の女子をやつてるところを見ると妙な安心感を覚える。

「ねえリンドウ。ちよつと集中治療室に行かない? 気分が良いうちに済ませておきたい話があるの」

割と真面目に感心しているとセナが親指で背後のエレベーターを指した。

集中治療室つていうと榎博士のラボにある部屋だ。簡単に言つちまうと、極東支部で唯一支部長の目と耳が届かない場所だ。

何か他人に聞かれちゃマズイ話をしたいらしい。村のことだろうか。特に問題はなかつたと思うんだが。

何にせよミッショソまで暇な手前素直に領く。

榎博士のラボに入るとやたらとデバイスが多く引っ付いた仕事机……仕事機械？それに着いていた。

「おや。まだソーマ君への資料は出来ていないんだが」

「いえ、その件で来たんじゃないんです。隣の部屋貸してもらえませんか？」

「そんな喫茶店のようなノリで使う場所ではないんだけどね。まあ、何か事情があるんだろう？好きに使うといい」

「助かります。あ、くれぐれも盗聴しないでくださいよ？」

「そう言われたらしたくなるのが人の性……冗談だよ。冗談だからその掲げた右手を降ろしてくれ」

「約束を破つたらそういうつもりで」

肩をすくめて作業に戻つたのを尻目に行こうと歩き出すセナ。

トントン拍子で進む二人のやり取りに置いて行かれつつもセナに連れられる形で集中治療室に入つた。

「お前さんたちずいぶん仲が良いんだな」

「いつものことだよ。あの人、すぐちよつかい出してくるからあれくらい言つとかないと自重しないんだ。好奇心が服を着て狐の皮を被つたような人だから」

「そこは人の皮つて言つてやれよ、一応さ」

「本人が喜んでるからそれでいいの」

喜んでるんですけど。天才の考えることはよくわからんな。

そんな苦手意識があつてあんまり榎博士とは関わりがない。

無駄話はさて置き、どつかりベッドに腰掛けたのを皮切りに本題が始まつた。

「支部長の身辺調査の件なんだけど、結局エイジス島に潜入捜査したの？」

「いや、してねえ。入るためのコードキーは手に入れたんだが、それがあつさりと手に入つたもんできな臭くてな。戻じやねえかと睨んでる」

「賢明だつたね。自分の周りを嗅ぎまわつての輩を誘き寄せるための罠だよ、ソレ。下手に潜入したらその場でお縄についてたと思う」

俺もそうかもと思つていたが、何の疑いもなく戻と断定してくるとは思わなかつた。するとセナは呆れたような表情で言つた。

「考へてもみなよ。セキュリティとかネットワークに精通してゐるヒバリちゃんならともかく、ゴッドイーターつてこと以外はただのおじさんに過ぎないリンドウがちょっと頑張つただけで手に入るような場所に重要機密に繋がる鍵を置くわけないでしょ」「正論だがおじさん呼ばわりはやめような？自分で言うのはいいが他人に言われるのはダメだ」

「なら他の成果も出してもらいたいね。それ如何で前言を撤回するよ」

芝居掛かつたやれやれ顔が絶妙に腹立つ、

だが俺にもちやんとした用意がある。すぐに撤回してもらうさ。

「一ヶ月近くエイジス島に物資を搬送する貨物船の中身を調べてみた」

「うん？」と首を傾げたものの、すぐに合点がいったようで「へえ。やるね」と笑みを剥いた。

察するの早すぎるつてお嬢さん。これ思いつくのに結構時間がかかったんだが。

地頭の違いを見せつけられて無駄な傷を負つたのを隅に追いやつて報告を続ける。

「中身の大半は液状化されたコアだつた。十中八九俺たちが特務で集めたものだろう。建設に必要な鉄骨とかはほとんどなかつた」

「なるほどねえ……。それ、かなりヤバくない？」

「ヤバイな。どう考へても」

一見、対アラガミ装甲壁の材料として搬入しているように思えるだろうが、装甲壁つてのはそう単純に作れるような代物じやない。ぶどうパンじやあるまいし適当に鉄と混ぜ混ぜすれば出来るものじやないのだ。

エイジス島内部で装甲壁を作っているつて線もなくはないが、それはあまりに非効率的すぎる。極東支部内にそれ用の工場があるんだから、そこで作つて出来たものを持つて行くのが普通つてもんだろう。

つまり、トラックに積まれた大量のコアはエイジス計画に関係ないものであり、建築以外でコアが必要なものと言つたらもうアラガミの育成しかあり得ないだろう。

それこそがエイジス計画の裏で進められている謎の計画の正体。まさか本当にアラガミを生み出してやがつたとは恐れ入る。

「それにしてもあんまり驚かないんだな。俺は震え上がつたもんだが」

「もしかしたらつて思つてたから。アラガミの製造つて実は随分前から考えられてたことなんだよ。『アラガミ進化論』つて言うんだけどね、提唱したのがヨハネス支部長の実弟さんなの」

「それを兄が利用したつて訳か……。今でこそ納得できるが、思いつくには飛躍し過ぎじゃねえか？」

「少し前に終末捕食の話を聞く機会があつてね。火のない所に煙は立たないつて言う

し、やけにコアを要求してきてるでしょ？ 嫌な予感はしてたんだよ」

セナの勘の鋭さに舌を巻くしかない。あまりに荒唐無稽で考えもしなかつたわ。

「まあこんなとこですかね。それで准尉殿、前言の件は」

「及第点としましょう。撤回します」

おふざけをおふざけで返してくれるのはコイツとサクヤくらいだから気が楽だ。

姉上は超真面目だからなあ……。

さて、ここまで話がまとまるごとに残つた議論は一つだ。

「……どうやつて本部に報告する？」

「難しいねえ……。ぶつちやけ物的証拠は皆無で想像で語つてるだけだから、そのまま報告したところでどうにもならないよ」

「ならエイジス島に潜入するか？ 一番手つ取り早いぜ」

「それはあり得ない。最低でも本部からのバックアップがないと無理」

「ならどうすんだ。このまま野放しにするのが一番ヤバイつてのに」

セナはこめかみに指を添えて瞑目した。

遙かに歳下の部下に考え方をさせてばかりじやアレなもんで一応俺も考え方を巡らせてみるが、やはり思いつかない。

いつそのこと何とかして本部の連中を引っ張ってきてエイジス島の強制捜査でもや

らせてみるか？それが出来たら悩むことはねえんだけどよ。

しばらくしてセナが口を開いた。

「まだ報告しなくていいと思う」

「そりやまた何で？」

「まず一つに、さつきも言つたけど報告に足る証拠が皆無だから。これじゃ本部も動いてくれないし、仮に動いてくれても支部長にシラを切られやすくなる。私たちも支部長の目的がわかつてないんだから無闇に捜査したつて空回りする」

そして二つ目、と大きくため息をついた。

「意外と時間はあるかもしないってこと。支部長は前々から特殊なコアを欲してた。たぶんそれがないと計画を実行出来ないんだと思う。」

結局ハンニバルのコアは望んでたものとは違つたらしいし、最低でも次の新種が見つかるまで猶予があると見ていい

「三つ目は？」

「そもそも育てるアラガミが私たちの手に負えない可能性が高いんだよ。仮に私たちが集めたコアが全部そいつが食つてるとしたらハンニバルなんか目じやないくらいヤバイ代物になつてはす。下手に突つづいて支部長がアラガミを解き放つたら手に負えなくなる可能性が高い」

よくそこまで考えが回るもんだ。浅知恵で及第点貰つたのが恥ずかしいレベルだ。

「だがそのアラガミがエイジス島で暴れてないってことは支部長が上手く管理出来てるつて訳だろ？そこを突くことは出来ねえか？」

「その考え私としてはアリだと思うけど、それにはやっぱりエイジス島内部の情報が必要になる。現状じや打つ手なしだよ」

お手上げー、と言いながら肩を竦めたセナだが、ふと眉を顰めた。

まるで嫌な予感がよぎつたような顔つきにつられて胸の内がざわついた。

「……言つてて思つたんだけどさ。支部長の身辺調査つていう本部からの依頼、今思うとかなり変じやない？」

「そうか？……そうなのか？」

「普通その手の際どい任務をちょっと腕が立つだけのゴッドイーターに出そうと思う？

私ならヒバリちゃんに出すよ」

「特務を任されてるからこそ俺らに声がかかつたんだろ。俺たちは謂わば支部長の懷に入つてるんだぜ？」

「けど肝心の中身がわからずじまいじやん。私たちだけじやどんなに頑張つてもここが限界だよ。こうなる事くらい本部もわかつてたはずでしょ。何せ最終的には電子セキュリティを破らないといけないんだからさ」

「……言われてみればそう思うが、本部はそこまで深く探ろうとしてなかつたつて線
だつてあるだろ。身辺調査つて言うくらいなんだからよ」

「それだつたら尚更人選がナンセンスつて話になる。その程度のことなら本部直属の諜
報部隊で充分」

つまりコイツは何を言いたいんだ?

その思いを乗せて睨むと、苦々しい表情で呟いた。

「本部と支部長がグルかもしれない」

「……はあ!?

予想外の憶測に剽軽な声が飛び出てしまつた。

だがそれに相応しくらいセナのそれはどんでもないことだつたのだ。

「てことはなにか?この身辺調査つてのは支部長が不審者を炙り出すために仕組んだ
マッチポンプつて訳か?」

「……可能性はある。けど、ちょっと話が立て込んできて勝手に疑心暗鬼になつてるだ
けかもしれない」

ガシガシと乱暴に煉瓦色の髪をかき乱す様に煩雜への憂いが見てとれる。俺より圧
倒的に若いのにこんな七面倒な話に巻き込まれているのだ。よく投げ出さないものだ
と感心すら覚える。

「互いに頭を冷やすのも兼ねて今日はここでお開きとするか」

「そうだね……。そろそろソーマ君パワーが無くなってきたし……」

この部屋に入る前は溌剌としていた顔色が今ではゲッソリてしまっている。早いとこソーマのどこに戻してやつた方がいいだろう。いつからソーマは栄養源になつたんだ。

本部の後ろ盾が無くなつたどころか信用すら出来なくなつた今、俺たちが取るべき行動はかなり限られてくる。

このまま支部長の手駒として働いて知らんぷりを決め込むか思い切つて歯向かうか。いずれにせよ多大なリスクを伴うのは間違いない。今後の身振りには細心の注意を払つてセナとの連携を深めていかなくちやならない。

この事を姉上に伝えるべきなのだろうか……。なるべく巻き込みたくなかつたんだが、俺たちだけじや二進も三進もならないのも確かだ。それに今の俺が頼りに出来て、かつ信頼できる人は姉上くらいしかいない。

「しようがねえか……」

ひとりごちりながら部屋を出ると、相変わらず忙しそうなデスクに着いて作業をしている榎博士が振り向いた。

「随分長く話し込んでいたね。私の予想では20分程度で済むと思つていたんだが」

壁時計に目をやれば時針がぐるりと一周回っていた。内容が内容なだけに仕方ないだろう。

「それはそうと、たつた今ヨハンから君たち第一部隊に伝言を預かつたんだ」

図つたようなタイミングで出てきた名前に思わずセナの顔を見やつてしまふ。が、さつきまでのダウナーな雰囲気はどこに行つたのか、いつもの笑みを浮かべていた。

そして一瞬目だけで睨まれて、それが中で話していた内容を悟られないためのポーカーフェイスであることに気づいて急いで佇まいを正した。

ふむ、と丸眼鏡の奥の細目を光らせながらも榎博士は続けた。

「近いうちにロシア支部から新型のゴッドイーター　がやって来るそうだよ」

「ロシア支部から？　それに新型ですか」

「なんでも本人たつての希望とのことで異動が決まつたらしい。第一部隊に配属されるみたいだだからよろしくつてことだね」

「新型ねえ……。レア物の新型をそう易々手放すものか不思議なもんだが、見方を変えりやヨハネス支部長が特殊なコアとやらを集めラストパートをかけて来たと見ることもできる。

こいつはいよいよ雲行きが怪しくなつてきやがつた。

「わかりました。サクヤたちには俺から伝えておきます」

「助かるよ」

「それでは失礼します」

「背後でシャツと自動ドアが閉まつたのを聞いてから隣を小突く。
「支部長も切羽詰まつてきたってどこか」

「みたいだね。状況も時間もキツくなつてきたし、これ以上の先延ばしは出来ない」
今回の話し合いで得られたのは現状が詰みに近いという事実確認だけだ。進展はない。
暗中模索でこの危機を乗り越えなければならないのだ。

お互に今日何度もわからぬいため息を吐いたのだった。

第18話 セナ s i d e

「支部長。お話があります」

特務の帰り、その足で支部長室に向かつた私はそう言つた。

普通ならばアポを取るのが礼儀だが、特務の報告ついでならば咎められることもないだろう。

いつものポーズで出迎えたヨハネス支部長が「何かな」と返した。

「直談判しに来ました。支部長が裏で進めている計画のことを教えて頂きたいのです」

無感動な顔をしつかり見返しながら述べる。

支部長もまた私を見つめ、おもむろに側の端末に何かしらを打ち込んだ。

それと同時に背後の自動ドアが電子音を発した。完全に閉め切つたのだろう。

「降参を宣言する者の顔とは思えないな」

少しの沈黙の後に支部長がそう言つた。

椅子の背もたれに寄りかかり、膝の上で手を組んだ。

もはや隠すつもりもないのだろう。何のことか、なんて惚ける真似はしなかつた。

「参考までに、君たちがどこまで把握しているのか教えてもらえるかな」

「エイジス計画は支部長が秘密裏にアラガミを生み出すための隠れ蓑であること。本部と支部長が結託していることだけです」

「流石だ、邦枝君。エイジス島に入らざるを得ない状況を作つたつもりだったが、まさか外部だけの情報でここまで読み解かれるとは思いもよらなかつた」

「エイジス島を覗き見したからこそわかつたのですがね」

「覗き見？　どこからかね」

「上からです。送迎のヘリに寄り道してもらつて」

私の言葉に初めて表情を変えた支部長は、やれやれと肩を竦めた。

「まさしく盲点を突かれた訳だ」

そこまで言つて、すつと細めた目が私を貫く。

「だが、こうも思わなかつたのかね？　ここで君を始末すれば話は済むと」

その言葉に緩やかに首を振つてみせる。

「それはあり得ません。もし支部長が私を本気で始末しようと思つていたならば、今頃私は荒野を彷徨つているはずです。本部と結託している支部長ならば神機使いの一人や二人どうとでも出来ます。

追放しなかつたということは私を手元に置く価値があると判断したからです。こう

して私と話す場を設けているのがその証拠です。

少なくとも今私を殺することはしないでしよう」

だが人間誰しも感情的になつてついやつてしまふ生き物だ。

万が一のためにリンドウには二日経つても私と連絡が取れなかつた場合のことを頼んである。

「そして支部長。それは貴方も同じです。私が貴方を殺すことなどはないとわかつているからこそこの場にいる。違いますか？」

私たちの視点だと支部長は未知のアラガミを唯一管理出来る人物だ。

今ここで支部長を始末してしまえば管理者を失つてしまいアラガミが暴走する懸念が生まれる。

膨大なコアを喰らつてきたアラガミの脅威は計り知れない。支部長が管理出来ているのならば管理させ続けるべきだ。

「……つくづく君には驚かされる」

私から目を逸らし、壁に目を遣つた。そこには荒波に呑まれる一枚の板切れの絵が飾られていた。

「やはり君だけは何としてでもこちら側に引き込まなければならない」

今まで聞いてきた中で一番感情のこもつた声音で支部長が呟いた。

「話して頂けるのですね」

「ああ。君は新たな世界の導き手に足る人物だ。是非聞いてもらいたい」

そして支部長は厳かに語り出す。その目に確かな情熱を宿して。

「時に邦枝君。アラガミはなぜ絶滅しないのか、その理論を知っているかな?」

「アラガミは偏食細胞の集合体であり、倒しても空中に微粒子として霧散し、再び他の偏食細胞と結合するから……でしたよね」

「その通りだ。我々人類はその不滅の循環を破る方法を未だ発見できずにいる……。そういう言われている」

「見つけたのですか!? その方法を」

「厳密には循環を破るのではなく、促進させるのだがね」

思いもよらない言葉に耳を疑つたが、すぐに思い直す。

不滅の循環。それによつて何が生じる?

『アラガミ進化論』だ。一巡するごとにアラガミが強大になる。ますます私たちの手に負えなくなる。

それを促進させる? 一体何のメリットが? ……アラガミを育てることが目的?

まさに支部長がしていることじやないか。そのアラガミで何を――

そこまで考えて、ふと一つのワードが頭に過ぎる。

終末捕食。

アラガミ同士が喰らい合い、地球規模まで成長した最後の一匹が地球そのものを捕食するという終末論。

科学的根拠のない机上の空論と言われている都市伝説。

支部長はそれを人為的に引きおこそうとしているのか？

「それは博打すぎです！」

思わず口に出すと、支部長は小さく微笑んだ。初めて自分の理論について来れた者を見つけた学者のような笑みだった。

「可能性を認めた者は、君で二人目だ」

「……一人目は榎博士ですか。いや、そもそも支部長の計画は博士が事の発端なのか……？」

後半は独り言だが、支部長の様子を見る限り間違つていらないようだった。

「終末捕食が終わつた後のことか、終末捕食そのものか。数年前にすでに榎博士が解明していたんですね」

支部長のアラガミ育成はエイジス計画と同時に始めたはずだ。となればそれ以前に終末捕食の論理的立証が成されていなければおかしい。

支部長は呆れたような笑みをこぼした。

「ペイラーがただの放浪者だつた君を雇用するよう推した理由がよくわかる。一を聞き十を知る者とはよく言つたものだ」

初めて榎博士と出会つた時の記憶が蘇るが、それは隅にやり言及する。

「支部長のアラガミを最後まで育てきり、終末捕食を引き起こすことで地上のアラガミを一掃し、一部の人類はエイジス島に籠り終末捕食を逃れる……。

エイジス島が耐えられるか甚だ疑問ですが、仮にそれが叶つたとしても、そもそも終末捕食に至るまでそのアラガミを制御できるものなのか、終末捕食後に地球が残つているのか、その環境は人類が生きていく環境なのか、本当にアラガミは絶滅しているのか。

不確定要素が残りすぎています。私にはあまりにも性急に思えますが」

それは榎博士も承知のはずだ。それを分かつた上で計画に加担しているのか、はたまた解決策を講じているのか。

あの人のことだから興味深いってだけの理由かもしねれない。……本当にそれがありそうで怖い。

そんな内心を読んだのか支部長が言う。

「ペイラーは辞退したよ。君とは違う意見だつたがね」

「よかつた……あの人にも自重する心はあるんだ……」

「とすると私はペイラー以上の狂人と言つたところかね？」

「間違つてはいないでしよう。結果はどうあれ、支部長は人類のほとんどを死滅させた狂人として歴史に名を残すことになりますからね」

「私の悪名が語り継がれるような文明が残ることは私の本望だ。その調子で歴史を重ねてほしいものだ」

本気で人類のために尽力しているからこそタチが悪いと付け加えたかったが、その心が本物であることは過去の支部長の功績が証明している。

支部長とてその計画を実行するのに躊躇いがなかつたはずはない。人類という莫大な文明がその肩にのしかかっているのだ。支部長はおくびにも出していないが、その重責はおしてはかるにあまりある。

カルネアデスの板を担う支部長の覚悟を茶化することは、私には出来なかつた。

「邦枝君の言う通り、博打であることは承知している。だが勝算は高いと見込んでいる」「……理由をお聞かせください」

「まず終末捕食までにアラガミを制御しきれるのかという点だが、実はもう終末捕食の直前まで来ているのだよ」

「何ですって!? もうそこまで成長しているのですか!?」

「当初の予定ではこの時期はまだ成長途中のはずだつたが、君の働きが想像以上のもの

だつたのだ。嬉しい誤算だつたよ」

「……最後に必要な物は特殊なコアという奴ですか」

『特異点』と呼んでいるものだ。それが終末捕食を引き起こすためのトリガーとなる』
私が思つていた以上に事態は切羽詰まつっていたようだ。もし支部長の思惑に気づく前に『特異点』を取つてしまつていたらと思うと背筋が凍る思いだ。

「次に終末捕食の後に地球が残つているのか。これについても問題はない。そもそも、終末捕食というシステム自体がそうなるようにプログラムされている」

「どういうことでしようか」

「終末捕食とは地上の全ての生命体を一体のアラガミという器に集約し、生命を再分配する現象なのだ。地球というパソコンが積もり積もつたバグを掃除するために行う『初期化』というイメージだ」

「……俄かに信じがたいですが、地球そのものが『初期化』を望んでいるからこそアラガミは不滅のシステムとなるよう設計されているとも言える……」

「ペイラーの理論では地球はすでに何度か『初期化』を行なつており、我々が生きる時代はその周期の終わり目に重なるという。

このことから終末捕食の後でもアラガミは絶滅しないことが確定しているが、『初期化』の周期は数千年という単位で行われる。そしてアラガミが現れたのは数十年前。

“初期化”の直前に活動を始めることがわかっている。

アラガミを“初期化”するための装置だとするならば、“初期化”直後の地球……最短でも千年の間は活動を停止するはずだ

「その間にアラガミを死滅させる技術を開発し、無理であるならば再び循環させる。そういうことですか」

支部長は大きく頷いた。

理屈としては筋が通っている。だが不可解な点は残っている。

「であれば、なおのことエイジス島だけで“初期化”を逃れられるとは思えません。その程度で逃れられる強制力であれば一つ前の周でも逃れた人類がいたはずです」

尤も、前の周では終末捕食を解明出来ていなかつた可能性があるし、逃れていても人類の存続に精一杯で技術を存続出来なかつたなどの可能性もある。

しかしその可能性こそが終末捕食を引き起こしてもどうしようもないという論拠になり得る。

「終末捕食を逃れる術については心配に及ばない。エイジス島は発射台に過ぎないのだから」

「発射台？ 何のですか」

「宇宙^{ロケット}を渡る方舟だ。終末捕食は地球を“初期化”するもの。ならば地球の外にいれば

影響はないはずだ。終末捕食が終了したと同時に地球に帰還する」

完全に想定外の内容に啞然となる。

宇宙開発は不可能と言われており、その足がけであるロケット技術があるなどカケラも聞いたことがなかつた。

私の驚愕は想定内だつたようで「アラガミとの戦争は無駄ではなかつたということだ」と皮肉交じりに補足した。

「技術の存続は電子媒体に技術を保存し搭乗員に技術者を優先することで可能と判断した。

だが、終末捕食を逃れた後の環境だけは想定し得ない。その点だけは博打になつてしまふ。後は搭乗員たちの手腕によるところだ」

「……他人事のように言いますね」

「方舟に私の席は用意していないのでよ。私の出来ることは全て終了したのだから」

その言葉に嘘偽りはないようで、実に清々しい様子でそう宣つた。

あまりに無責任な物言いにむつとなる所はあるが、支部長はもう何十年と人類の存続に尽力してきた功労者だ。

この計画に全てを費やすと決意した故の脱力なのかもしれない。

「これが私が進めている方舟計画の全てだ。^{アーヴ}邦枝君が次世代の指導者としての資質があ

ることはこの場に立っていることが証明している。君には是非方舟に乗つて欲しい」

どうかね、と余談を許さない気迫で問う。

正直なところ、話がぶつ飛び過ぎてて飲み込みきれてないので返答に窮する。

私は支部長が悪事を働くためにアラガミを育てていると思っていた。それが蓋を開けたら人類を救うためだつたなんて言われても困るというか。

ひとまず大勢の人を見捨てる計画なんて賛成できる訳ないだろ！　とか倫理的な話は脇に置いて、少し状況をまとめよう。

アーク計画は詰まる所、『初期化』までにアラガミを根絶出来る技術を生み出せそうにないから人類の一部を次の世代に逃して技術発展の時間を稼ごうという計画だ。

が、話を聞いている感じ、なぜ今それをする必要があるのか疑問に思わないだろうか。『初期化』の原因は強大化したアラガミと『特異点』が融合することなのだから、そもそもその二つが融合しないよう隔離すれば良くない？　つてことだ。

当然支部長もわかっていることだろうが、あえてアーク計画を実行しようとしていることからそれが出来ない状況にあるらしい。

ここで重要なのがこの二つの要素の発生条件の差だ。

支部長はあえて言わなかつたんだと思うが、『初期化』に必要な物で最も重要なのは実は『特異点』ではなく、強大化したアラガミの方だ。

便宜上このアラガミのことを『Ω』とすると、私は地上全てのアラガミを喰うことでも『Ω』が発生すると思つたのだが、外を見渡せば元気にアラガミが闊歩している現時点では支部長はすでに『Ω』を所有していると言ふ。

もともと終末捕喰は自然発生する現象なのだから当然『Ω』も自然発生するもののはずだ。然るべきときに正しく発生させるために、特殊な工程など必要ないよう設計されているはずだ。

つまり『Ω』は適当なアラガミにある程度コアを摂取させればいくらでも作り出せる可能性があるということだ。

一方で『特異点』はその名の通り特殊なコアを持つたアラガミだ。

コイツの発生条件がよく分からぬのだが、ここ五年くらい私が探し続けても見つからないくらい希少なものなのだから、滅多に発生するものじやないらしい。

ひとまず二、三体だと仮定しておこう。

だとするとこの個体の差が支部長の危惧するところなのだろう。

支部長の知らないところで勝手に『Ω』が発生し、勝手に『特異点』が融合してしまう可能性があるのでから。

アーチ計画の要は次世代に逃げ延びる人々だ。彼らを集めてロケットに乗せるのにどうしても時間がかかるし、ロケットの発射自体にも入念なチェックが必要だろうか

ら、いきなり終末捕喰が来たらひとたまりもないのだ。

終末捕喰がいつ起きてもおかしくない現状、『特異点』を見つけたのならば直ちに捕獲し終末捕喰を起こさなくてはならないということだ。

……どんどん面倒くさい話になってきたぞ。

「すみません。すぐに決めることは難しいので時間をください」

散々待たせた挙句この言いようは我ながら酷いと思うが、支部長は気にした風もないよ
く、

「そうすると良い。これは正真正銘、一世一代の大博打だ。くれぐれも後悔のないよう
考えたまえ」

と言つた。

かなりダメ元で言つたものがすんなり通り肩透かしを食らつた気分になる。

「……いいのですか？ このことを外部に漏らすかもしれないのですよ？」

「構わないよ。『特異点』の存在を確認次第、極東支部全体に通達する予定だつた。多少
時期が早まるだけの話だ」

アーク計画が真実だとわかつたときアナグラは確実に混乱の坩堝に呑まれる。

その『特異点』がいつ現れるかわからない現状で情報が漏れるのは避けたいはずだろ
うに、支部長はそう言い切つた。

それほどまで私にはこの計画に賛同してほしいということなのか。

「わかりました。最低限に抑えるよう善処します」

「君の物分かりの良さを本部の連中に見習わせたいものだ」

「……？」 本部と上手くいってないんですか？」

てつきり本部承認の計画だと思つていたのに。そういうニュアンスで尋ねると、支部長はため息混じりに答えた。

「君らには結託しているように見せかけたが、実際は私の傀儡に過ぎんよ。

アーク計画の概要を説明し、方舟の席を確保すると約束してやれば喜んで言いなりになつてくれた。

奴らは自己保身の塊さ。自分が助かればそれで良いとしか考えていない。

ろくに計画を理解していない癖に呑気な事だと呆れてしまつたよ」

「……本当にそいつらを乗せるつもりですか」

「そんな馬鹿なことするものか。方舟の席に座る者には人類の歴史が託されるのだ。乗せる人員は厳選している。

無論、本部にも真に優秀な人物はいる。極力公正を期しているつもりだ」

眉間に皺を寄せひつそりとため息を吐く様は心労に溢れていた。

リンドウの言つていたことはあながち間違つてはいなかつたようだ。

「お疲れ様です……」

「そう言ってくれるのかね。常人ならば私を、自身を神と思い込んだ傲岸不遜な外道だと罵ると思うが」

「確かに支部長が人類を選別することに思う所はありますが、綺麗事だけで切り抜けられる世界なら、こんな苦労をすることはないでしょ。う。

今を生きるほぼ全ての人たちは皆支部長の恩恵に預かっていますから、支部長にはその立場に立つ権利があると思いますよ」

やろうとしていることは外道に違いないけど、考えられる限りの最善手を打っているに過ぎない。

追い詰められたこの世界を正しく見据えて本気で人類を救おうとしている人物には違ひないのだ。

「随分と私を買ってくれるじゃないか。こうしている今も睨み合いをしていると言うのに」

「それだけ現代建築は支部長に依る所が大きいのです。ソーマ君も認めていましたよ」「ソーマが？……そ、うか」

努めて言葉は少なく、無表情だった。

「君はソーマと仲良くやつてくれているらしいじゃないか。この先もよろしく頼むよ」

「もちろんです。ですが、支部長も最後は親らしいことをしてあげたらどうですか？」

「それは出来ない相談だ。私は家族を人類に捧げた身であり、アレは世界を救うために生まれた存在だ。情など移しても仕方ないだろう」

必要以上に冷たい物言いをするのは、地球と共に死ぬつもりである自分を納得させるためか、そのことにソーマが思う事のないようにならうとしたいのか。

「代わりに君が支えてやつてくれ。私も安心出来る」

「……支部長も私を買っているのですね」

「そうでなければこの場はないよ。君は何故か頑なに固辞していたが、数々の功績の表彰に他意は無かつた」

あの表彰は本部からのものだつた筈だが、先の話も鑑みるにそういうことだつたのだろう。

だつたら昇級しても極東支部を離れることは無かつたのかなあ、なんて思うのは現金か。

「そう、邦枝君は実によくやつてくれた」

独り言のような調子で支部長が言つた。

「先程は何としてでも引き込むと言つたがね。その一方で断つてもらつても構わないとも思つてゐる。

君はすでに、常人が一生で成し得る人類への貢献を上回る働きをした。

辛うじて人類としての責任を果たした程度で退席する私が、君にこれ以上の働きを強要するのは間違っているように思えてならないのだよ。

計画に反対するのも良し、参加して次世代を一般人として過ごすも良し。

それが人類にとつて多大な損失だとしても、君はそれを享受するだけの功績を残した

そこまで言うと、私の目を真っ直ぐに見据えた。

「確かに君は技術開発に興味を持つていたね。

君ほどの才覚の持ち主なら、技術分野で頭角を示すのも近いだろう。

アーヴ計画が成功すれば数年はごたつくだらうが、いずれ現代技術の勉強に専念出来るようになる。

身につけた技術で新天地に迷える人々の安寧を築く、なんてことも君なら出来るだろ
う。

そういう道もあることを忘れないでくれ。

わずかな時間しか用意できないが、十分に考えたまえ。

私が呼びかけるまでが期限だ

「……私は、私のやりたいことをやるだけです」

「良い返事を期待する」

支部長が端末を操作しロツクを解除し、そのままデスクトップに視線を切つた。私も一礼し踵を返した。

電子ドアの音がいつもより鈍重に聞こえた。

第19話 セナ s i d e

「支部長室を後にした私はそのまま榎博士のラボに赴いた。

「来たね」

扉が開くや否や、博士がそう声をかけてきた。

「やつぱり予測してましたか」

「ヨハンが支部長室を電子ネットワークの遮断をした時には、ね。私の盗聴を警戒した
というよりは、むしろ私に知らしめるためにしたみたいだけど……」

やはり考えを変える気はないみたいだ、と博士はひとりごちる。

博士と支部長はフェンリルの前身であるアラガミ研究所の同僚だったそうだが、度々
支部長と意見が別れる事があったという。

今回のアーティクル計画で完全に袂を分かつてしまつたようだ。

「私の所に来たということは、そういうことだと受け取つていいのかな?」

「はい」

私はアーティクル計画に反対だ。その意志は最初から決まつていた。

確かに支部長の計画は現状を鑑みるに最も合理的で勝算の高いものであるのは間違

い
い
ない。

だが、だからといつて無辜の人々を見捨てるという選択肢を許容することは出来ない。

だつて私は見捨てられた側の人間だつたんだから。

人類の選別なんてコロニーが出来てから毎日のように為されていることだ。
居住区が満員だから。食料が足りないから。色々な理由で外に放り出されている。
私は物心ついた時には外に居たからその人たちの気持ちを理解することは出来ない
けど、外がどれほど過酷な場所か身を以て理解している。

今こうして生き長らえているのはひとえに運が良かつたからだ。それを助かる側になつた途端はい見捨てましようつて言うのは身勝手すぎるだろう。

「私がここに来たのはアーヴ計画の代わりになる案を一緒に考えて欲しいからです。た
だ支部長を否定するだけでは無責任なだけですから」

支部長に時間が欲しいと言つたのはこのためだ。

さすがに支部長が何年もかけて練つた計画なだけあって、人類の未来を守るという一

点においてアーヴ計画に穴など一つもない。

今を生きる全人類を救うためには水面下から迫り来る終末捕喰への対策を立てる必要がある。

終末捕喰はいわば地球という星を創つた神がそうなるべしと定めた摂理そのもの。そんなものを確実に打破できる案を数ヶ月で立案しろだなんて無茶振りもいいところのだが、やらなくちゃいけない。

支部長を否定することはそういうことなのだ。

「キミならそう言つてくれると信じていたよ」

私の決意に、博士は狐のように細い目を眼鏡の奥から覗かせ、につこりと微笑んだ。
「世界がどん詰まりだと認めていながらも、世界には夢があると信じている。

君が外の人間のために村を作ると言い出した時私は確信したよ。私と良い友人になるとね」

「友人って……何歳離れてると思つてるんですか」

「友情とは胸に秘めた志を互いに認め合う。それだけのことだ。歳は関係ないさ」

そう嘯きながら手を差し出してきた。

握手とは古来より互いの利き手を制することで武器を隠し持つていなことを示す挨拶として用いられてきた。

その手を取るということは後ろめたいことはないと宣言することと同義であり、それが嘘であつたなら容赦はしないという釘刺しもある。口では友情がなんだと言つておきながら、全くこの人は抜かりないな。

思わず苦笑いをこぼしながら握手に応じた。

「これで私たちは共犯ということですか」

「その表現は実に私好みだ。早速本題に入ろうじゃないか」

手で指示示されたソファに腰を下ろすと、榎博士は狭い部屋を練り歩き始めた。

「さて、ヨハンから概要を聞いているであろう終末捕喰について講義をしたいところだけど、その前にセナ君の口から改めて終末捕喰に対する意見を聞かせて欲しい。私の思考が混ざっていないピュアな意見は貴重なんだ」

「まだ空想の域を出ていないですが……」

「思考実験、大いに結構じやないか。重さは本当に落下速度に関係しているのか？ 1 kgの重りより2 kgの重りの方が速く落ちるのか？ ならば二つを糸で結べばさらに速く落ちるのか……？」

そういった現実というフィルターを無視した空想世界で連綿と物事を考えてきたからこそ人類は繁栄してきたんだ

「ではお言葉に甘えて……。まず用語の導入からしますね。終末捕喰には『莫大なコアを喰らった強大なアラガミ』と『極めて特殊なコアを持ったアラガミ』の二つが必要ですが、前者を『Ω』後者を『特異点』と呼びます」

「ほほう。『Ω』か……。フフフ」
終焉

「な、なんですか急に」

「いやすまない。端的ながらも的を得て いると思つてね。キミらしい表現だ。ヨハンに対抗する意志を表して私も『Ω』と呼ぶことにしよう」

「……もしかして正式名称があつたりします? というか『特異点』って名称があるんで

すから普通はもう片方にもありますよね?? 恥ずかしいことしちやいましたか私!」

「学会で使われている通称程度のものだが、『ノヴァ』と呼ばれているよ」

「『ノヴァ』ですか……。気に入りませんね。そんな明るいイメージの物じやないで
 しよう」

「学会でも終末捕喰は都市伝説として扱われて いるから、みんなあんまり深く考えずに呼んで いるんだ。まあ、名付け親はヨハンなんだが」

なるほど。支部長にとつては新世界の幕開けそのものだからねえ……。

定められた運命を制御し、選ばれた人類を未来へ向けて残さんとする意気込みの表れかもしねれない。

さらつと言つたけど、榊博士は学会で終末捕喰の論理的立証のことを発表して いないのか。

いや、考えてみれば当たり前のことかもしねない。

終末捕喰は約束された人類の滅亡のことだ。それが近い未来確実に引き起こされると立証してしまつたら大混乱に陥るだろう。

混乱に陥るだけならまだいいが、そこからどうせ終わるならとトチ狂つて変なことをしてかし始める奴が現れても不思議じやない。

というか實際そうやつてカルト集団が胸糞悪い事件を引き起こしている。伏せるのは当然だつた。

「話の腰を折つてすまない。続けてもらえるかな」

「終末捕喰の原因は『Ω』と『特異点』が融合することですから、この二つを隔離してしまえば起こらない道理です。

終末捕喰そのものを打破する手段が思いつかない以上、発生しないよう予防するしか手立てがありません。なので私は『Ω』と『特異点』どちらかの抹消、ないしは封印に専念するのが最善だと思います」

「そうだね」

「しかし、その二つのアラガミはどれほどの強さを持つてゐるか不明であることと、それぞの個体数が一体ずつだと限らないことが問題になつてきます。

莫大なコアを喰らつてゐる『Ω』の強大さは想像もつかないので除外しますが、『特異点』はその限りではありません。『特異点』もアラガミですので相応に捕喰を繰り返して

いると思いますが、高く見積もつても指定接触禁忌種くらいかなと予想します

「それって支部が崩壊する覚悟をしないといけないくらい強力なアラガミのはずなんだ
けどなあ……」

「迎撃できる程度のものだと思いましょう。『Ω』と比べたら遙かに現実的ですし
さすがにハンニバルクラスのデタラメさは勘弁してほしいところだが。

「仮に『特異点』を討伐、抹消出来たとしましよう。ここで終末捕喰のシステムを思い返
すと、終末捕喰は地球そのものが望んで引き起こしている現象ですから、『特異点』が消
えてしまうのは地球にとって嬉しいことのはずです。

私が地球なら確実に終末捕喰を発生させるために次善策、『特異点』のスペアを用意す
るか、いつそのこと量産します。それが後者の問題に繋がる訳ですね。

……マジであつて欲しくないので、実際のところどうなんですか？ そこらじゅう
に『特異点』をばら撒かれたら手の打ちようがないんですが

「私もそうなつて欲しくはないね
つまりわからない、と。

まあ、『特異点』は見つかってすらいないんだし仕方ないことだよね。

「だけど一つ朗報がある。『特異点』は一体しかいない
「えつ。 そうなんですか？」

『特異点』とは超高密度の情報集積体のことなんだ。『Ω』がハードだとしたら『特異点』はソフト。終末捕喰という現象のプログラム全てが詰まつた存在だ。

地球としてもしつちやかめつちやかに作れる代物じやないんだろうね」

「ええ……随分アバウトな説明ですね……」

「私自身、終末捕喰が担う役割は解明できただけれど、なぜ地球が終末捕喰を起こしたいと考えているのかまではわかつていらないんだ。神のみぞ知るつてやつだね」

「ならワソチヤン『Ω』も一体しかいなかつたり……？」

「残念ながらそこはセナ君の予想と同じだよ。『Ω』は単なる容れ物に過ぎないからどんなアラガミであれ育ちきれば『Ω』になり得る。言つてしまえば全てのアラガミが『Ω』だ」

「ですよね……。となると唯一の『特異点』を抹消してしまつた場合地球がどういう反応するかが心配だなあ……」

再び『特異点』を一体だけ生み出すのか。ヤケクソになつて大量にばら撒くのか。それとも諦めてくれるのか。

いずれにせよ楽観視することは出来ない。『特異点』が一体だけである現状を維持、すなわち『特異点』を封印する方が堅実だ。

「アラガミの封印、かあ……。そう言えば支部長はどうやって『Ω』を管理してるんだろ」

「さあね。私にも教えてくれなかつたよ。極めて異例なことは間違いないんだが」

支部長に聞いてみるか？ でも支部長だつて『特異点』が一体しかいないことは知つてゐるはずだから、無限に存在し得る『Ω』よりも『特異点』を封印する方が遥かに簡単であることもわかつてゐるはずだ。

『Ω』ほどの強大なアラガミを管理できる技術があるなら『特異点』も管理できる……と
いうより、そんなことが出来たらゴッドイーターなんて要らなくなるだろうし、アーケ
計画だつてやる意味がなくなる。

ならば支部長は『Ω』を管理出来ていない？ なぜ『Ω』は大人しくしている？
……『Ω』自ら望んで支部長の言うことを聞いてゐる？

そんな事があり得るのか？ ……あり得ないと断言することは出来ない。

アラガミの多様性は無限大だ。人間とコミュニケーションを取れるようになる可能
性だつてある。例えば人間そのものに近い進化を遂げるとか。

それはかなり異端な例だが、支部長が『特異点』より『Ω』を優先した事実がその可
能性を後押しする。

「博士はアラガミとコミュニケーションを取れる可能性を信じますか？」

私が思ひ付いて博士が思ひ付かないはずがないだろう。

そういうニュアンスで尋ねると、榎博士はわざとらしく微笑んで見せた。

「あり得ると思うよ。クアドリガがミサイルを発射するように、アラガミは人間が作り出した道具すら取り込むようになつた。

それほど複雑な情報を取り込めるなら、まるで人間というアラガミが現れるのも、そう遠い日じゃないかもしね」

……ん？ ちよつと待てよ。その言い方だと複雑な情報を取り込むと人間に近づく様な印象を受けるんだが。

でも確かにアラガミの高等的存在とも言える接触禁忌種の大半は人を象った部分が多い。アイテールとかアマテラスとかもちろん人間をモチーフにしてるし。

あ、まさか……。

「博士、最初から知つてたでしょ。『特異点』が人間に近しいアラガミかもしねないってこと」

『特異点』は超高密度の情報集積体だ。終末捕喰のプログラムを司るアラガミなのであれば、その情報を適切に処理出来るだけの知能を備えている可能性がある。あたかもパソコンにプログラミングを施す人間の様な知能が。

情報を処理するために知能を獲得する……すなわち人間に近づく。であれば、『特異点』は既に人間に近しい進化を遂げた可能性が高い。

「いきなりそう言つたつて信じてくれないだろう？ キミ自身でその可能性に行き着い

て欲しかつたんだ」

悪びれる様子もなくケロつとそんなことを言う。

ピュアな意見が聞きたいと言つておきながらこの物言いだ。はなから答え合わせをしたかつただけじやないか。

「性格わづる……」

「そう言わないでくれ。第三者の保証が欲しかつたんだ。キミが一人で考へても同じ結論になつたということが大事だつた」

「ムカつくような悔しいような……まあ、それならそうでいいんですけどね。で、いつから気づいていたんです？　まさかついさつきというわけじやないですよね？」

「ふむ。意外と答えにくい質問だね」

どうやらへんが難しいというんだ。気持ちに引き摺られ半目で睨みつける。

「論理的に確信したのは少し前なんだが、そうであつてほしいと願い始めたのはずっと前なんだ」

「願う……？　アラガミとコミュニケーションすることですか？」

「うん。だつて興味深いだろう？　人間とは根本的に異なる知的生命体と会話を交えるだなんて、映画や小説の中でしかあり得ない話だつたんだ」

「……まさか博士がアラガミの研究をし始めたのつて……」

「アラガミの進化にその可能性を感じたから。人類のためにもなるしね」
いけしやあしゃあと宣う榎博士に頭痛を覚える。

なんてこつた……。今の世の中があるのはこのオッサンの気まぐれのおかげだつた
なんて……。この世界脆すぎるよ……。

「まあ、言葉を選ばなければそういうことになつちやうけど、こう見えても人類を守るた
めつていう気持ちはあるんだ。そこは信じてもらいたい」

「そういうとこですよ榎博士。支部長が博士と仲が悪いの絶対そういうとこですよ」
はあつ、と思いつ切りため息をついてやると、さもありなんと肩を竦めるだけだつた。
反省してないなコイツ。

「これで対策思いついてなかつたら腹パンものですよ。あるんでしようね？」

「もちろんあるが、その前に聞いておきたいことがあるんだ」

「またですか」

「いや、今度はちゃんとした質問だ。素直に答えてほしい」

さつきまでの芝居染みた雰囲気は鳴りを潜め、博士は声音を硬くした。

冗談ではないらしいので併まいを直して聞く態勢を取る。

「キミは、アラガミと共生出来ると思うかい？」

「難しいと思います」

「あ、あれ、即答だね？」

「コミュニケーションを取るつて話の流れで大体察してましたから」

「そうかい……」

「それで理由ですが、まずアラガミが遺した傷跡が深過ぎます。

世界の誰もがアラガミに恐怖し憎悪しています。私も例外ではありません。アラガ

ミは人類の敵という概念を覆すにはあまりにも遅いです。

そしてコミュニケーションを取れるアラガミが圧倒的に少なすぎます。

現時点では仮定に過ぎませんが、『Ω』と『特異点』しかそれが出来ない状況で共生だ

なんて無理があります。

どちらか一方を説得出来たとしても私たちを襲つてくるアラガミが減るわけではありませんからね」

パツと思いつくだけでもこれだけの理由が出てくるのだから、博士の提案は夢物語と言わざるを得ない。

「ですが、終末捕食を止めるという観点で見れば悪い話ではないと思います。結局は『初期化』を先延ばしにするだけですが、対策を考える時間が得られるのならしない手はありません」

というか、今のところそれしか方法がないからそうしないといけないのだが。

「兎にも角にも、まず『特異点』を探し出さなくては話が進みません。ぶつちやけ『特異点』が普通にヤバいアラガミである可能性の方が高いですしひう……。だが私は諦めないぞ。少しでも可能性があるならとことん追求する覚悟だ。こればかりは譲れない」

「わかりましたよ……」

味方に選ぶ人間違えた気がしてきた。ひつそりと頭を抱える私だつたが、「人間が受け入れられるかはわからないけれど、少なくとも、アラガミは人間を受け入れることが出来た」

意味深に言つた博士に顔を上げる。

「それはどういう……？」

「そのままの意味さ。私はこの目で、アラガミが意志を持つて人間と共に生きている所を見た」

妄言とすら言えることを大真面目に語る博士をまじまじと見つめる。

一体何を言つてるんだこの人は……？

「言つたろう？ 論理的な確証を得たのは少し前だつて。君もよく知つていることなんだが」

意地悪くばやけた言い方をする。

少し前つていつの話だよ。学会があつたとかそういう話は全然知らんぞ私。でも知つてるつて言うんだろ？ 少し考えるか。

アラガミが人間を受け入れて、それを博士が見た……？ アラガミの活動を観察した……確証を得た……オラクルの働きを解明した……最近のこと——「……私がアラガミ化を治したこと……？」

「その通りだ」

「えつ、でもそれは博士が治したんじや……？」

脳に入りきらなかつたオラクル細胞が神機に戻ろうとしたところトラブつて腕に駐在してアラガミ化。だから腕に溜まつたオラクル細胞を神機に戻すつてことで三ヶ月ずっと神機に繋げっぱなしにして处置してもらつたはずなんだけど。

「治療法を提案したのは私だが、それ以外は何もしてないよ。いや、何も出来なかつたと言つのが正確かな」

『インパルスエッジ』の技術、すなわちオラクル細胞の活動は途中経過を観察したことで得られたものだからね、と付け足す。

「じゃあ何でオラクル細胞が神機に戻つたんですか……？」
「言わなくともわかるだろう？」

オラクル細胞が自らの意思で戻つたからとでも言うのか。

一体全体どういうことだ？ なぜ急に意思なんてものを持つたんだ？ 意思を持つたなら、むしろ私を喰い殺そうとするだろう。アラガミは人間を殺すために生まれた存在なのだから。

全く話が見えず混乱する私を捨て置いて博士は語る。

「なぜ君だけ沢山の神機と適合出来るのか。なぜ『スキル』を行使出来るのか。なぜ適合率が非常に高いのに第一世代の神機としか適合出来ないのか……。君がアラガミ化を治したことで諸々の謎が一気に解けた。尤も、それは必然的^{インブリシット}な導出だったんだが」

「ちょっと待つてください！ 全然ついていけないんですが……！」

「少し話し込んでやったみたいだね。まあ、今の話はまた後日に改めるとしよう。君としても『特異点』のこと集中したいだろう？」

半ば強引に話を打ち切られてモヤモヤしたものが胸に蟠つたままその日は解散となつた。